

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集

# 祈年遺跡Ⅲ

国道195号道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第3分冊 VII区

2012.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター









# 祈<sup>き</sup>年<sup>ねん</sup>遺跡Ⅲ

国道 195 号道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第 3 分冊 VII区

2012.3

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター



## 例 言

1.本書は平成19年(2007)から平成21年(2009)まで実施した国道195号道路改築(通称あけぼの道路)に伴う埋蔵文化財調査<sup>きねん</sup>祈年遺跡の発掘調査報告書である。

祈年遺跡は高知県南国市<sup>ここめ ひがしごき しもすえまつ</sup>小籠、東崎、下末松に所在する。本報告書はI区からX区の調査区の内、Ⅶ区の結果報告である。

2.遺跡名は当初「<sup>ししまだ</sup>土島田遺跡」としていたものの、「祈年遺跡」に変更した。

3.高知県から委託を受け、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査及び報告書作成を行った。

4.本書の作成は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが行った。

編集実務及び執筆は前田光雄((財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 専門調査員)が行った。

5.Ⅶ区が発掘調査は平成20年度に実施した。発掘調査担当者は山本哲也(同 第1班長)、安岡猛(同 専門調査員)、平成22、23年度整理作業担当者は前田で近藤孝文(同 専門調査員)の協力を得た。

6.現場発掘作業での図面、写真等のないものがあり、航測図面しかない遺構については、本報告書に図、写真、数値データ等が提示できなかったものがある。

7.発掘調査から整理作業で多くの方々、高知県中央東土木事務所等の諸機関に協力を頂いた。出土遺物等については(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター職員出原恵三、吉成承三、池澤俊幸、筒井三菜、久家隆芳の諸氏から教授頂いた。感謝したい。

8.本遺跡の資料等は一括して高知県立埋蔵文化財センターに保管している。遺跡名は「祈年遺跡」とし、略記号は「NS」でそれに西暦年度略を冠し、「07-NS」と言う具合に遺物注記等は記録した。



## 本文目次

例言 / 本文目次 / 挿図目次 / 表目次 / 写真図版目次 /

第 I 章	VII 区の調査概要	1
第 II 章	VII 区の調査成果	7
第 1 節	竪穴建物跡	7
第 2 節	掘立柱建物跡	34
第 3 節	壺棺墓	51
第 4 節	土坑	53
第 5 節	溝状遺構	60
第 6 節	柱穴跡	67
第 7 節	性格不明遺構	73
第 8 節	小結	77
	参考文献	

写真図版

報告書抄録



## 挿図目次

第1図	祈年遺跡位置図	1	第36図	SB5遺構図	38
第2図	調査区配置図	2	第37図	SB6遺構図	39
第3図	Ⅶ区全体図	3	第38図	SB7遺構図	40
第4図	Ⅶ-1区全体図	4	第39図	SB8遺構図	41
第5図	Ⅶ-2区全体図	5	第40図	SB9遺構図	43
第6図	ST1遺構図	9	第41図	SB10遺構図	44
第7図	ST1遺物実測図(1)	10	第42図	SB11遺構図	45
第8図	ST1遺物実測図(2)	11	第43図	SB13遺構図	46
第9図	ST1遺物実測図(3)	11	第44図	SB14遺構図	47
第10図	ST2遺構図	12	第45図	SB16遺構図	48
第11図	ST2遺物実測図	13	第46図	SB2・4～8出土遺物実測図	49
第12図	ST3遺構図	15	第47図	SB9～11・13・14出土遺物実測図	50
第13図	ST3遺物実測図(1)	16	第48図	SG1遺構図	51
第14図	ST3遺物実測図(2)	17	第49図	SG2遺構図	52
第15図	ST3遺物実測図(3)	18	第50図	SG出土遺物実測図	52
第16図	ST3遺物実測図(4)	18	第51図	SK10遺構図	54
第17図	ST4遺構図	19	第52図	SK15遺構図	55
第18図	ST4遺物実測図	20	第53図	SK24遺構図	55
第19図	ST5遺構図	21	第54図	SK27遺構図	56
第20図	ST5遺物実測図	22	第55図	SK33遺構図	56
第21図	ST6遺構図	22	第56図	SK10・15・24・27出土遺物実測図	57
第22図	ST6遺物実測図	23	第57図	SK34遺構図	58
第23図	ST7遺物実測図	24	第58図	SK38遺構図	58
第24図	ST7遺構図	25	第59図	SK33・34・38出土遺物実測図	59
第25図	ST8遺構図	26	第60図	溝状遺構図	65
第26図	ST8遺物実測図	27	第61図	溝状遺構出土遺物実測図	66
第27図	ST9遺構図	28	第62図	柱穴出土遺物実測図(1)	71
第28図	ST9遺物実測図(1)	29	第63図	柱穴出土遺物実測図(2)	72
第29図	ST9遺物実測図(2)	30	第64図	SX1遺構図	73
第30図	ST10遺構図	31	第65図	SX2遺構図	74
第31図	ST10遺物実測図(1)	32	第66図	SX3遺構図	74
第32図	ST10遺物実測図(2)	33	第67図	SX5遺構図	75
第33図	SB1遺構図	35	第68図	性格不明遺構出土遺物実測図	76
第34図	SB2遺構図	36	第69図	Ⅶ区竪穴建物跡時期別変遷図	78
第35図	SB4遺構図	37	第70図	Ⅶ区掘立柱建物跡全体配置図	78

## 表目次

第1表	竪穴建物跡一覧表	7
第2表	掘立柱建物跡一覧表	34
第3表	壺棺一覧表	51
第4表	土坑一覧表	53
第5表	溝状遺構一覧表	61
第6表	性格不明遺構一覧表	73
第7表	遺物観察表	80

## 写真図版目次

- |      |                        |      |                                   |
|------|------------------------|------|-----------------------------------|
| 写真 1 | Ⅶ区空撮                   | 写真21 | Ⅶ区ST1、2遺物                         |
| 写真 2 | Ⅶ区空撮・合成写真              | 写真22 | Ⅶ区ST2、3遺物                         |
| 写真 3 | Ⅶ-2区空撮、Ⅶ-1区空撮          | 写真23 | Ⅶ区ST3遺物                           |
| 写真 4 | Ⅶ-2区全景、Ⅶ-1区全景          | 写真24 | Ⅶ区ST3遺物                           |
| 写真 5 | Ⅶ-1南区全景、Ⅶ-2区検出         | 写真25 | Ⅶ区ST3～5遺物                         |
| 写真 6 | Ⅶ-2区中央部検出、Ⅶ-1区検出       | 写真26 | Ⅶ区ST6～9遺物                         |
| 写真 7 | Ⅶ区ST1                  | 写真27 | Ⅶ区ST9遺物                           |
| 写真 8 | Ⅶ区ST2                  | 写真28 | Ⅶ区ST9、10遺物                        |
| 写真 9 | Ⅶ区ST3、ST4・ST5          | 写真29 | Ⅶ区ST10遺物                          |
| 写真10 | Ⅶ区ST4・土層、ST6           | 写真30 | Ⅶ区ST10、SB2、4、5、7遺物                |
| 写真11 | Ⅶ区ST6・土層、ST7           | 写真31 | Ⅶ区SB7、8、9、10、11遺物                 |
| 写真12 | Ⅶ区ST8                  | 写真32 | Ⅶ区SB13、14、SG1、2、SK10、15遺物         |
| 写真13 | Ⅶ区ST9、ST10             | 写真33 | Ⅶ区SK15、24、27、33遺物                 |
| 写真14 | Ⅶ区SB全景、Ⅶ区SB検出          | 写真34 | Ⅶ区SK33、34、38、SD1、4、7、8遺物          |
| 写真15 | Ⅶ区SB2、4、5、7、8、9、10     | 写真35 | Ⅶ区SD9、14、30、37、39、40、45、柱穴<br>跡遺物 |
| 写真16 | Ⅶ区SB11、13、14、16、SG1    | 写真36 | Ⅶ区柱穴跡遺物                           |
| 写真17 | Ⅶ区SG2-1・遺物、SK15        | 写真37 | Ⅶ区柱穴跡遺物                           |
| 写真18 | Ⅶ区SK15・遺物、SK17、SK21    | 写真38 | Ⅶ区SX1～3、5遺物                       |
| 写真19 | Ⅶ区SK21、SK30、SX2、3、5、P1 |      |                                   |
| 写真20 | Ⅶ区ST1遺物                |      |                                   |



# 第 I 章 VII区の調査概要

本調査区では弥生時代から近世までの遺構密集度が高い。弥生時代の竪穴建物跡は5軒検出しており、直径8m近くを測る大型の円形の竪穴建物跡が見つかった。中には六角形を呈する建物跡も検出している。溝状土坑、壺棺等も検出している。溝状土坑は長さ1m、幅40cm程度で土坑内からは土器が纏まって出土している。壺棺は建物内で検出しているものの、建物が埋没した後に壺棺が埋置されたものと考えられ、壺棺としては今回の全体の調査区で西端に位置している。

古墳時代は竈付きの建物跡を5軒検出した。方形の建物跡である。ST4、ST6の2軒は極めて近接していることから時期差があったものと考えられるが、6世紀末から7世紀前半にかけての短期間のうちに収まるものである。

また建物跡近くでも土坑墓が1基見つかった。古墳時代の集落内での検出例は高知県では初めてのものであり、極めて異例の土坑墓である。長さ2m弱、幅60cmから80cmの長方形を呈しており、深さ40cmから50cmのものである。土坑内から須恵器、瑪瑙製勾玉、ガラス玉破片等が出土していることから、墓の可能性が極めて高く、遺物は副葬品と考えられる。また炭化物が底面近くから纏まって出土しており、棺が埋置されていたと考えられる。

古代については掘立柱建物跡を検出している。方形の掘り方を持つものもあり、また条里に沿っていると考えられる溝も数条検出しているところから、律令体制下の諸施設の可能性がある。

近世については、大型のハンダ土坑が6基程並んで見つかり、近くには井戸跡も1基検出した。ハンダ土坑は赤土を固め、桶を置き、水を溜め、何らかの作業をしていた可能性のある遺構である。周りから近世の柱穴も見つかり、作業所の可能性が考えられる。

なお、調査は二ヶ年度に亘り調査を行っている。更に初年度の平成20年度は南側部VII1区、北側部VII2区に調査区を細分していたが、一つの調査区として遺構名は通し番号に変更した。

執筆担当者:前田光雄

調査担当者:山本哲也 安岡猛

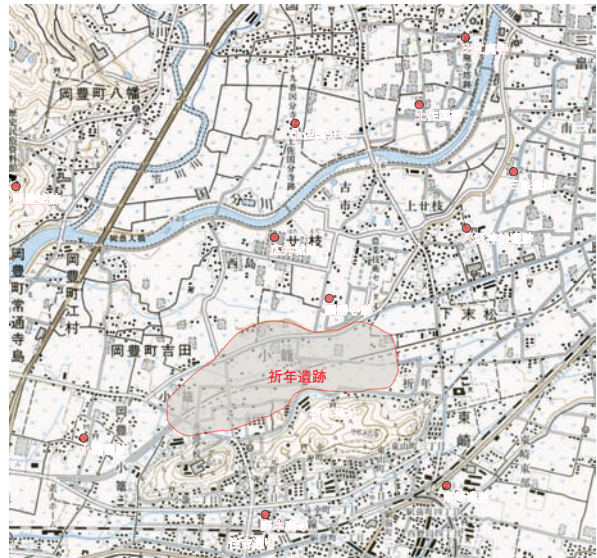
調査期間:平成20年11月12日～平成21年3月19日、平成21年6月19日～平成21年9月8日

調査面積:1,900㎡

時代:弥生時代後期～近世

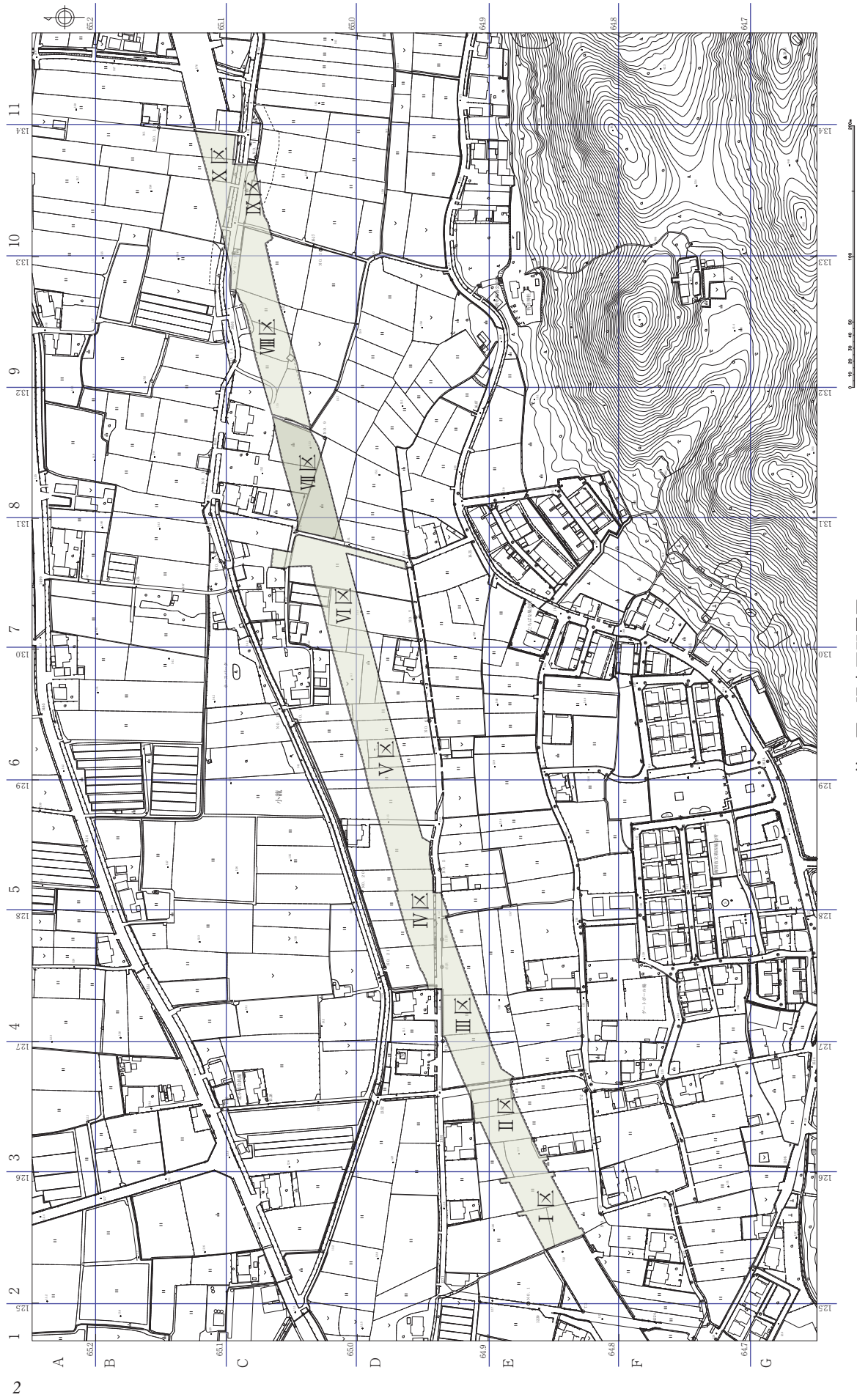
検出遺構:弥生時代竪穴建物跡5軒、土坑8基、古墳時代竪穴建物跡5軒、土坑1基、古代掘立柱建物跡6棟、溝約30条、他

遺物総点数:約6,850点



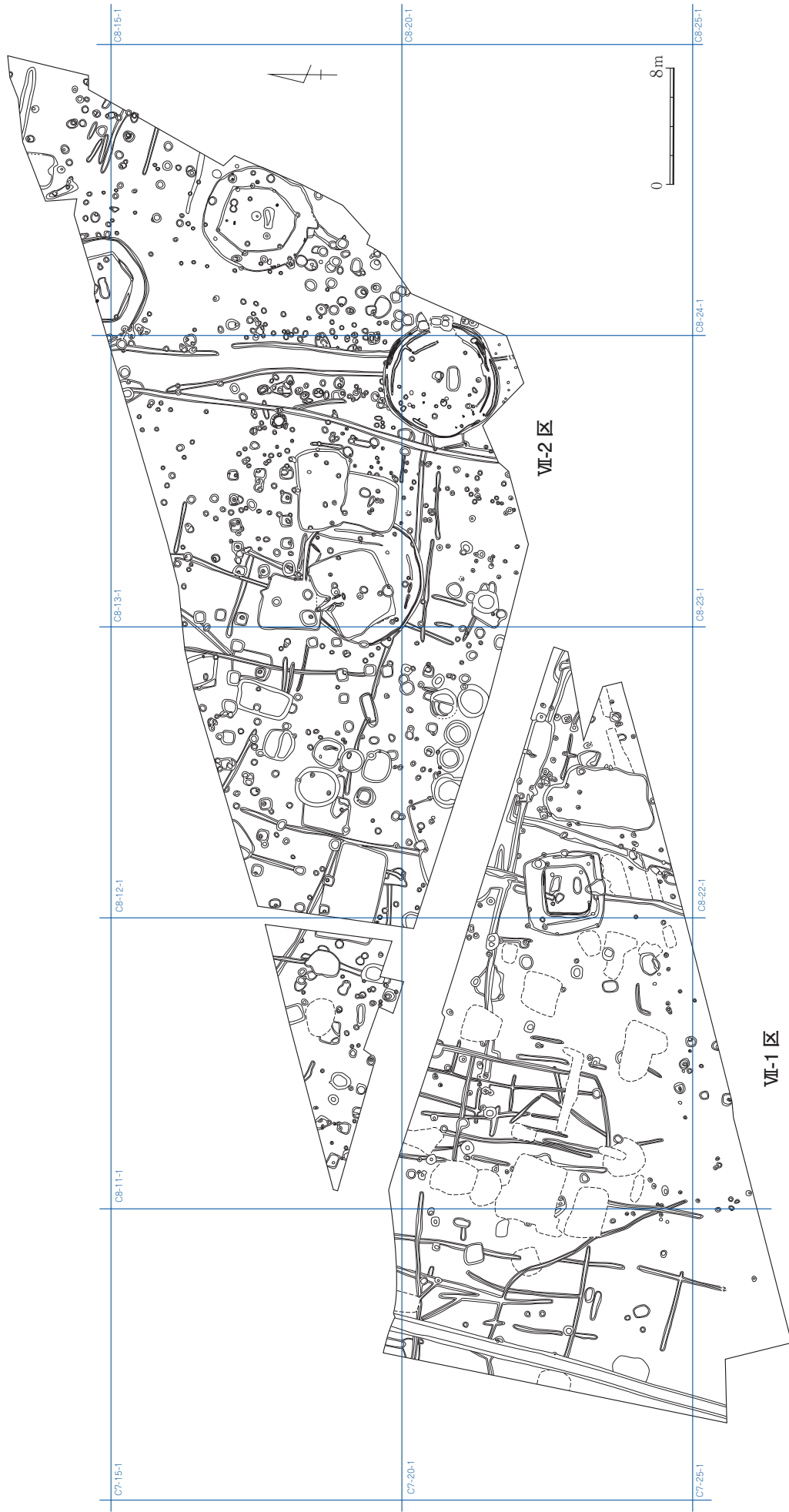
第1図 折年遺跡位置図



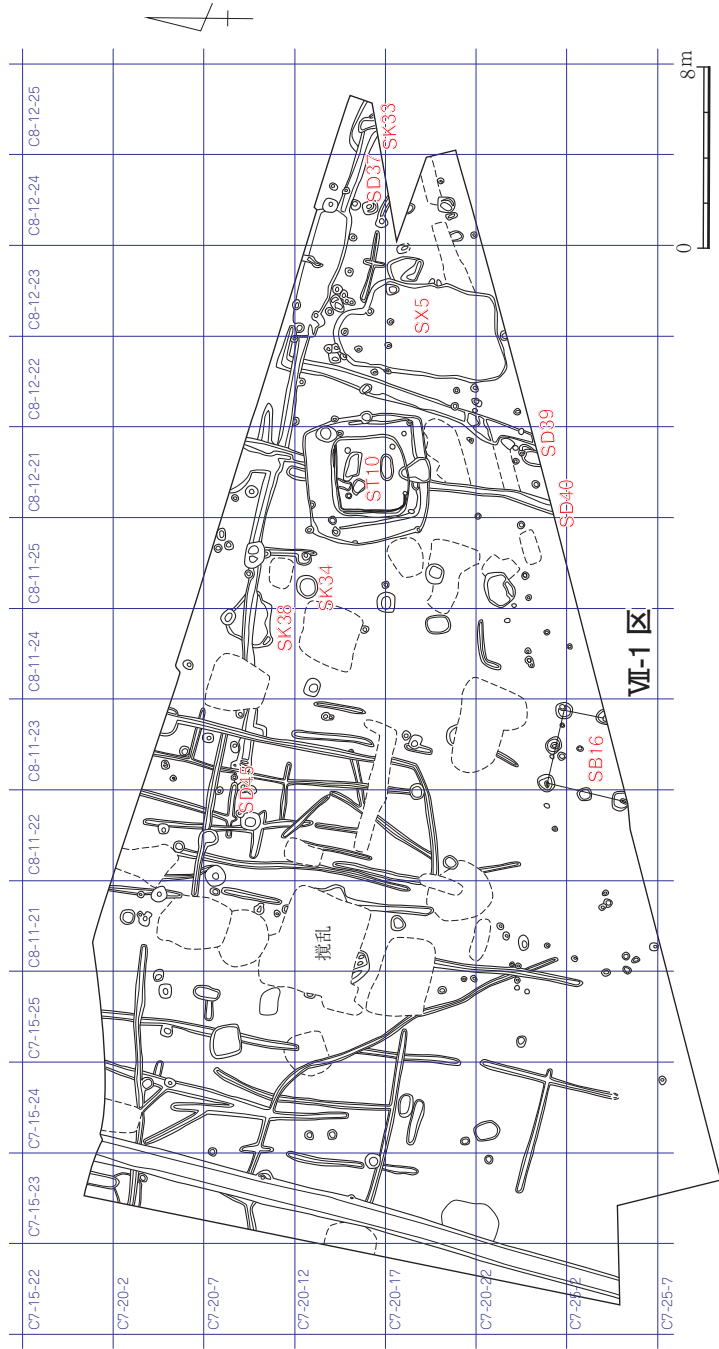


第2図 調査区配置図

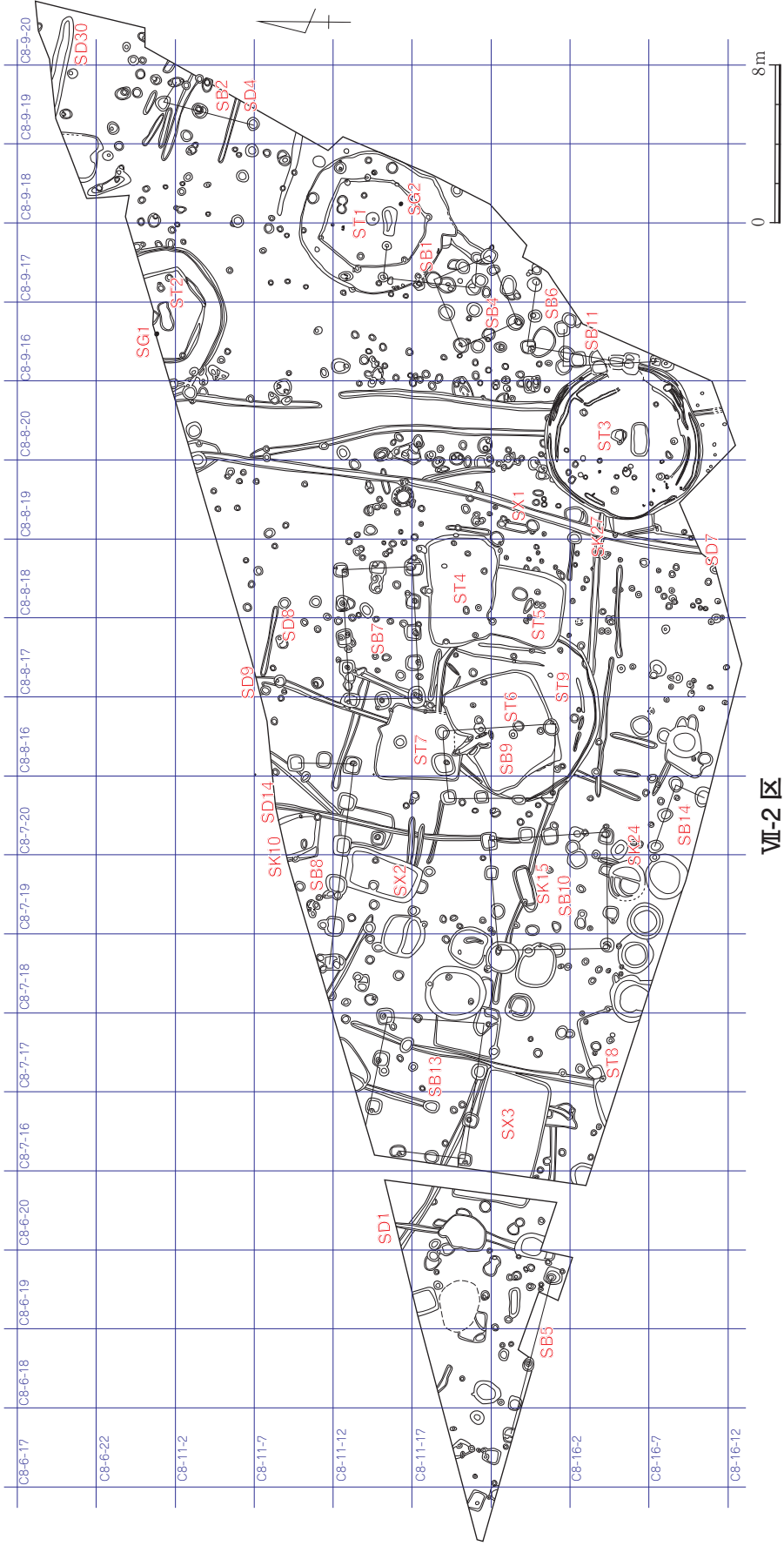




第3图 VII区全体图



第4图 VII-1区全体图



VI-2 区

第5图 VII-2区全体图



## 第Ⅱ章 VII区の調査成果

### 第1節 竪穴建物跡

VII区で検出した竪穴建物跡は10軒である。時期的には弥生時代後期後半4軒、弥生終末から古墳初頭1軒、古墳時代後期5軒である。

弥生時代後期後半のST1、2、3、9の4軒が調査区東部にほぼ等間隔で距離を開けて配置している。平面形は多角形で六角形になるものと考えられる。建物跡中央部よりやや南寄りに楕円形の炉跡とそれに付随して円形の小炉跡が伴う例が多い。規模は径7mから8mの大型のもので占められている。ベッド状遺構の付帯施設を有し、ベッド状遺構も多角形、六角形を呈し、その角に支柱穴を穿っている。こうした形態の一群の竪穴建物跡はVIII区東側でも4軒確認している。

弥生時代後期末から古墳時代初頭の時期と考えられる竪穴建物跡を1軒検出している。隅丸方形で一辺5mから6mでベッド状遺構を持ち、炉跡は楕円形である。支柱穴は4本である。該期の規格性のある形態の竪穴建物跡である。本調査区では1軒のみである。ST10が該当する。

古墳時代後期で造り付けの竈を有する一群はST4、5、6、7、8の5軒である。規模は一辺5m強程度の隅丸長方形を基本としているようであり、造り付けの竈が北壁に構築されている例が多い。本調査区でも5軒の内3軒が確実に竈を有する。本調査区ではST8が若干離れて検出しているものの、他の4軒は隣接して構築されており、短期間に同じ場所に竪穴建物跡が造られたようである。

なお、竪穴建物跡の内容等については調査図面・写真類がないものが多く、不明な点については無理な解釈は避けて不明としてある。特に竈についての記述はデータがない為に割愛せざるを得なかった。またST10の旧遺構名はVII-1区ST2である。

第1表 竪穴建物跡一覧表

ST 番号	調査区	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模 (m)	規模 (m)	深さ (m)	付帯施設	切り合い
ST1	VII-2	C8-14-12他	弥生後期	六角形	N-90°	(7.5)	7.1	0.30	炉跡2基	SB1切られる
ST2	VII-2	C8-14-1他	弥生後期	多角形	N-15° -W	7.3	(3.6)	0.45	炉跡2基	C8-9-22P1切られる
ST3	VII-2	C8-18-4他	弥生後期	多角形	N-90°	7.9	(7.56)	0.26	炉跡2基	SB6・11切られる
ST4	VII-2	C8-13-17他	古墳後期	隅丸長方形	N-90°	5.7	3.8	0.30	竈?	ST5・9切る
ST5	VII-2	C8-13-22他	古墳後期?	隅丸方形?	N-14° -E	(3.6) ?	3.6?	0.17		ST9切る、ST4切られる
ST6	VII-2	C8-13-21他	古墳後期	隅丸長方形?	N-25° -W	(5.4) ?	4.8	0.17	竈	ST7・9切る、SB9切られる
ST7	VII-2	C8-13-11他	古墳後期	隅丸長方形	N-14° -E	4.3	3.5	0.10	竈	ST9切る、ST6、SB9切られる
ST8	VII-2	C8-17-2他	古墳後期?	方形?	N-14° -W	(5)	(2.5)	0.14	竈	SK1、SD2切られる
ST9	VII-2	C8-13-16他	弥生後期	多角形	N-90°	8.5	8.3	0.36	炉跡2基	ST4～7、SB9他切られる
ST10	VII-1	C8-17-11他	弥生末	隅丸方形	N-90°	5.6	5.4	0.27	炉跡、貯蔵穴?	SX7・8、SD40切られる



## ST1 (第6～9図)

グリッド;C8-14-12他 切り合い関係;SB1に切られる

時期;弥生時代後期後半Ⅵ期 形状;六角形 主軸方向;N-90°

規模;(7.5)×7.1m 深さ0.3m

覆土;灰褐色土、褐色土

柱穴;数19 主柱穴数6 主柱穴P1～6

炉跡;炉跡1 形状楕円形 規模146×65cm 深さ26cm 覆土 不明 炉跡2 形状円形 規模66cm 深さ16cm 覆土 不明

ベッド;幅97～129cm 高さ4～12cm 周溝;不明 その他付帯施設;-

出土遺物;弥生土器壺、甕、鉢多量、土製支脚、鉄鏃、軽石製有溝砥石

所見;調査区北東に位置する。グリッドはC8-14-12周辺でⅧ区に隣接している。北にST2、南西にST3が約9m離れて、ほぼ同時期の竪穴建物跡が展開している。規模は径約7.5mの隅丸多角形で比較的大型の分類に含まれる。ベッド状遺構は六角形を呈しているものの、外壁の平面形は明確な六角形とはならず、やや隅丸の多角形である。深さは確認面から約30cmを測る。南側の壁の膨らみは別の遺構に切られていたものと判断される。主軸方向は炉跡1を基軸線とすると真北を指す。

覆土は大きく分けて2層に分かれ、上層が灰褐色土、下層が褐色土である。床面は写真を見る限りⅢ層の黄褐色粘質土に構築されているようである。貼床等については不明である。

主柱穴はベッド状遺構の各角で6基検出している。P1からP6が相当し、径20cmから30cmで深さは比較的しっかりしており約40cmから60cmを測る。

炉跡は建物跡中央よりやや南寄りで2基検出している。南側の楕円形の炉跡1は約1.4×0.6mで深さ約20cmである。焼土等の残存は不明である。炉跡2は炉跡1より20cm程北に離れて位置し、径約0.6m、深さ16cmを測る。

ベッド状遺構は幅1mから1.3mと幅広いもので全周しており、ベッドの高さは床面より10cm前後で余り比高差は少なく、地山の削り出しベッドである。周溝の有無についても不明である。またベッドの上で径60cm程の土坑を3基検出しているが本建物に伴う土坑か、別時期の掘り込みかどうかも不明である。

遺物は比較的多く出土しており、鉢が多い。壁際から出土しているようである。なお、壺棺SG2が本建物跡から出土しており、本建物跡に伴うものではないと判断し、壺棺SG2として別途に報告した。

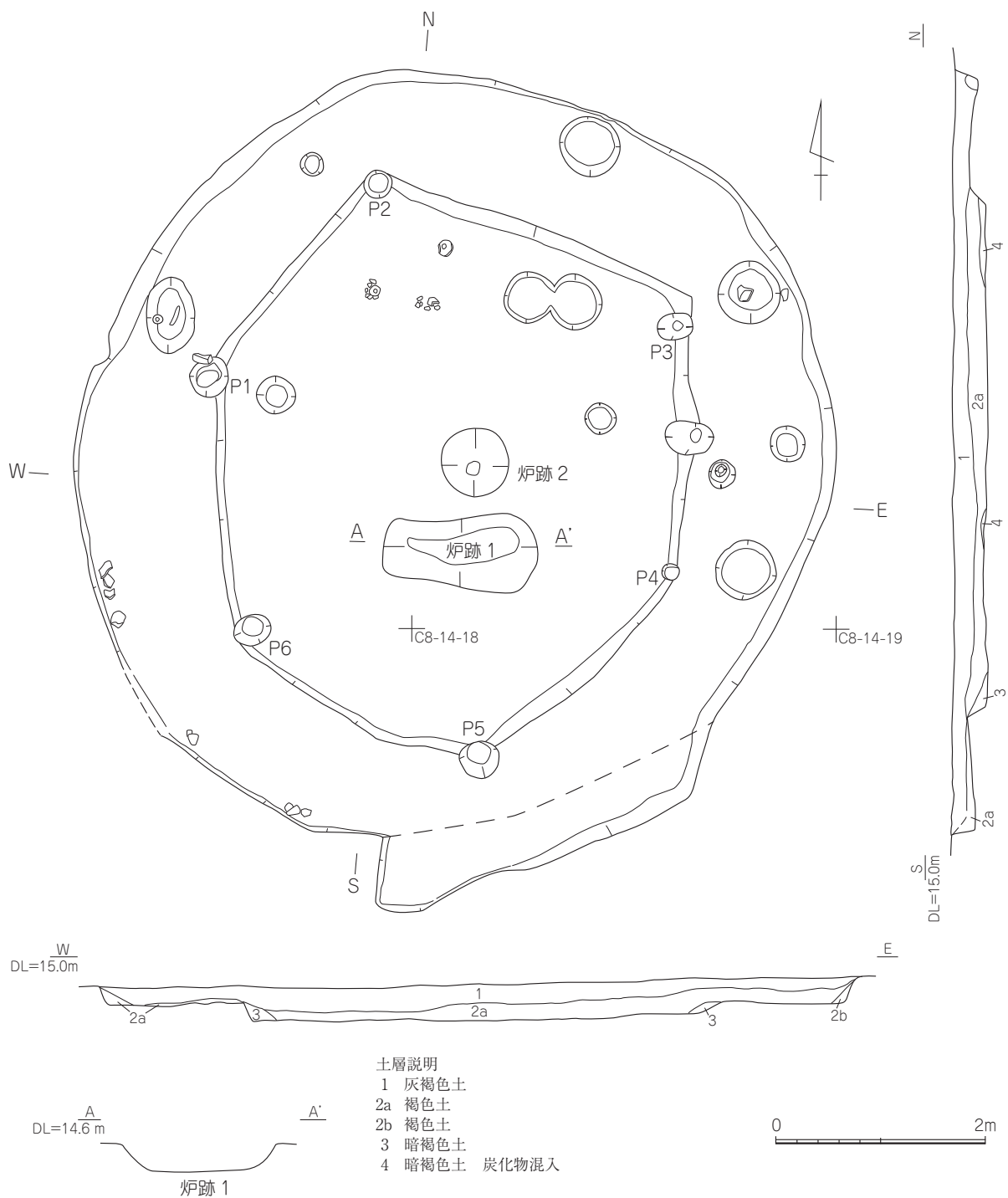
本竪穴建物跡は出土遺物からして弥生時代後期後半の所産と考えられる。

出土遺物(第7～9図No1～30)

No1から4は弥生土器壺である。1から3は広口壺で1は口縁が開き、口縁部を上下に拡張し、波状文を施し、頸部に斜格子刻みの突帯を施す。2、3は口縁が大きく開くものの口唇は拡張しない。整形は共に内外面共にハケである。4は複合口縁壺で受け口状の口縁で内傾気味に立ち上がる。整形は内外面共にハケである。色調は明黄褐色を呈する。

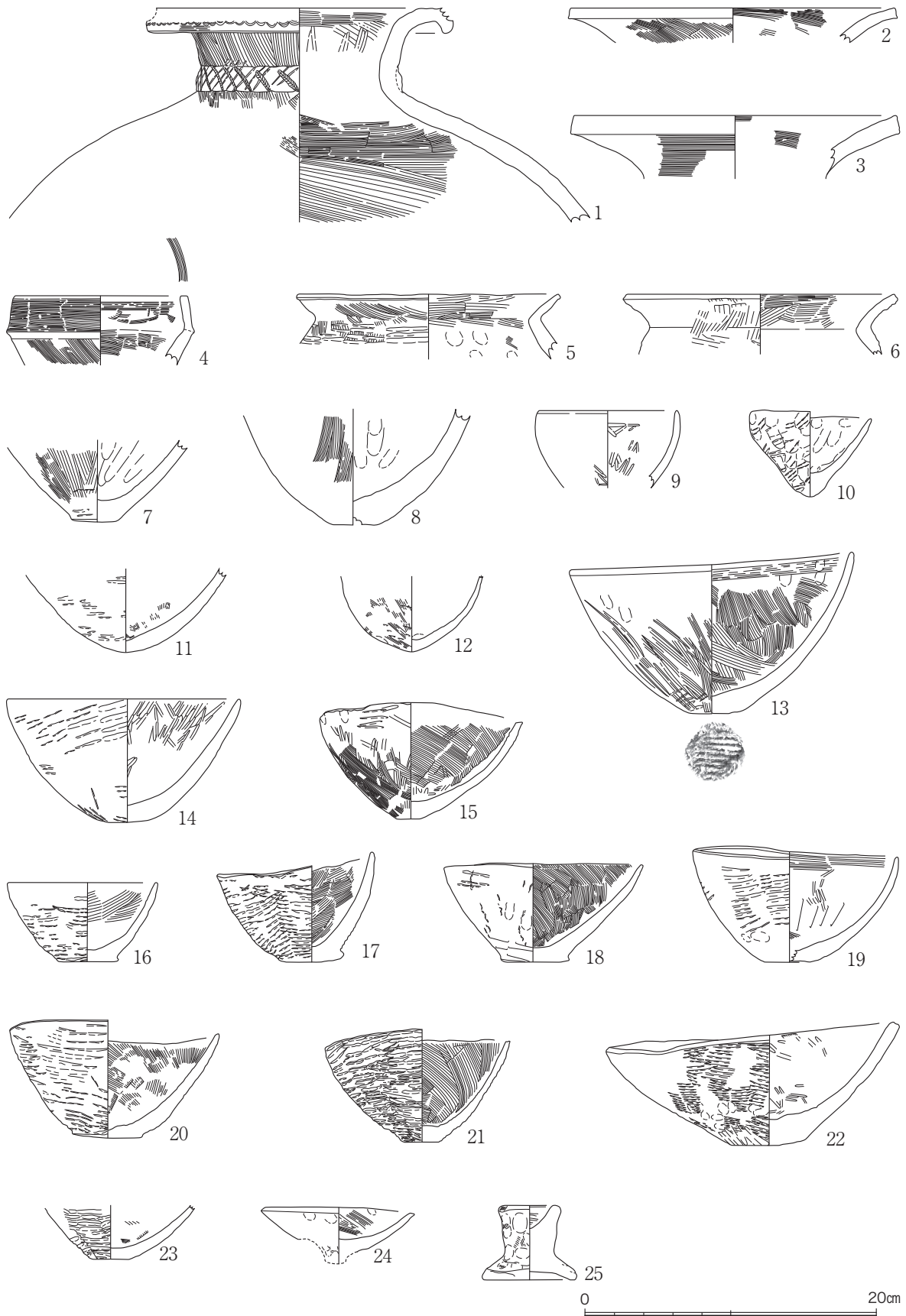
5から8は甕で、5、6は口縁が「く」字状に外傾し、整形はタタキ、ハケである。7、8は甕の底部と考えられる。小さな平底で径3cm強を測る。整形は外面がハケ、内面はナデである。

9から23は鉢である。大きさからすると小型、中型、大型の3種類で、口径の最も大きなものは22

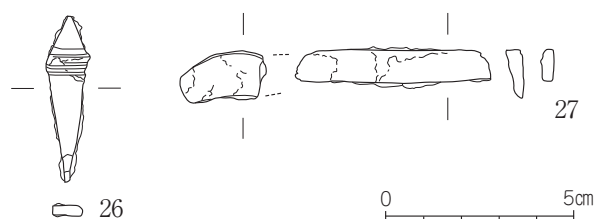


第6図 ST1 遺構図

で19.8cmを測る。中型の口径は14cm前後のものが多く、小型のものは10cm前後である。底部形態からすると丸底、平底、尖底の3種類で、平底は小さな平底のものに分かれることから4種類となる。整形は外面がタタキ、内面がハケのことが多い。9、10は口径10cm未満の小型のもので、10の底部は尖底である。11、12は丸底である。13から15はやや小さな平底で13は口径19.6cmと大型のもので



第7図 ST1 遺物実測図 (1)



第8図 ST1 遺物実測図 (2)

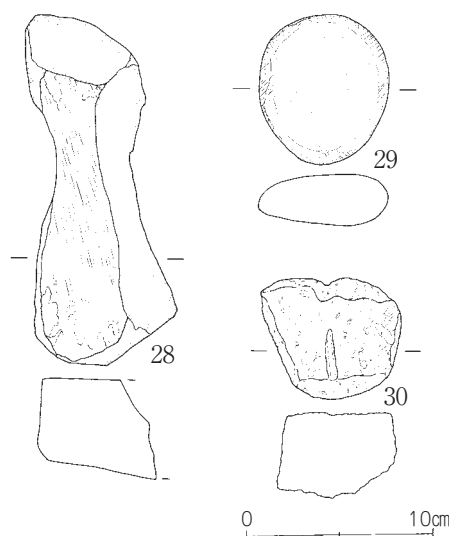
ある。16から23はベタ平底である。16、17は口径10cm強の小型のもので体部は余り開かず直立気味のものである。18から21は中型のもので体部はやや開き加減となる。22は最も大きなもので体部は大きく開く。内面にはミガキを施す。23は平底の底部破片である。

24は高坏の坏部である。脚部は欠損する。坏部は浅く皿状を呈し、整形は外面がナデ、内面はハケとナデである。

25は土製支脚である。高さ5.2cmの小型のもので、上部受け部は小さい。整形は指頭、ナデである。

26、27は鉄製品で26は鉄鏃、27は鉞か。

28から30は石器で28は仕上げ砥石、29は側縁に僅かに敲打痕が認められる叩石、30は軽石製の有溝砥石である。浅い溝が1条残る。



第9図 ST1 遺物実測図 (3)

## ST2 (第10、11図)

グリッド:C8-14-1他 切り合い関係:C8-9-22P1、C8-14-1P3・5に切られる

時期:弥生時代後期後半VI期 形状:多角形(六角形か) 主軸方向:N-15° -W

規模:7.3×(3.6) m 深さ0.45m

覆土:暗褐色土、褐色土

柱穴:数(3) 主柱穴数(3) 主柱穴P1～3

炉跡:炉跡1 形状楕円形 規模146×63cm 深さ16cm 炉跡2 形状円形? 規模68cm 深さ28cm 覆土 褐色土

ベッド:幅63～103cm 高さ13～18cm 周溝:2条 幅10～20cm 深さ4～8cm その他付帯施設:

—

出土遺物:弥生土器壺、甕、鉢、土製支脚

所見:調査区北東隅のグリッドC8-14-1周辺に位置する。調査区内では半分程しか検出しておらず、北側の調査区外へと広がる。南側4.8mにはほぼ同時期、同一形態のST1が離れて位置している。平面形は径7.3mの隅丸多角形で内側のベッド状遺構は六角形になるものと考えられる。深さは45cmと遺存状態は良い。主軸方位は炉跡1を基軸線とするとN-15° -Wで僅かに西に振る。

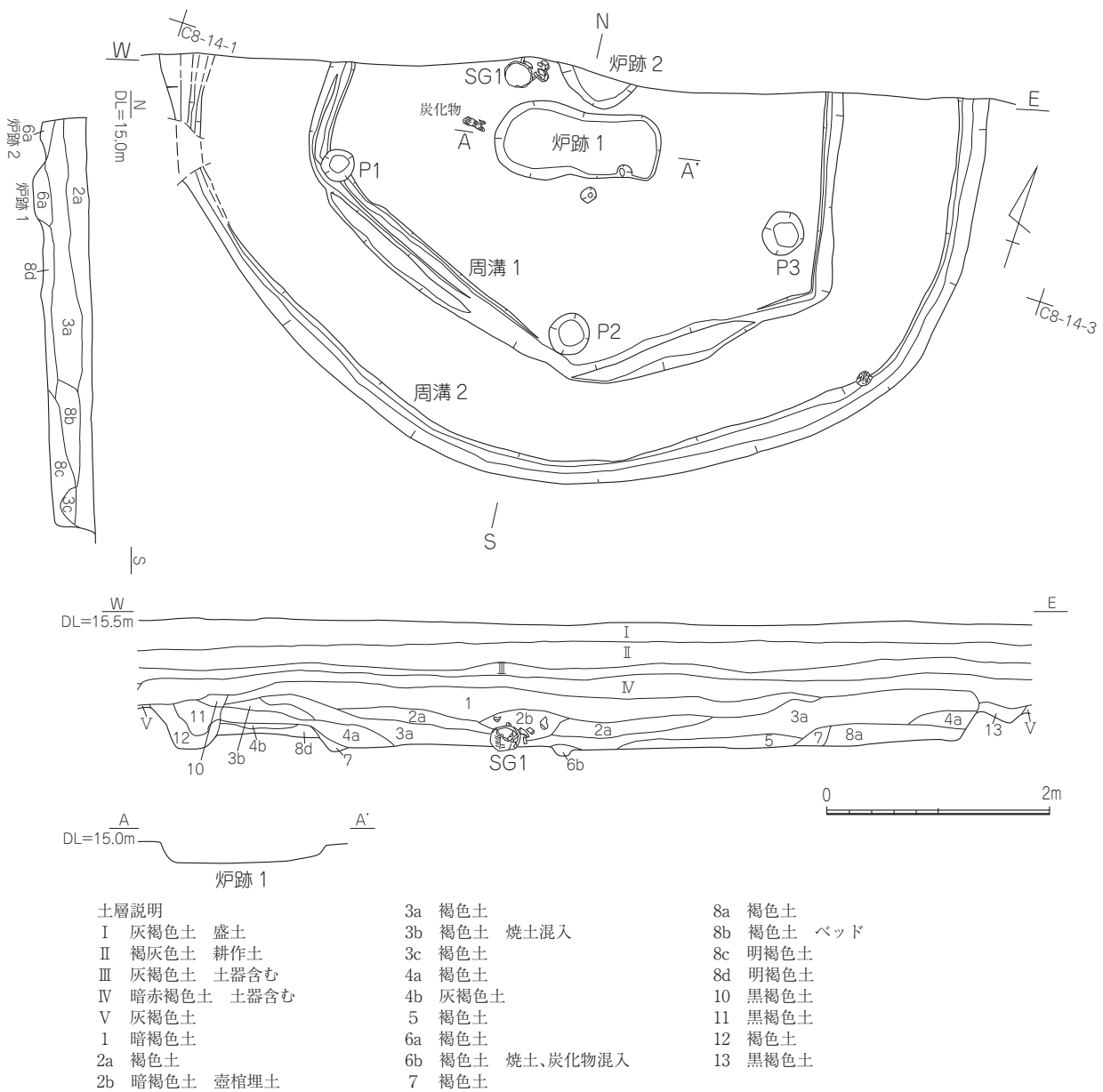
覆土は調査区の壁で建物跡断面土層を図化しており、基本土層のI層からIV層迄が建物跡を被覆している。建物跡の構築面はV層となる。建物跡内の覆土は大きく分けて1層から4層で暗褐色土を主体とする。2層が被覆した後、壺棺SG1が掘り込みを伴い建物跡中央部炉跡近くに構築されてい

る。その後1層が壺棺SG1も被覆している。

支柱穴の総数は不明で検出したのは3基のみである。六角形建物跡の場合、ベッド状遺構の各角に支柱穴が穿たれる例がほとんどで、本建物跡も同様になるものと考えられるが、P2、P3は若干ズレが生じている。径20cmから30cmで深さは40cm近くしっかりした掘り方を持つ。

炉跡は建物跡中央部で2基確認しており、大きな楕円形と小さな円形の対になったものと考えられる。炉跡1は楕円形で約1.4×0.6mで深さ16cmを測る。炉跡1に接して炉跡2が構築されている。形状は調査区外に広がり判然としながおそらく円形と考えられ、規模径約0.6m、深さ28cmを測る。炉跡には焼土が伴うようである。

ベッド状遺構は削り出しと考えられ、幅は広いところで約1m、高さは床面から13cmから18cmを



第10図 ST2遺構図



測る。周溝は壁際とベッド状遺構際に掘られており、幅10cmから20cm、深さは4cmから8cmと浅い。

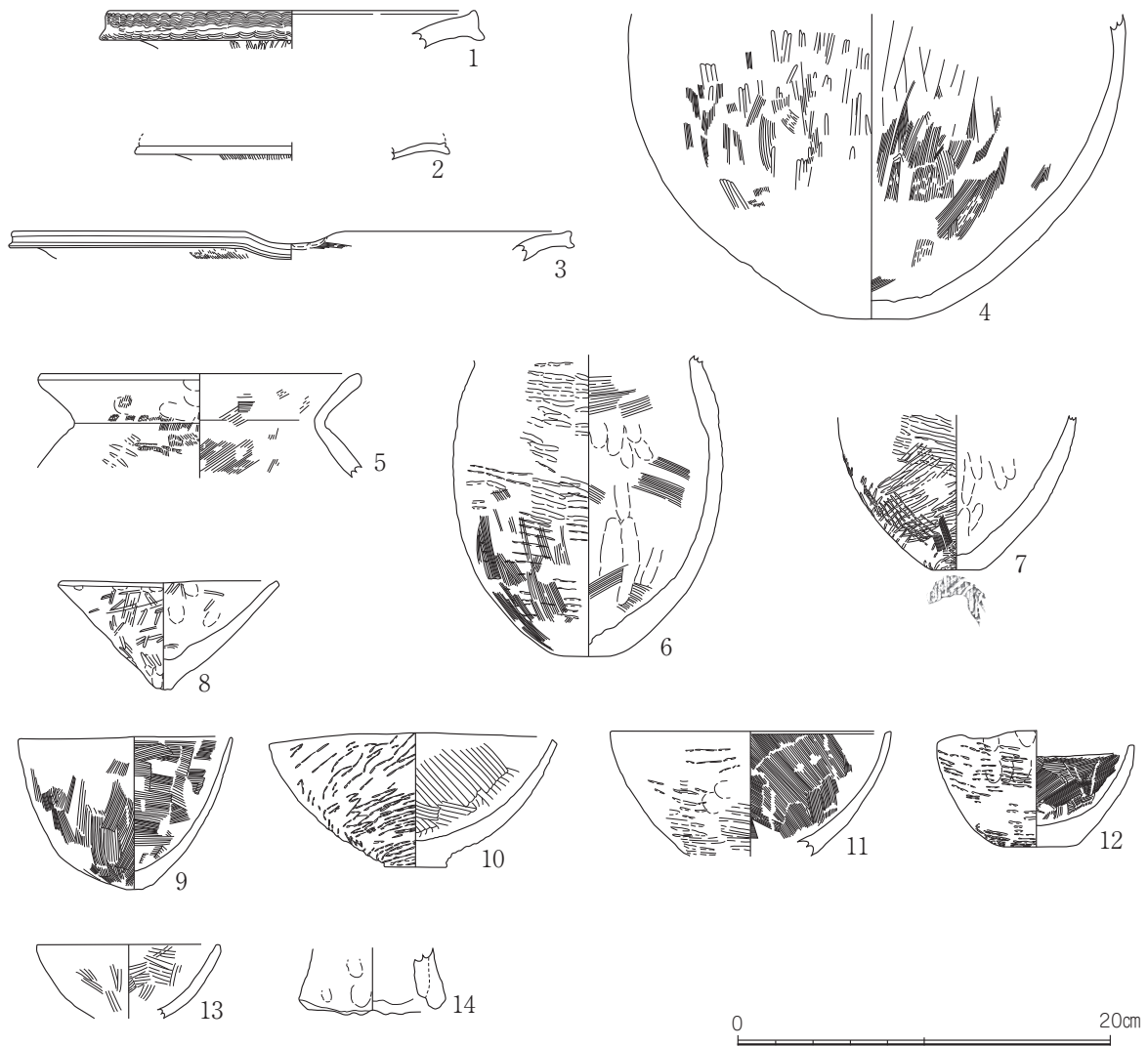
本竪穴建物跡は出土遺物からしてST1と同時期で弥生時代後期後半の所産と考えられる。

出土遺物(第11図No1～14)

No.1から3は弥生土器広口壺である。1は口縁が開き、端部を上下にやや拡張し、波状文を施す。2は口縁は開くものの口縁は拡張せず、凹線状となる。3は口縁が大きく開き復元30cm余りを測る。一部極僅かに片口状?になるところから鉢の可能性もあり、口縁は拡張せず、凹線状となる。4は壺の底部破片で丸底気味で体部丸味を持ち、外面にミガキを施す。

5から7は甕である。5は口縁が「く」字状に外傾する。6は長胴甕で底部は小さな平底である。7も小さな平底で外面の整形はタタキを明瞭に残す。

8から13は鉢である。8、9は尖底で口縁が開き口径11cm余りの小型のものである。8はミガキ、9はハケ整形である。10、11は口径15cm強の中型の鉢で10はやや小さな平底である。10、11共に碗状にやや丸味を持つ。12、13は口径10cm前後の小型の鉢で口縁は余り開かず、体部は丸味をやや



第11図 ST2 遺物実測図

持つ。

14は支脚の裾部で中空で整形は指頭である。

### ST3 (第12～16図)

グリッド:C8-18-4他 切り合い関係:SB6・11、SD13・18・19・21に切られる

時期:弥生時代後期後半Ⅵ期 形状:多角形 主軸方向:N-90°

規模:7.9×(7.5) m 深さ0.26m

覆土:灰褐色土、褐色土

柱穴:数23 主柱穴数7 主柱穴P1～7

炉跡:炉跡1 形状楕円形 規模169×90cm 深さ14cm 炉跡2 形状不整形 規模77×(59) cm 深さ20cm

ベッド:南壁一部 幅90cm 高さ5～10cm 周溝:2条 幅11～16cm 深さ2～7cm その他付帯施設:－

出土遺物:弥生土器壺、甕、鉢、高坏、手捏ね土器、土製円盤、叩石

所見:調査区東南のグリッドC8-18-5周辺に位置している。調査は平成20年度に建物跡の北半分を調査し、翌年の平成21年度に調査区を南側に拡張して全面発掘を行った。2回に分けて調査を行った為に建物跡の掘り方に相違が見られる。南側部分ではベッドと周溝が認められるものの、前年度に調査した北側部分ではベッドが検出できていない。また周溝も途切れる。主軸方位は炉跡1を基軸線にすると真北を指す。

平面形は隅丸多角形で六角形か七角形の可能性がある。径8m弱を測る大型である。深さは30cm弱でやや浅い。東壁及び西壁の一部は土坑、掘立柱建物跡により壊されている。

覆土は大きく分けて2層に分かれる。下層には褐色土でその上を灰褐色土が被覆する。

主柱穴は7本と考えられる。多角形の角部分に主柱穴を配している。径30cmから40cmで深さも30cmから40cm前後のもので掘り方はしっかりしている。他に小柱穴を検出しているものの、本建物跡に伴うものではない。

炉跡は2基検出している。炉跡1は建物跡中央よりやや南側寄りに位置する。規模は約1.6×0.9m、深さ14cmの楕円形を呈する。炉跡2は炉跡1に接し、円形に近い不整形で径約0.7m、深さ20cmを測り、周辺域に焼土が認められる。

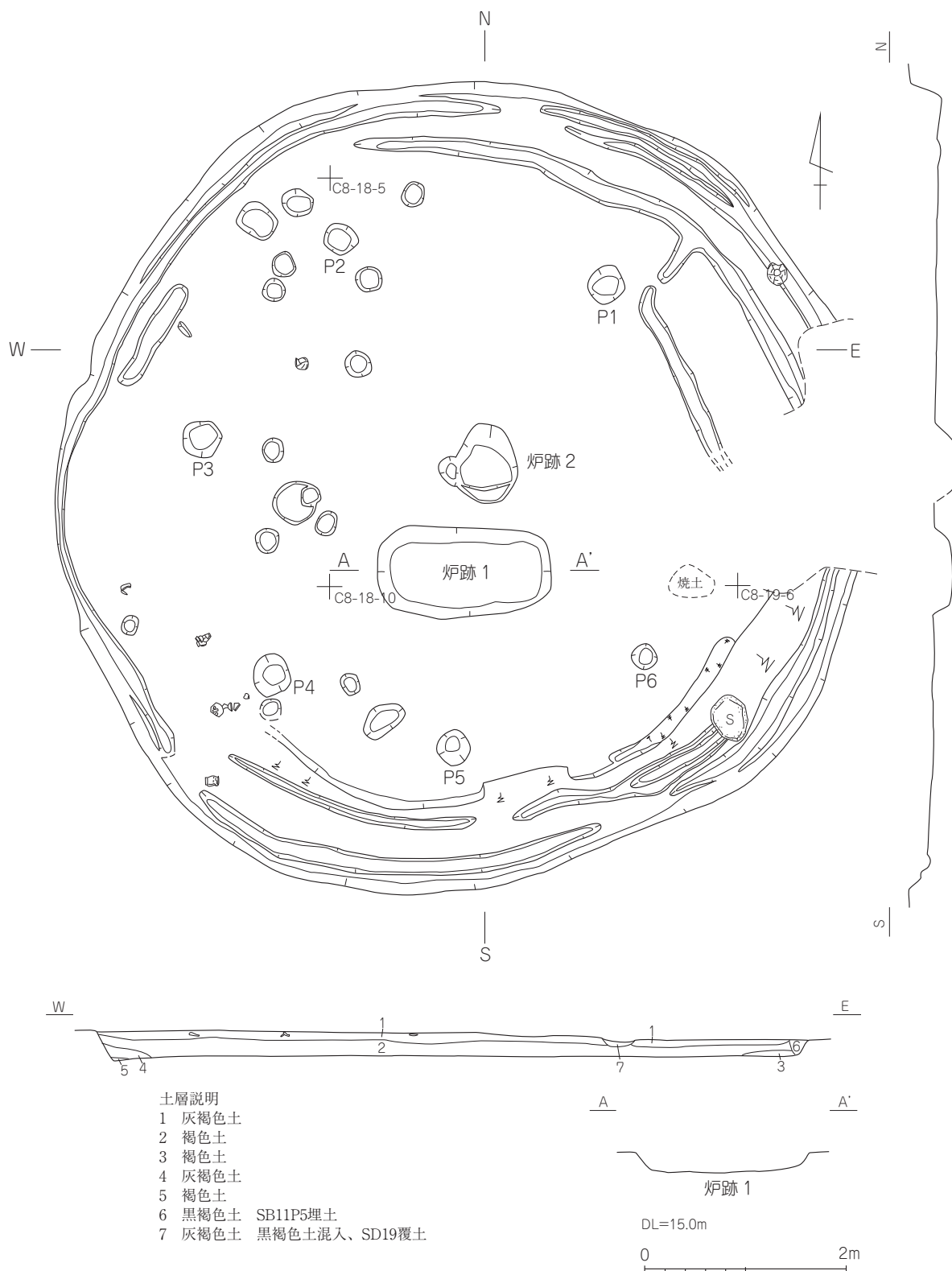
ベッド状遺構は平成21年度調査の南側では認められている。幅90cm程度、高さ10cm足らずのものである。地山削り出しベッドである。周溝についても2、3条検出しているものの断続的で全周しない。外壁際とベッド上で検出している。幅10cm強、深さ10cm未満である。

遺物は弥生時代後期後半の土器で特に鉢が多い。本竪穴建物跡は出土遺物からしてST1、2と同時期で弥生時代後期後半の所産と考えられる。

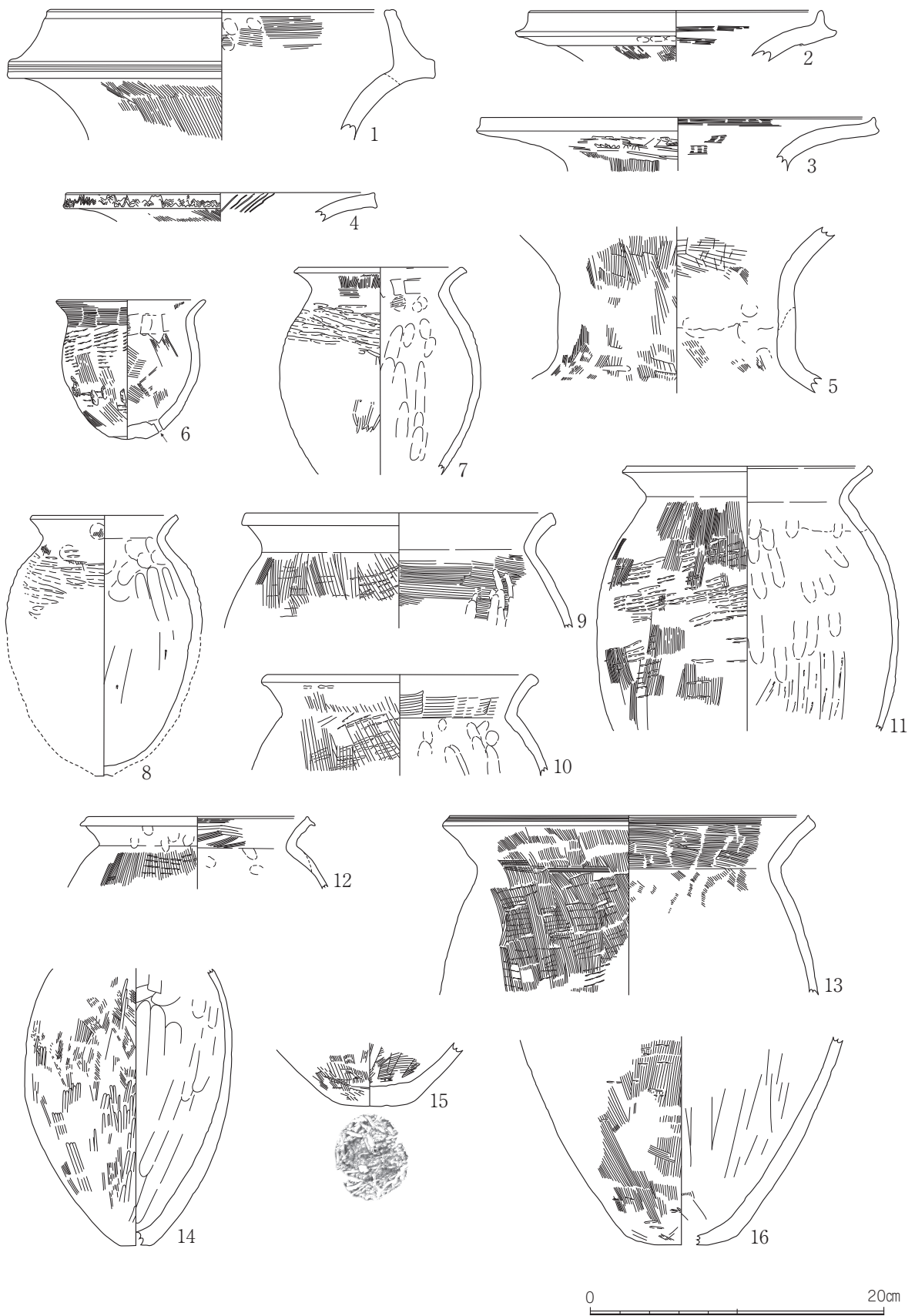
出土遺物(第13～16図No1～48)

No1から5は壺である。1は複合口縁壺で、口径23.5cmを測る大型品である。口縁を大きく拡張し、内傾気味に立ち上がる。整形は内外面共にハケ整形である。2から4は広口壺で、2は口縁上端を拡張する。4は口唇を拡張せず、波状文を施す。5は頸部で径16.4cmを測る大型壺で、頸部は直立気味に立ち上がる。15、16の底部破片についても壺の底部の可能性はある。

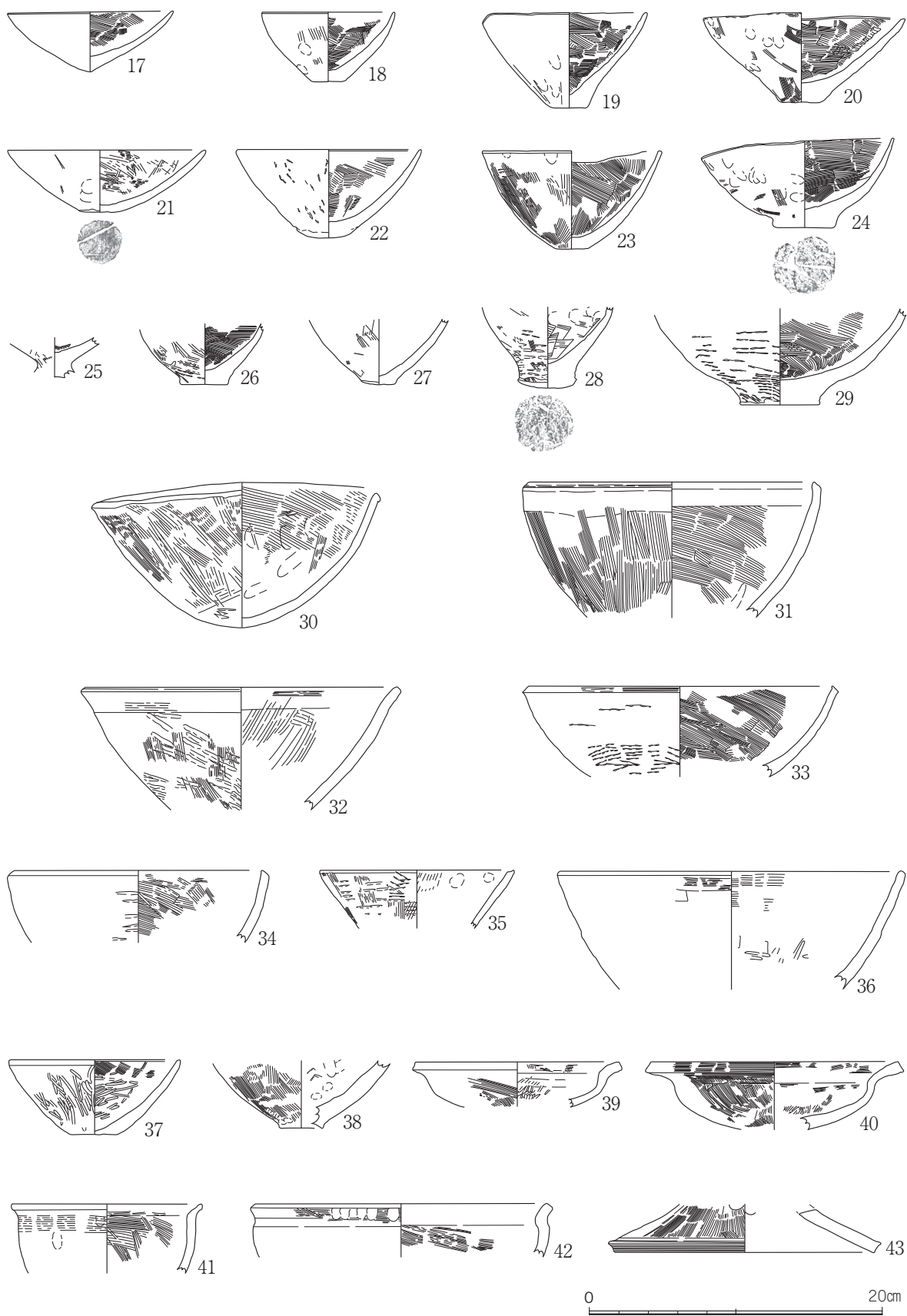
6から14は甕である。6から8は口径10cm前後の小型のもので、口縁が短く外反し、体部やや丸味



第 12 図 ST3 遺構図

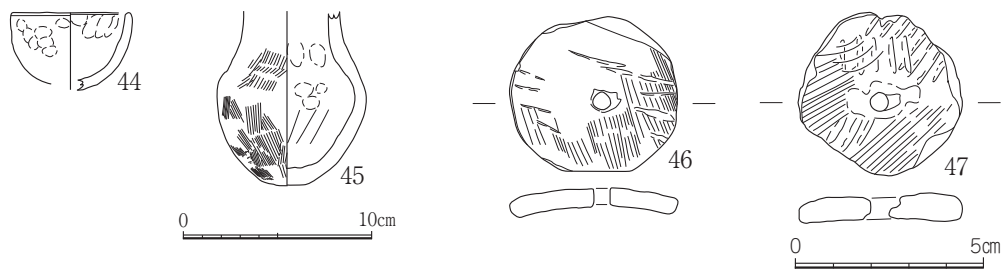


第13図 ST3遺物実測図(1)



第 14 図 ST3 遺物実測図 (2)





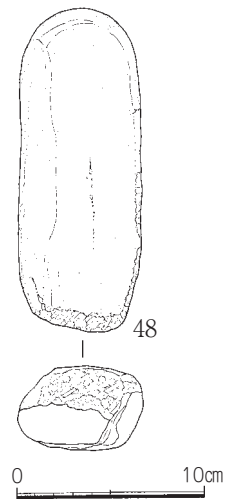
第15図 ST3遺物実測図(3)

を持つ。9から13は中型のもので口縁が外反するものである。13の口径はやや大きく24.6cmを測り、肩部が張らないものである。整形はほとんどのものが口縁部内外面にヨコナデを施し、外面はタタキの後ハケ整形である。内面は指ナデかハケ整形である。14は口縁が欠損したもので小さな平底で径2.1cm、胴部は砲弾形を呈する。

17から42は鉢である。幾つかの形態のものが認められる。大きさでは小型、中型、大型、底部の形態は尖底、ベタ平底、柱状の突出した平底、小さな平底、丸底の5形態に大きく分けることができる。体部は大きく開くもの、余り開かずにやや丸味を持って立ち上がるものが認められる。17は小型の尖底のものである。体部は開く。18、19は小型で平底のものである。体部は開く。20から22は口径12cmから13cmの中型の平底のものである。体部はやはり開く。23は小さな平底のものである。体部は大きく開かない。24から26はやや突出した平底のものである。24は碗状を呈する。27から29は底部破片で27は小さな平底のもの、28は円柱状に突出した底部、29は円盤状のベタ平底で大型のものである。30から34、36は口径20cm前後の大型のものである。器高も高いもので、30は丸底である。他のものも丸底の可能性はある。35、37は体部が直線的に開くものである。37の口径は11.7cmの小型で平底である。38は高台状になる底部破片である。この形態のものは他にない。底径は3cmである。39、40は口縁部がくびれるものである。口唇は面になる。40の口径は17cmで器高は浅い。41、42は短い口縁がくびれるものである。胴部は張らず器高の深くなるものと考えられる。整形は外面がタタキにナデ、ハケ、内面は指ナデ、ハケのものが多く認められる。

43は高坏の脚部裾で大きく開き、透孔を有する。

44、45は小型土器で44は手捏ね土器である。口径6.1cmで丸底である。45は壺形の小型土器で底部は平底、胴部は丸味を持ち、頸部がくびれる。46、47は土製円盤で再利用品で縁辺部を打ちかき、重さはそれぞれ10.4gと12.8gである。48は長楕円形の砂岩製の叩石である。一先端部に敲打痕が顕著に残る。



第16図 ST3遺物実測図(4)

**ST4** (第17、18図)

グリッド:C8-13-17他 切り合い関係:ST5・9を切る、SD12に切られる

時期:7C前半 形状:隅丸長方形 主軸方向:N-90°

規模:5.7×3.8m 深さ0.30m

覆土:褐色土主体

柱穴:数9 支柱穴数- 支柱穴-

竈:不明 ベッド:- 周溝:- その他付帯施設:-

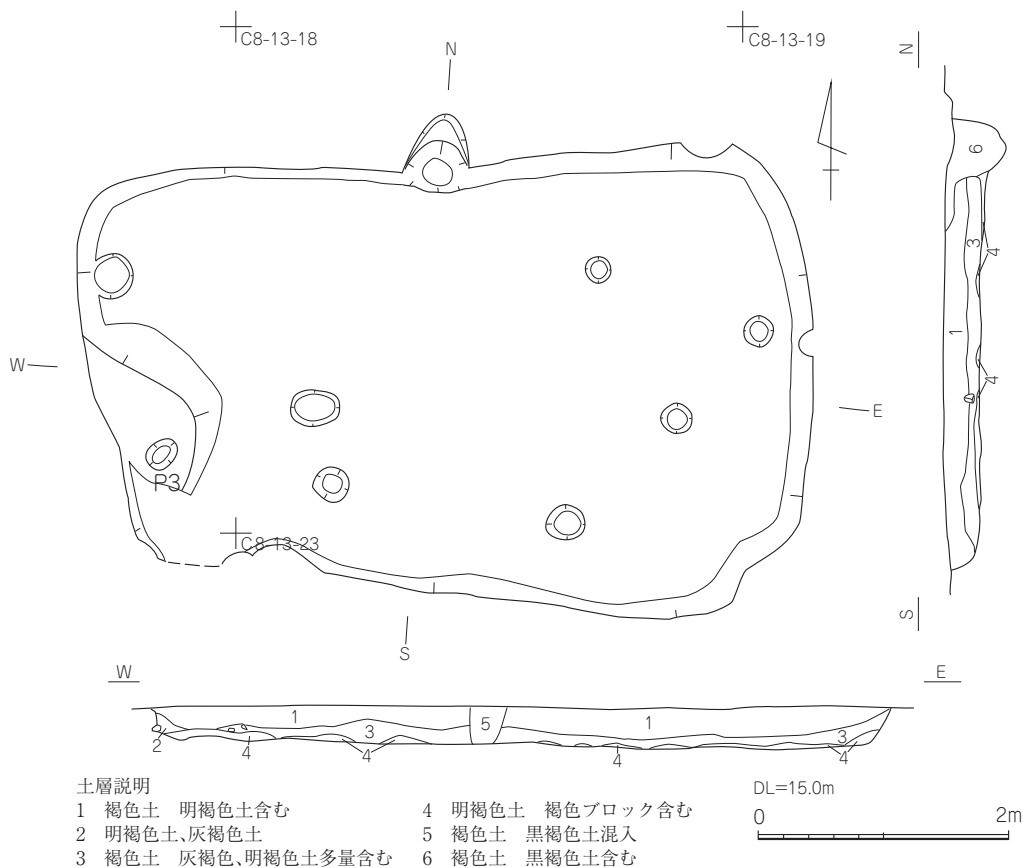
出土遺物:須恵器坏蓋、坏身、高坏、臙、甕片

所見:調査区北側部のグリッドC8-13-17に位置する。周辺にはST5・6・7・9の少なくとも4軒の竪穴建物跡が密集している。最も古いものはST9で弥生時代後期後半の時期のものが全てのものに切られている。ST4はST5を切る。

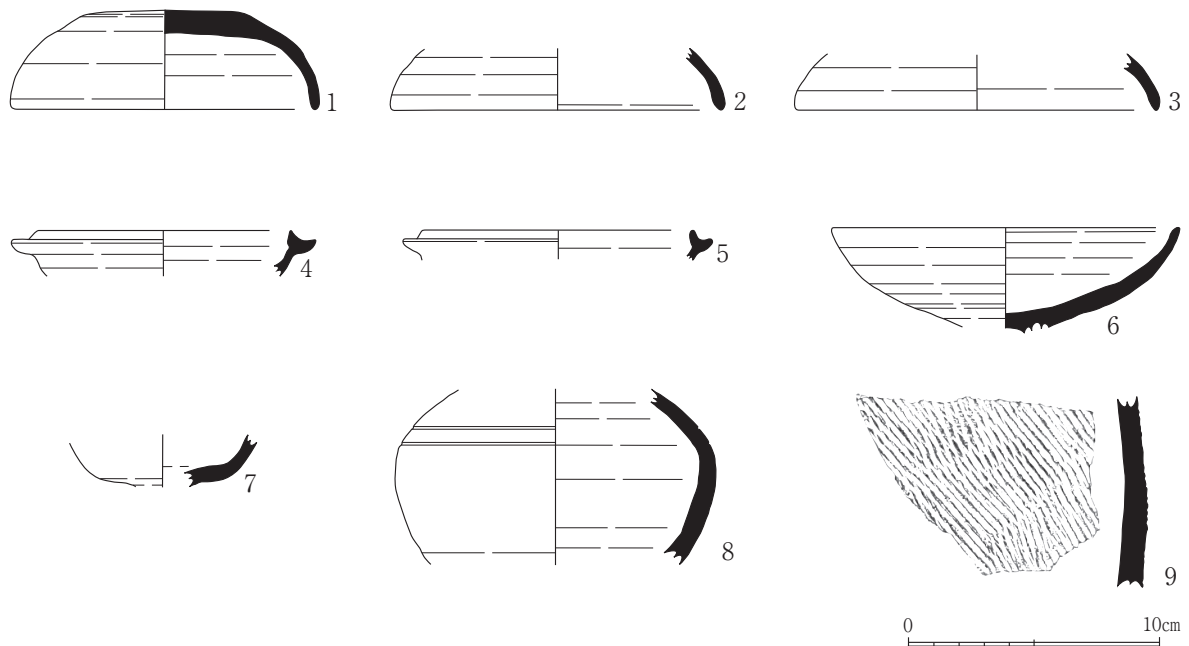
平面形は南壁が乱れているものの、本来隅丸長方形と考えられ、長辺5.7m、短辺3.8m、深さ30cmである。主軸方位は真北を指す。覆土は褐色土が主体である。柱穴は9基検出しているものの、全て本建物跡には伴わない可能性が強い。周溝、ベッドも未確認である。竈の有無についても図面・写真類がないため詳細は不明である。

所属時期については取り上げ遺物からして古墳時代後期の可能性がある。

出土遺物(第18図No1～9)



第17図 ST4 遺構図



第18図 ST4 遺物実測図

No1から5は須恵器坏蓋と身である。1から3は蓋で緩やかで、口縁も丸味を持つ。1の天井は未調整である。4、5は受け部にかえりを有する小型の身である。6、7は高坏の坏部で6は緩やかに立ち上がる。7は坏部の底部破片である。腰部は屈曲する。8は甕の胴部破片で肩部はなだらかで、沈線2条が巡る。上半部には自然釉がかかる。9は甕の破片で外面は平行タタキ、内面はナデである。TK217並行期の所産と考えられる。

### ST5 (第19、20図)

グリッド;C8-13-22他 切り合い関係;ST4に切られる、ST9を切る

時期;古墳後期? 形状;隅丸方形? 主軸方向;N-14° -E

規模;(3.6)×3.6m? 深さ0.17m

覆土;灰褐色土、褐色土

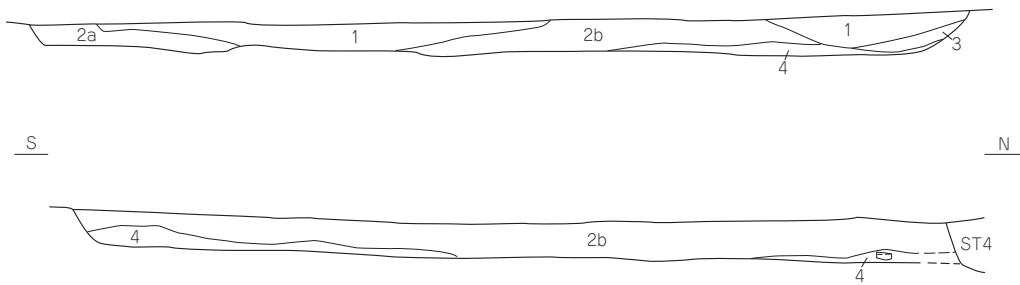
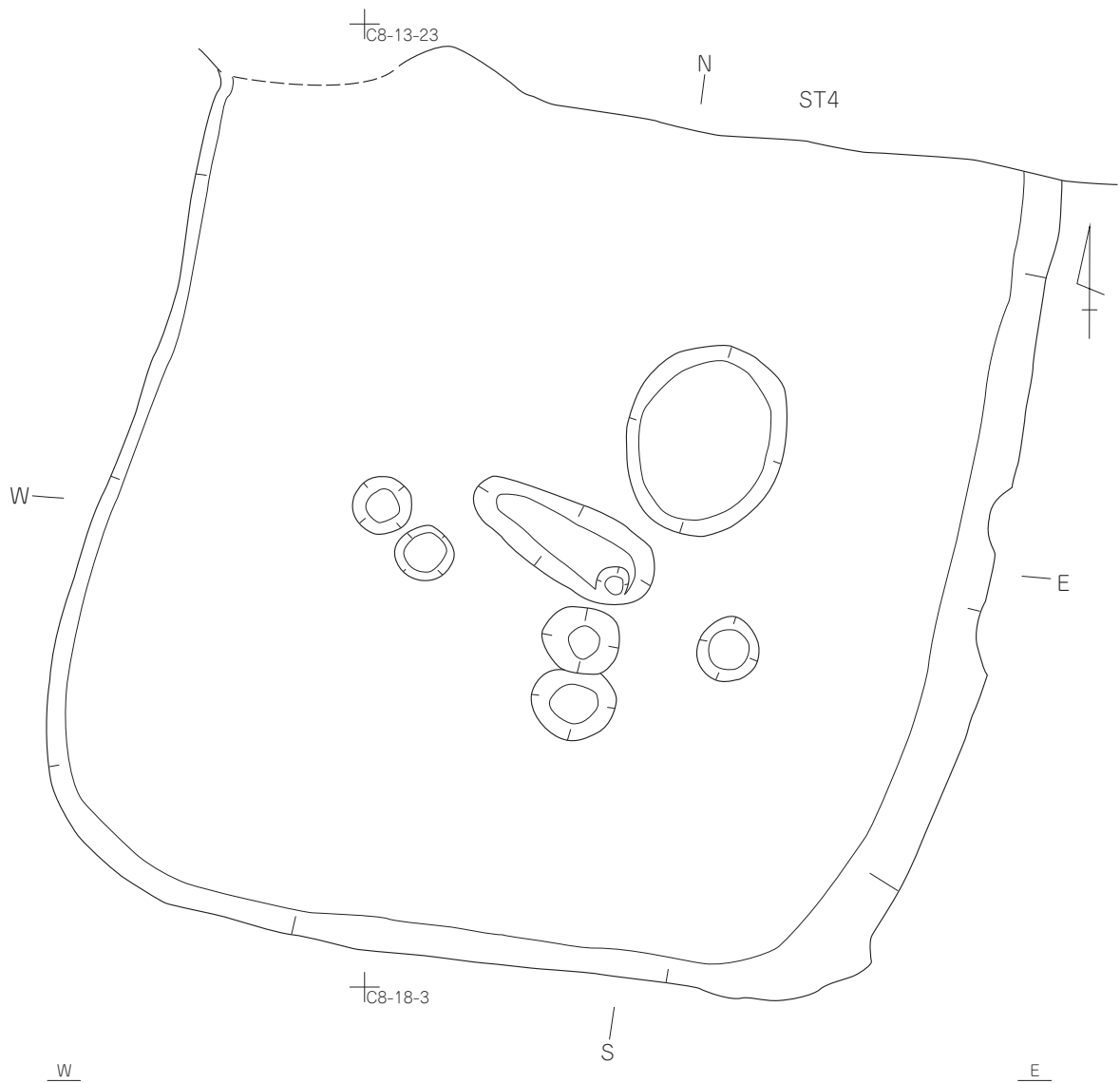
柱穴;数(6) 主柱穴数- 主柱穴-

竈;- ベッド;- 周溝;- その他付帯施設;- 出土遺物;土師器甕

所見;調査区北側部のグリッドC8-13-22に位置する。周辺にはST4・6・7・9の少なくとも4軒の竪穴建物跡が密集している。ST5はST4に切られる。平面形は長方形か方形である。遺構検出写真では長方形でST4と同規模に見えるものの、掘り上がった写真、図面では一辺約3.6mの隅丸方形の小型の竪穴建物跡となっている。深さ17cmで浅い。主軸方位はN-14° -Eを指し、やや東方向を向いている。覆土は褐色土が主体である。柱穴は6基検出しているものの、全て本建物跡には伴わない可能性が強い。周溝、ベッドも未確認である。竈の有無についても図面・写真類がないため詳細は不明である。所属時期については古墳時代後期の可能性のある土師器甕が出土しているものの、他に遺物もなく不確かである。

出土遺物(第20図No1)



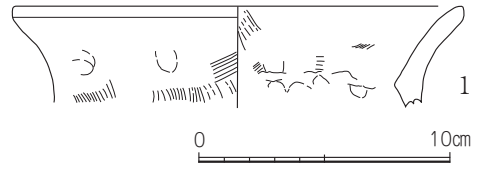


- 土層説明
- 1 灰褐色土 黒褐色、明褐色ブロック含む
  - 2a 褐色土 黒褐色、明褐色小ブロック含む
  - 2b 褐色土 黒褐色小ブロック、明褐色小ブロック多量含む
  - 3 褐色土 明褐色小ブロック含む
  - 4 明褐色土 褐色小ブロック含む



第19図 ST5 遺構図

No.1 は土師器甕の口縁部破片である。口縁は僅かに外反し、口径17.7 cmを測る。口唇はやや尖る。整形は口縁が内外面ナデ、胴部がタテハケである。胎土に小礫を多量に含む。



第 20 図 ST5 遺物実測図

**ST6** (第21、22図)

グリッド;C8-13-21他 切り合い関係;ST7・9を切る、SB9、SD9に切られる

時期;7C前半 形状;隅丸長方形? 主軸方向;N-25° -W

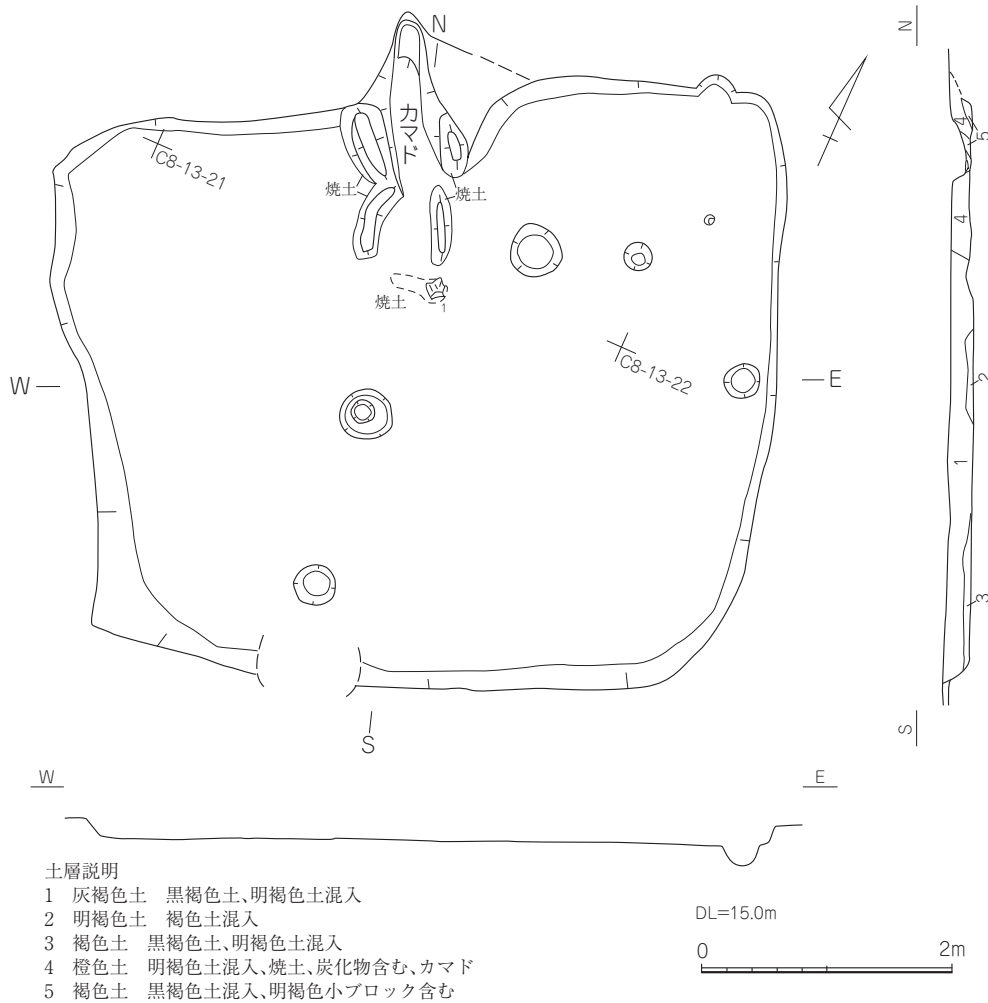
規模;(5.4)×4.8m? 深さ0.17m

覆土;灰褐色土

柱穴;数5 支柱穴数- 支柱穴-

竈;位置・北 竈壁位置・中央部 規模1.2×1.3m 深さ6cm 覆土・橙色土 煙道長さ70×幅60cm 袖補強材・無 支脚・無 天井石・無 竈内遺物・No.4土師器鉢、No.6、7土師器甕

ベッド;無 周溝;無 その他付帯施設;無



第 21 図 ST6 遺構図

出土遺物：須恵器甕、高坏甕、土師器鉢、甕

所見：調査区北側部のグリッドC8-13-21に位置する。周辺にはST4・5・7・9の少なくとも4軒の竪穴建物跡が密集している。弥生時代後期後半のST9、古墳時代後期のST7を切る。

平面形は長方形と考えられ長辺5.4m、短辺4.8m、深さ17cmである。完掘状況写真、平面図は西壁が乱れたいびつな竪穴建物跡となっているものの、検出写真では左右対称の竪穴建物跡であるところから本来長方形で長辺は5.4m以上あったものと考えられる。主軸方位はN-25° -Wを指す。

覆土は灰褐色土が主体である。柱穴は5基検出しているものの、全て本建物跡には伴わない可能性が高い。周溝、ベッドも未確認である。

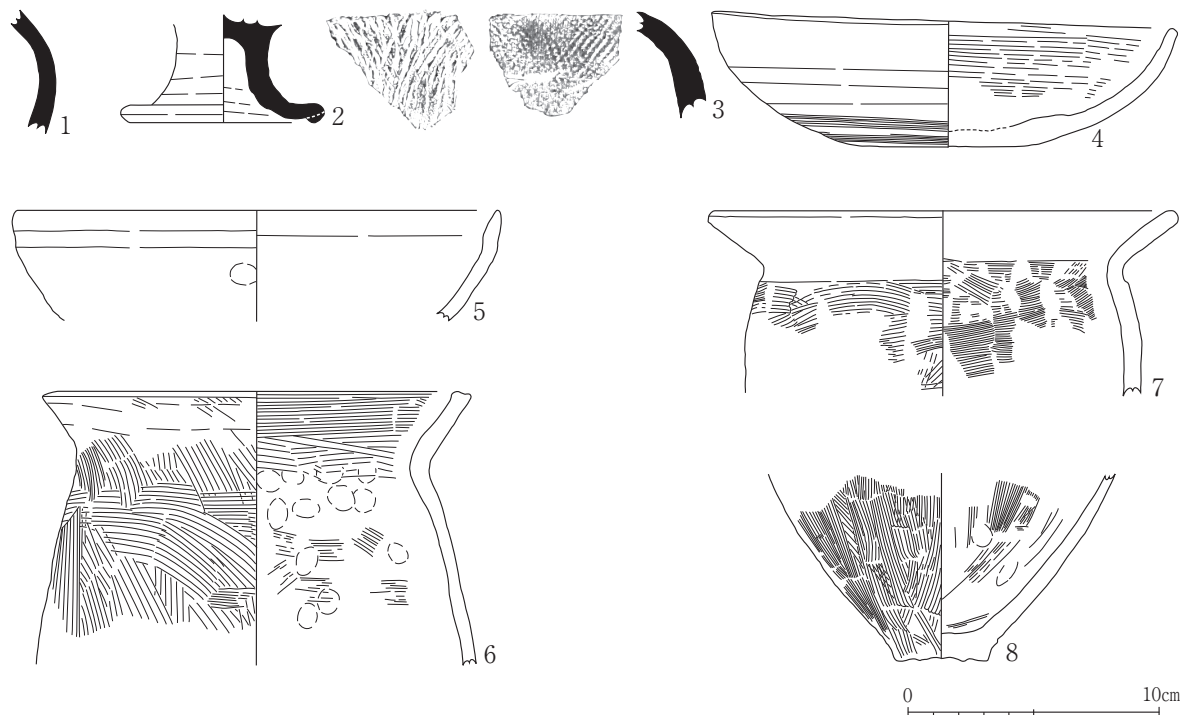
竈は北壁中央部で検出している。規模は1.2×1.3m、深さ6cmで煙道が建物跡壁外に設けられており、長さ70cmである。竈の図面・写真類がないため他の詳細については不明である。

所属時期については取り上げ遺物からして古墳時代後期の可能性があるが、詳細は不明である。

出土遺物(第22図No1～8)

No.1から3は須恵器である。1は甕の肩部でなだらかである。沈線が2条巡り、上半に自然釉がかかる。胎土に白色鉍物粒を含む。2は高坏の裾部で坏部を欠損する。脚部は短く、裾はやや開き、端部が反り、丸味を持つ。3は甕の胴部破片と考えられ、内外面共にタタキを施す。

4から8は土師器である。4、5は鉢か大型の坏と考えられる。4はロクロ整形で底部は丁寧に回転ロクロ切り離しである。焼成は酸化炎と考えられ、赤褐色を呈する。5も赤褐色を呈しており、ロクロ整形の可能性が高い。6から8は甕である。6は口縁が「く」字状に僅かに外傾し、口唇が極僅かに内側に突出する。胴部は張らない。7は口縁が「く」字状に外傾し、口唇は丸味を持つ。胴部は張らない。8は小さな平底で、僅かに上げ底気味で、体部は余り開かず立ち上がる。



第22図 ST6 遺物実測図

ST7 (第23、24図)

グリッド:C8-13-11他 切り合い関係:ST9を切る、ST6、SB9、SD9に切られる

時期:7C前半? 形状:隅丸長方形 主軸方向:N-14° -E

規模:4.3×3.5m 深さ0.1m

覆土:? 柱穴:?

竈:位置・北 竈壁位置・やや東より 規模幅60cm 深さ?cm 他は不明

ベッド:無 周溝:無 その他付帯施設:無

出土遺物:土師器甕、不明鉄製品

所見:調査区北側部のグリッドC8-13-11に位置する。周辺にはST4・5・6・9の少なくとも4軒の竪穴建物跡が密集している。弥生時代後期後半のST9を切り、古墳時代後期のST7に切られる。

平面形は隅丸長方形と考えられ、長辺4.3m、短辺3.5m、深さ10cmである。主軸方位はN-14° -Eを指す。

覆土は土層図がないため不明である。柱穴は存在しないようである。周溝、ベッドも未確認である。

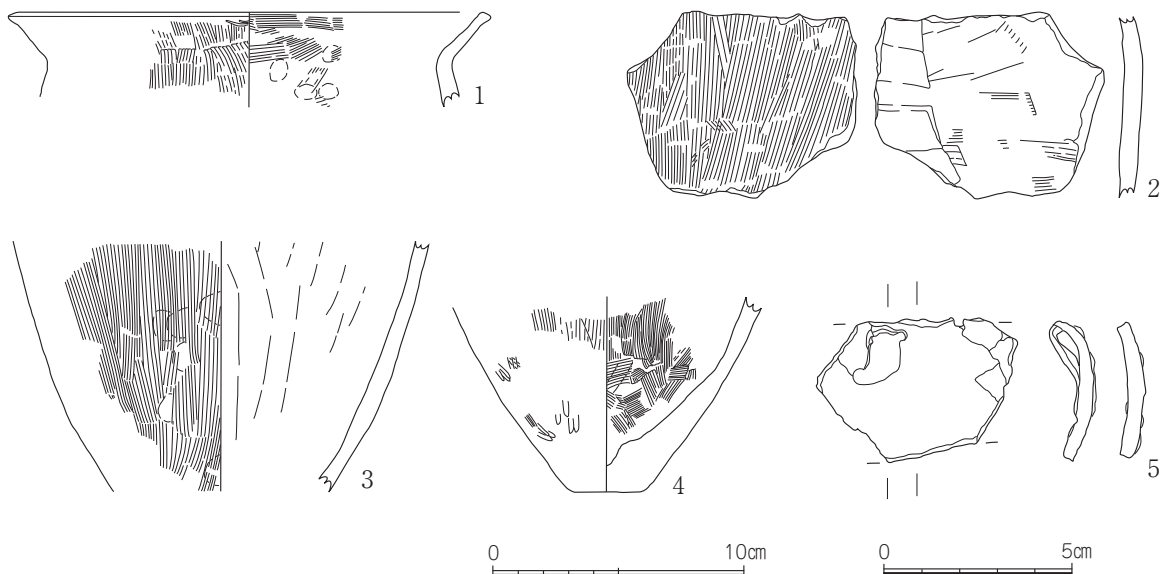
竈は北壁中央部でやや東寄りで見出している。竈の図面・写真類がないため他の詳細については不明である。

所属時期については取り上げ遺物からして古墳時代後期の可能性があるが、詳細は不明である。

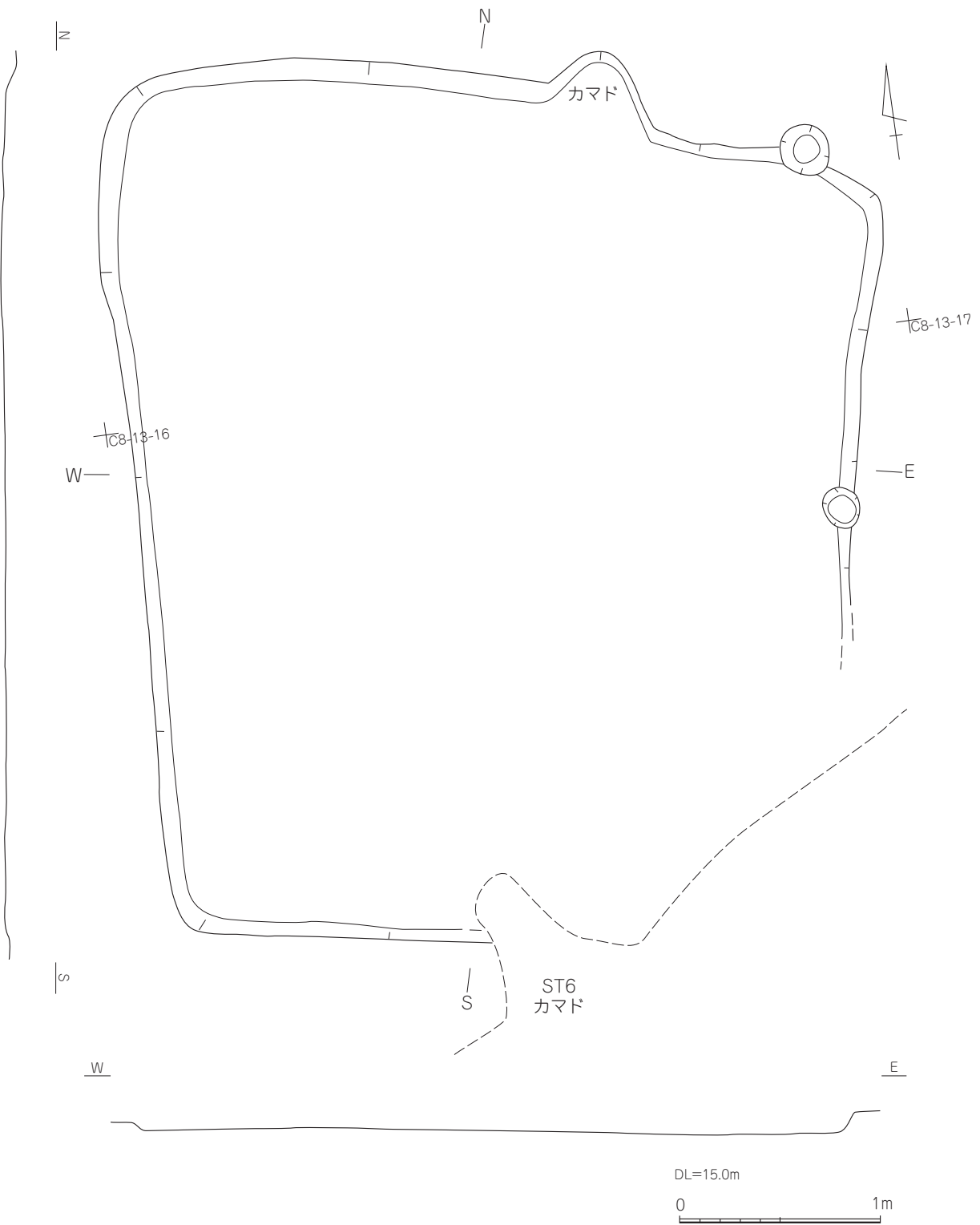
出土遺物(第23図No1～5)

No1から4は土師器甕である。1は口縁部破片で口縁「く」字状に外傾し、口唇は平坦、胴部は張らない。内外面共にハケ整形である。2、3は胴部破片で共に器肉は薄い。外面はハケ調整である。4は底部破片で小さな平底である。内外面共にナデとハケ調整である。

5は鉄製品で器種は不明である。刃部はなく、湾曲する。



第23図 ST7 遺物実測図



第 24 図 ST7 遺構図

ST8 (第25、26図)

グリッド:C8-17-2他 切り合い関係;SK1、SD2に切られる

時期:7C前半? 形状:方形? 主軸方向:N-14° -W

規模:(5)×(2.5) m 深さ0.14m

覆土:褐色土

柱穴:数(6) 主柱穴数- 主柱穴-

竈:位置・北壁 竈壁位置・中央部? 規模43×30cm 他は不明

ベッド:- 周溝:- その他付帯施設:-

出土遺物:土師器坏、甕片

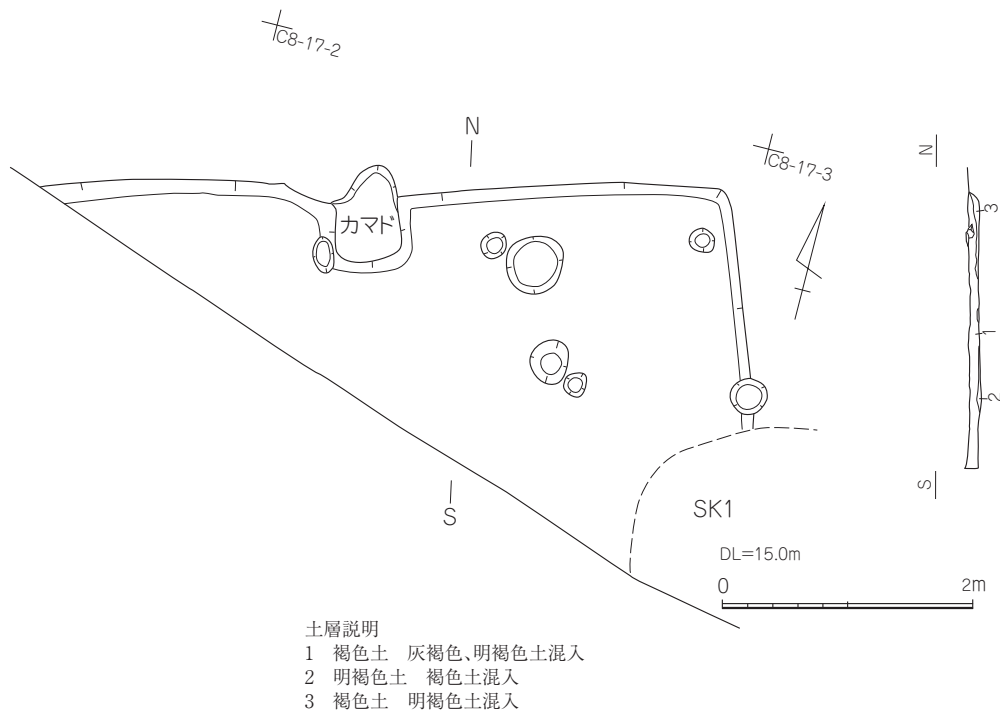
所見:調査区中央部のグリッドC8-17-2に位置する。平面形は長方形か方形と考えられる。規模については未調査区に広がる為、全容は不明である。深さは14cmである。主軸方位はN-14° -Wを指す。

覆土は褐色土のほぼ単一層である。柱穴は本建物跡に伴うものはないようである。周溝、ベッドも未確認である。竈は北壁中央部と考えられる位置で検出している。竈の図面・写真類がないため他の詳細については不明である。

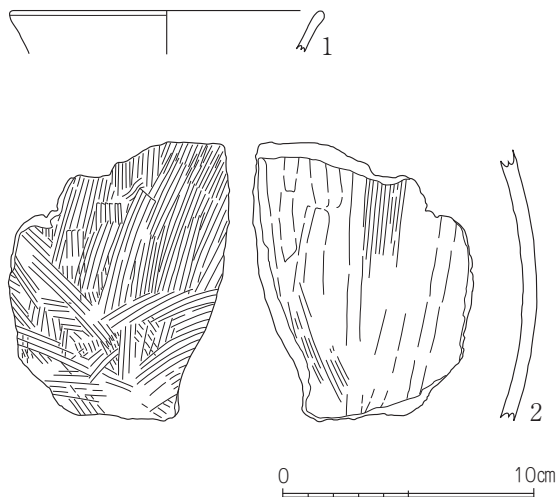
所属時期については取り上げ遺物からして古墳時代後期の可能性があるが、詳細は不明である。

出土遺物(第26図No1、2)

No1は土師器坏である。口縁は直立気味に開き、器肉薄い。内外面共にヨコナデである。2は甕の胴部破片である。器肉は6mmと薄い。外面ハケ、内面指ナデ、ハケ調整である。



第 25 図 ST8 遺構図



第26図 ST8 遺物実測図

ST9 (第27～29図)

グリッド：C8-13-16他 切り合い関係：ST4・5・6・7、SB9、SD9・10・13に切られる

時期：弥生時代後期後半Ⅵ期 形状：多角形

主軸方向：N-90°

規模：8.5×8.3m 深さ0.36m

覆土：？

柱穴：数20 主柱穴数7 主柱穴P1～7

炉跡：炉跡1 形状楕円形 規模178×61cm 深さ16cm 炉跡2 形状楕円形 規模74×39cm 深さ26cm

覆土不明

ベッド：有り？ 周溝：2条 幅7～13cm 深さ2～7cm その他付帯施設：-

出土遺物：弥生土器壺、甕、鉢、高坏、小型土器

所見：調査区北側部のグリッドC8-13-16に位置する。古墳時代後期と考えられるST4・5・6・7の4軒の竪穴建物跡の全てに切られる。

平面形は隅丸多角形で六角形の可能性がある。径8.5mを測る大型建物跡である。深さは36cmと比較的しっかりした掘り込みを持つ。主軸方位は炉跡1を基軸線とすると真北を指す。覆土は図面・写真類がないため不明である。主柱穴は7本と考えられる。多角形の角部分に主柱穴を配している。径30cmから40cmで深さも40cm前後のもので掘り方はしっかりしている。他に小柱穴を検出しているものの、本建物跡に伴うものではないと判断した。

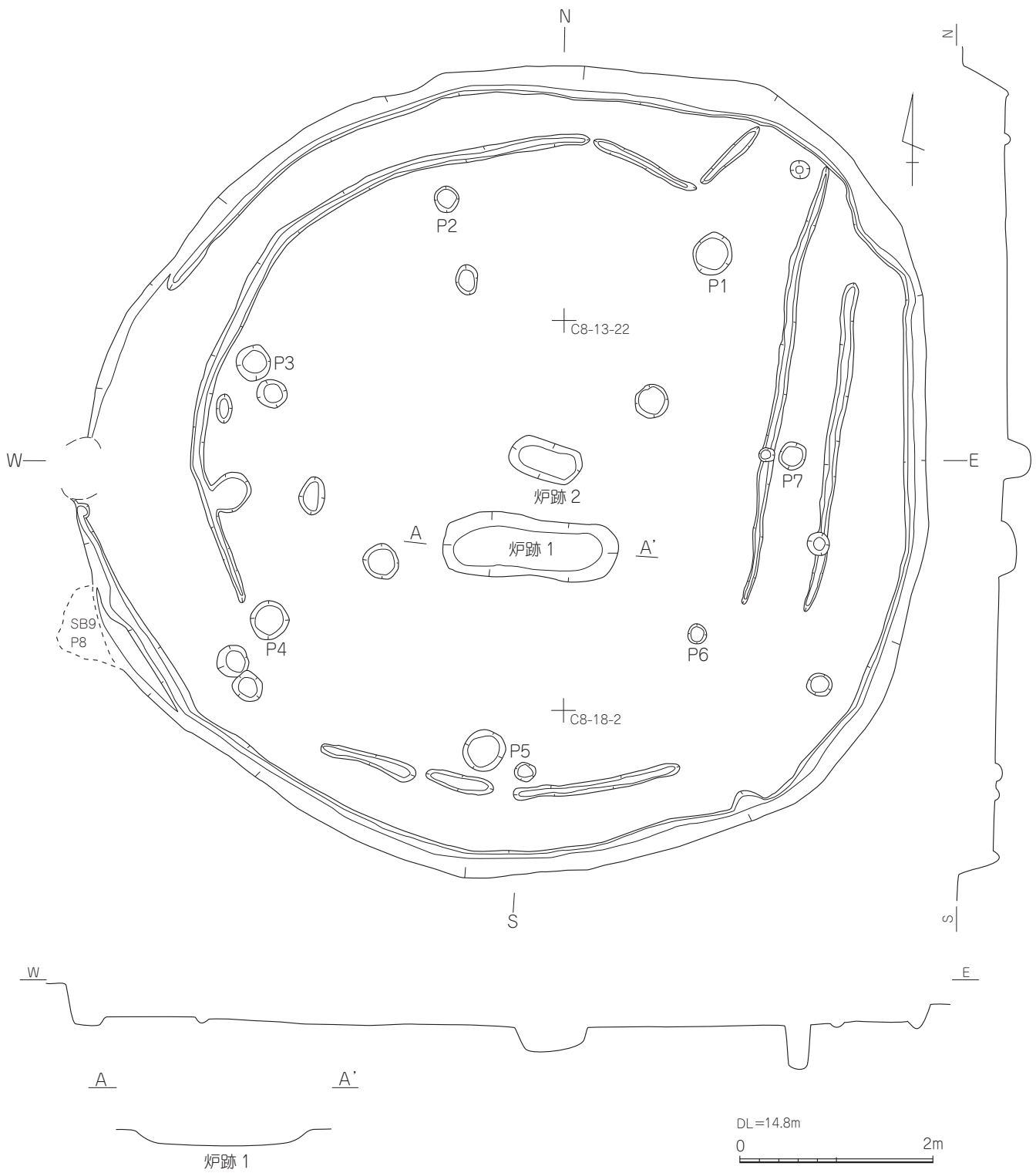
炉跡は2基検出している。炉跡1は建物跡中央よりやや南側寄りに位置する。規模は約1.7×0.6m、深さ16cmの楕円形を呈する。炉跡2は炉跡1に接し、同様に楕円形で規模は約0.7×0.3m、深さ26cmを測る。焼土等の有無は不明である。

ベッド状遺構は周溝を2条検出しているところから周溝間に挟まれた部分がベッド状遺構になるものと考えられる。幅50cm程度である。作り方については不明である。周溝は外壁際とやや内側で検出している。断続的で全周しない。東側の周溝2条は壁に沿っておらず直線的で意味不明である。

遺物は弥生時代後期後半の土器で特に鉢が多い。本竪穴建物跡は出土遺物からしてST1・2・3と同時期で弥生時代後期後半の所産と考えられる。

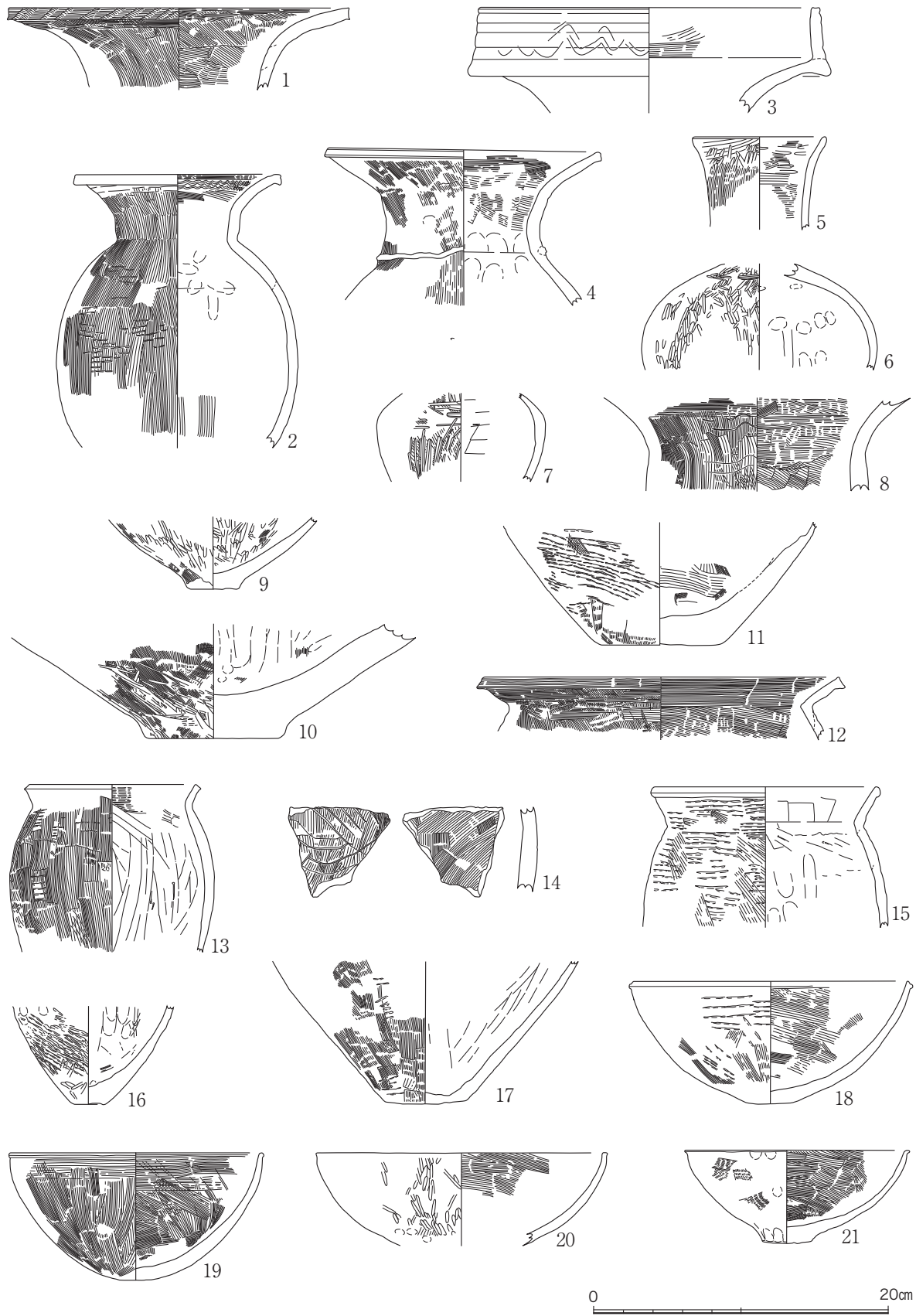
出土遺物(第28、29図No1～34)

No1から11は弥生土器壺である。1、2、4は広口壺で1は口径23.2cm、2はやや小さく14cmである。共に口縁が開く。2は口唇上端を僅かにつまみ上げる。整形はハケである。4は頸部に微隆起帯を施す。3は複合口縁壺である。口縁部が僅かに内傾気味に立ち上がる。波状文を施す。5は長頸壺で口縁が僅かに外反し、口唇は丸味を持つ。外面は丁寧なミガキである。6、7も長頸壺の肩部破片の可能性がある。6は肩部は余り張らない。7は僅かに張る。外面は共にミガキを施す。8は頸部破片で頸部は立ち上がり上部は外反する。9から11は底部破片である。共に平底で9はやや小型のものである。内面にもミガキを施しているところから鉢の可能性もある。10、11は底径9cm、7.7cmを測

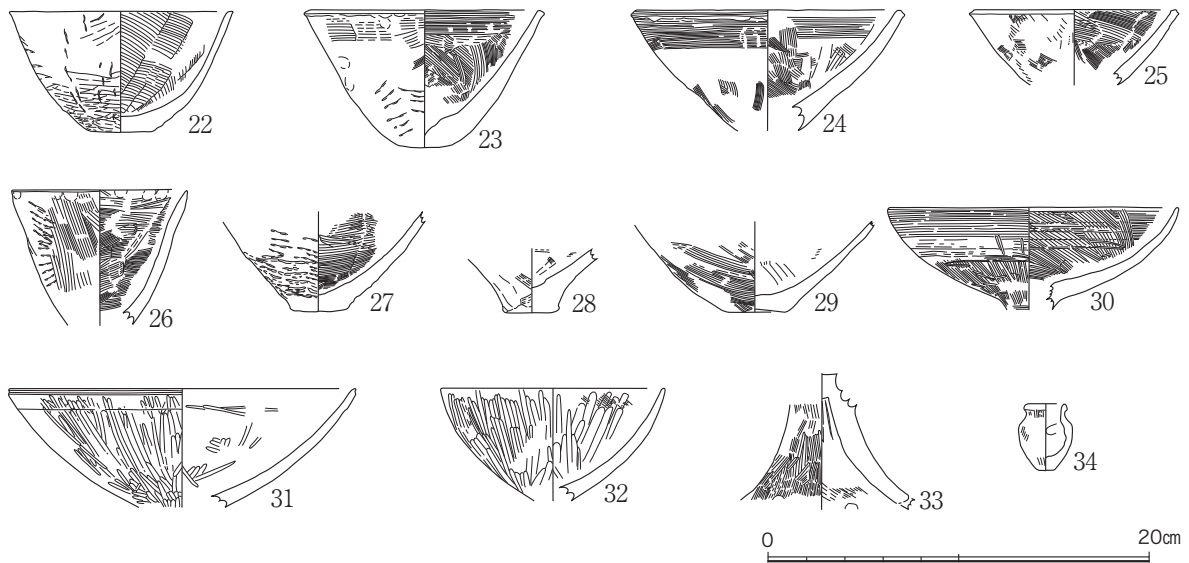


第 27 図 ST9 遺構図





第28図 ST9 遺物実測図(1)



第29図 ST9 遺物実測図 (2)

る大型品である。器肉も3cm、2cmと厚い。体部は大きく開く。11は外面の整形がタタキの後ナデ消す。

12から17は甕である。12は口縁が「く」字状に強く外傾し、口唇は面になる。内外面共にハケ整形である。13は小型甕で口径11.5cmである。口縁は短く緩やかに外反し、口唇は面になる。内面にはヘラケズリを施す。14は線刻を施した胴部破片である。木の葉状であるが題材は不明である。15は口縁が「く」字状に外傾し、外面はタタキ、ハケ、内面は指頭、ヘラケズリを施す。16、17は底部破片である。平底で、16は底径は小さく、体部も開かない。17は底径5.6cmとやや大きなベタ平底である。体部は開くところから壺の可能性もある。

18から29は鉢である。18から20は口径18cm前後を測る大型のものである。18の底部は僅かに平底、19は丸底である。21から24は中型のもので21は突出した小さな平底を有する。22から24は口径に比して器高が高くやや深いものである。22は平底で胴部に小ひび割れが多数入る。25、26は口径10cm前後の小型のものである。25は体部が直線的に開くもの、26は直線的に立ち上がるものである。27から29は底部破片である。27はやや突出した平底、28は突出した平底である。

30から33は高坏である。30、31の坏部は皿状を呈し、31は口径18.4cmを測る大型品である。口唇部に沈線が1条巡る。内外面ミガキを施す。32は口径11.9cmを測る小型の坏部でやや深い。33は裾部破片で円形透孔を有する。裾部は開く。

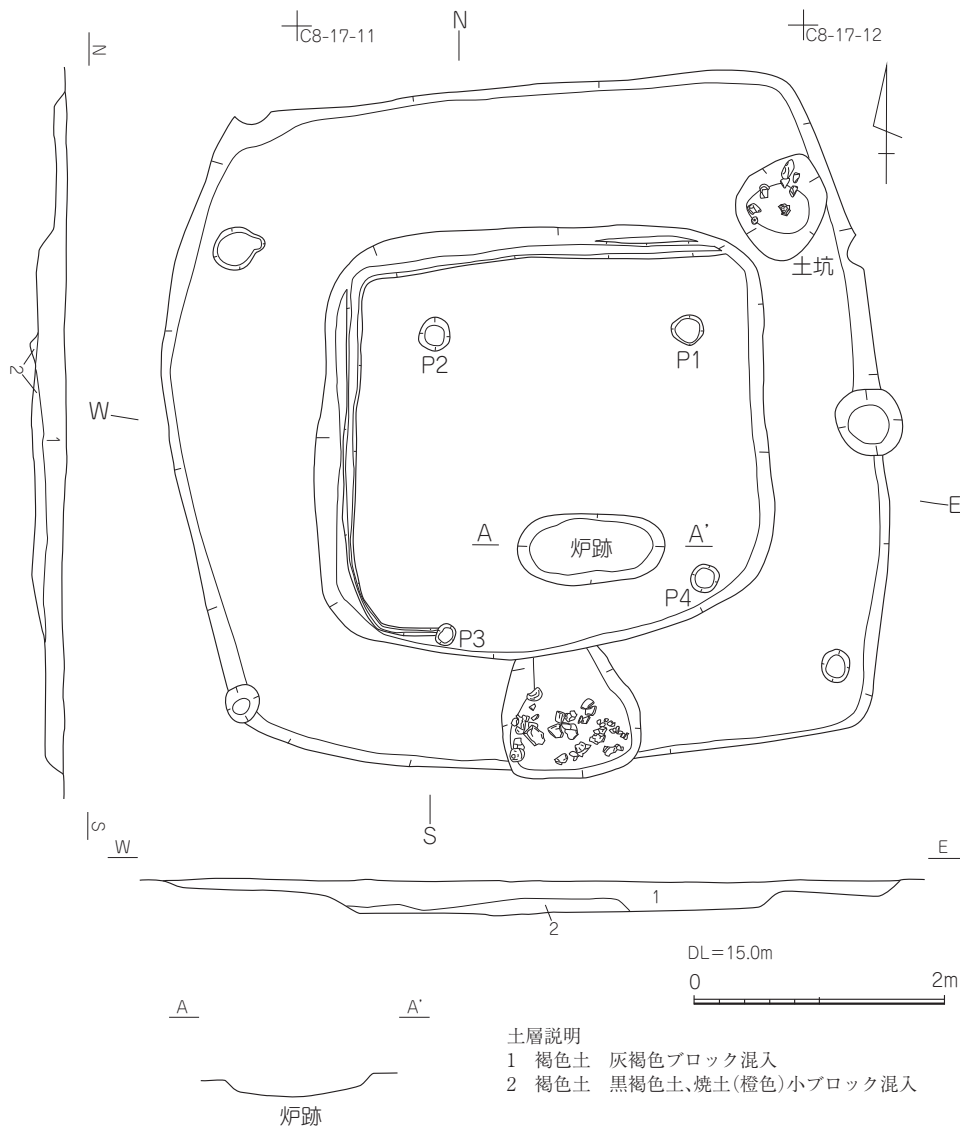
34は甕形の小型土器である。器高3.6cmで頸部が括れ、口唇は丸味を持つ。底部は平底である。内面は指頭で、外面はナデ、頸部にハケを施す。

### ST10 (第30～32図)

旧遺構名:Ⅶ-1ST2 グリッド:C8-17-11他 切り合い関係: SX7・8、SD40に切られる

時期:弥生時代後期末VI期 形状:隅丸方形 主軸方向:N-90°

規模:5.6×5.4m 深さ0.27m



第 30 図 ST10 遺構図

覆土:褐色土

柱穴:数8 主柱穴数4 主柱穴P1～4

炉跡:形状 楕円形 規模116×54cm 深さ15cm 覆土-

ベッド:有 幅72～110cm 高さ8～17cm

周溝:2条 幅5～12cm 深さ2～6cm

その他付帯施設:貯蔵穴?

出土遺物:弥生土器壺、甕、鉢、台付鉢、高坏、土製支脚、線刻土器、土製円盤、砥石、磨石

所見:調査区南側グリッドC8-17-11に位置する。平面形は隅丸方形である。一辺5.6mを測る中型建物跡である。深さは27cmと比較的しっかりした掘り込みを持つ。主軸方位は炉跡を基軸線とすると真北を指す。

覆土はほぼ単一層で褐色土主体である。支柱穴は4本と考えられる。それぞれの竪穴建物跡の四隅に穿たれている。径30 cm程度で深さ30 cm強のもので掘り方はしっかりしている。他に小柱穴を検出しているものの、本建物跡に伴うものではないと判断した。

炉跡は1基検出している。南側寄りに位置する。規模は約1.1×0.5m、深さ15cmの楕円形を呈する。焼土等の有無は不明である。



第31図 ST10遺物実測図(1)

ベッド状遺構は壁際で検出している。幅約90cm、高さ約15cm程度で全周する。写真で見ると造り付けの可能性がある。周溝は外壁際とベッド際で検出している。写真で見ると全周しているようであるが、平面図では断続的である。

ベッド北東隅で径約80cm、深さ37cmの土坑から纏まって遺物が出土しており、貯蔵穴の可能性はある。南側でも土器が纏まっているものこのについては貯蔵穴かどうかは不明である。

遺物は弥生時代後期後半から終末の土器で特に鉢が多い。本竪穴建物跡は出土遺物からして弥生時代後期終末の所産と考えられる。

#### 出土遺物(第31、32図No1～31)

No.1から4は壺である。1は広口壺で口径17.6cmで外反する。2は複合口縁壺か。口縁は内傾し、受け口状を呈する。内外面共にハケ整形である。3は直口壺か。口径11.8cmを測り、口縁は直線的にやや開き、口唇内外面をヨコナデし、やや口唇尖る。内外面共にハケ整形である。4は壺の底部破片である。底径5.2cmでほとんど丸底である。器肉は極めて厚く、最大で2.5cmを測る。

5は甕の底部と考えられる。やや小さな平底で、体部余り開かず、下半は丸味を持つ。器肉はやや厚く、外面ハケ、内面指ナデ整形である。

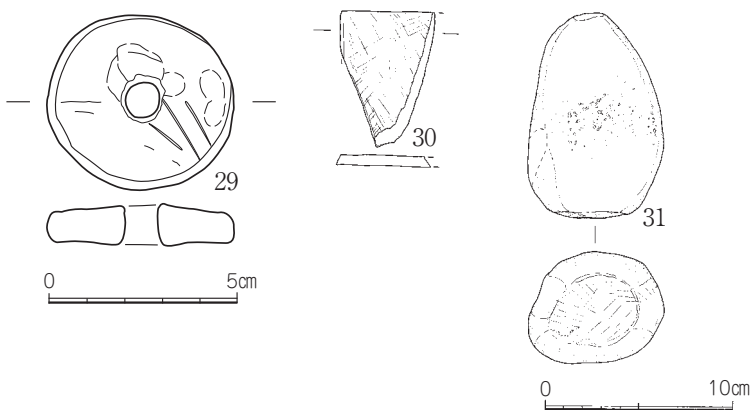
6から20は鉢である。6から11は口径20cm前後の大型と17cm前後のやや大型のものである。6は口径20.3cmを測る大型で、底部はやや尖り気味の丸底である。全体的に碗状を呈する。8は僅かに平底で体部開き、口縁が僅かに直立気味である。外面にタタキ目を残す。9は口縁が直線的に開く。底部は丸底気味である。11は体部に丸味を持つものである。12はやや小型のもので口径12.2cmを測る。底部は厚く平底で体部は碗状を呈する。13、14は小型で口径7.3cm、7.5cmをそれぞれ測る。13は丸味を持ち口縁が内弯気味である。14は体部の開くものである。底部は共に平底である。15から20は底部破片である。15は大型鉢の底部の可能性があり、尖底気味である。体部は大きく開く。16は底径3.5cmで平底である。17は底径1.9cmと小さな平底である。18、19は僅かに突出した平底で、19は体部が開く。20は尖底で、体部は丸味を持ち、体部が開かない。

21は台付き鉢である。低い脚がつき、鉢部は頸部でくびれ、口縁が直線的に広がる。器肉薄い。

22は高坏の脚部破片である。坏部は欠損し、脚部裾は直線的に広がる。内面紋り。

23から25は土製支脚の脚部である。全て中空で、裾際やや広げる。26から28は胴部破片に線刻を施したもので題材は不明である。29は土製円盤で径4.9cmを測り、中央部には焼成前円孔を穿つ。円孔は1.1cm、重さは23gである。

30は扁平な砥石である。表面のみに擦痕が認められ、側縁は全て折断する。粘板岩製である。31はスタンプ状の磨石である。一端部が平坦で、摩耗が明確である。



第32図 ST10 遺物実測図(2)



## 第2節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は現地調査では16棟検出している。

大型の掘立柱建物跡が多く、調査区北側中央部に比較的纏まる。特にSB8は大型のもので本遺跡でも最大級のものである。

軸方向を見てみると北側部のSB7、8、13は桁行が東西棟で梁間方向はほぼ北方向を指す。しかしながら出土遺物からして、時期的には隔たりがあるようである。最も古い段階のものはSB13の古墳時代後期に含まれると考えられ、次いでSB8で8世紀と考えられる。SB7は10世紀以降の可能性はある。

桁行が南北棟のものはSB9、10の2棟の調査区の中心部分に展開するものと、SB1、4、6、11の東側に展開する4棟に大きく分かれる。時期的にはそれぞれが違っているようで、古墳時代後期のものと古代のものに分かれているようである。

Ⅶ-1区に相当する調査区南側では南端でSB16の1棟しか検出していない。攪乱が多かったことを考慮に入れたとしても実際に掘立柱建物跡の展開が限られていたと考えられる。

16棟の掘立柱建物跡の中には弥生時代のものは含まれていない。それ以外に図面上で復元できそうなものが4、5棟ありそうだが、不確かなため省略した。それらについては柱穴の規模が小さいことから近世の可能性はある。

SB3は欠番、SB12・15はSB10、Ⅶ-2拡張区SB1をSB16に変更した。掘立柱建物跡の各柱穴の土層断面図はない為にSB16以外は提示できなかった。エレベーションについても、現地での作成ではなく、航測図面を元に整理作業の中でおこしたものである。さらに掘立柱建物跡の一覧表第2表の柱痕平均径、柱痕平均深さも同様に航測図面からおこしたもので正確さには欠ける。柱痕の深さは柱穴の確認面から底面で検出した柱痕の深さで、柱痕掘り方径は柱穴の底面に残存していた柱痕の大きさである。

第2表 掘立柱建物跡一覧表

SB番号	調査区	グリッド	時期	軸方向	桁行	梁間	面積 (㎡)	柱穴 形状	柱穴掘方平 均径(m)	柱穴掘方平 均深さ(m)	柱痕平均 径(m)	柱痕平均 深さ(m)	遺物
SB1	Ⅶ-2	C8-14-12他	不明	N-8° -E	3	(1)		円形	0.78	0.39	0.15	0.46	
SB2	Ⅶ-2	C8-14-8他	古代	N-10° -E	(2)	(1)		円形	0.62	0.14			須恵坏
SB4	Ⅶ-2	C8-14-16他	10C?	N-70° -E	2	2	11.28	円形	0.76	0.39	0.24	0.55	土師坏
SB5	Ⅶ-2	C8-11-22他	古墳前?	N-73° -W	(4)			円形	0.78	0.37	0.38	0.38	土師高坏
SB6	Ⅶ-2	C8-14-21他	古代?	N-9° -E	(3)	(2)		円形	0.71	0.3	0.15	0.46	土師坏
SB7	Ⅶ-2	C8-13-12他	古代	N-88° -E	4	2	24.08	方形	0.8	0.46	0.27	0.46	円盤状坏
SB8	Ⅶ-2	C8-13-6他	8C?	N-83° -W	5	(2)		方形	0.88	0.6	0.24	0.62	須恵器長頸壺
SB9	Ⅶ-2	C8-12-20他	10C?	N-4° -W	3	(1)?	19.52	方形	0.7	0.37	0.23	0.43	坏
SB10	Ⅶ-2	C8-12-23他	古代	N-4° -W	4	3	33.63	方形	0.71	0.3	0.4	0.37	須恵高坏
SB11	Ⅶ-2	C8-14-21他	古代	N-90°	(3)	(1)		方形	0.75	0.5	0.2	0.39	坏
SB13	Ⅶ-2	C8-12-11他	7C前半	N-83° -W	3	3	37.59	方形	0.74	0.37	0.24	0.45	須恵坏蓋
SB14	Ⅶ-2	C8-17-10他	古墳後期	N-74° -W	(2)	(1)		円形	0.72	0.35			須恵坏蓋
SB16	Ⅶ-2拡張	C8-16-23他	不明	N-15° -E	(2)	2		円形	0.75	0.25	0.24	0.25	

**SB1 (第33図)**

グリッド;C8-14-12他 切り合い関係;ST1を切る

時期;不明 主軸方向;N-8°-E

規模;桁行3間×梁間(1)間 桁行4.41m×梁間(1.53)m 柱間距離 桁行1.29～1.57m(平均1.47m)  
梁行1.53m(平均1.53m) 面積不明

柱穴数;6 柱形状;円形 柱痕;有 柱穴規模;径平均0.78m 深さ平均0.39m

覆土;不明 出土遺物;弥生土器細片

所見;調査区東C8-14-12グリッドで検出した。弥生時代後期後半のST1の上に構築されている。またSB4とも隣接しているものの切り合い関係、新旧関係は不明である。全容は調査区外へと続くらしく不明である。調査区内で検出した柱穴は6基である。ST1の上面で検出したP1、P2は検出した段階で調査をしておらず、最終的にST1を掘り上がった後のST1の床面で航測図面に残っているのみで、本来の規模等については不明である。柱穴の形状は円形で径は平均78cmと比較的大きく、深さも平均39cmを測る。柱痕も一部底面に残存していた。

桁行南北列は3間で4.4mを測る。梁間は検出しているのは1間ではあるが本来は2間の可能性が強い。軸方向はN-8°-Eで僅かに東に振る。

掲載できる遺物は出土しておらず、時期は特定できないものの、古墳時代か古代の可能性がある。

**SB2 (第34、46図)**

グリッド;C8-14-8他 切り合い関係;なし

時期;古代8C? 主軸方向;N-10°-E

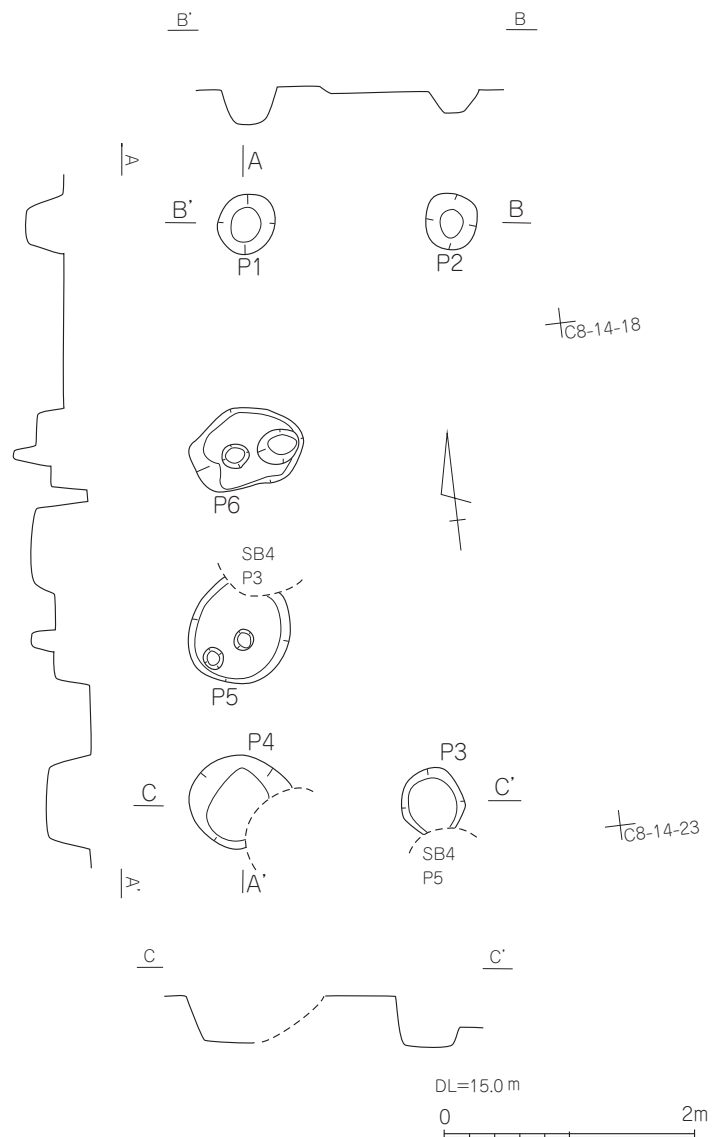
規模;桁行(2)間×梁間(1)間 桁行(3.43)m×梁間(1.36)m 柱間距離 桁行1.60m、1.83m(平均1.72m)  
梁行1.36m(平均1.36m) 面積不明

柱穴数;4 柱形状;円形 柱痕;無

柱穴規模;径平均0.62m 深さ平均0.14m

覆土;不明 出土遺物;須恵器坏、土師器坏

所見;調査区東北C8-14-8グリッドに



第33図 SB1 遺構図



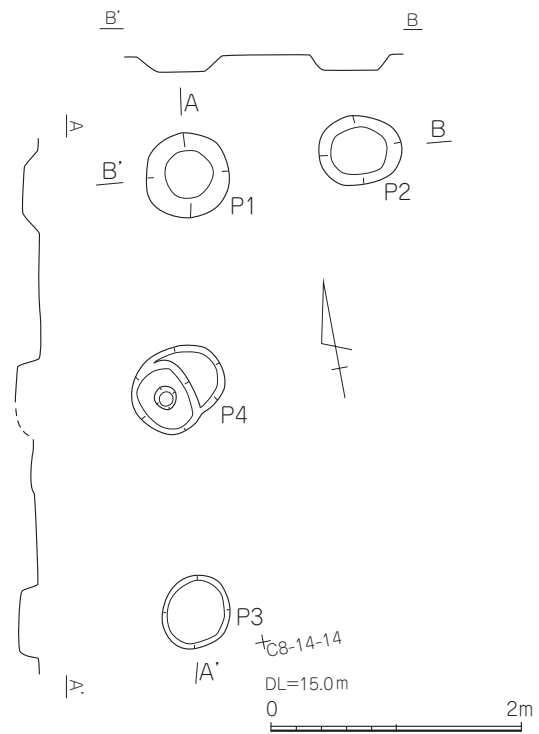
位置する。全容は調査区外へと続く為、不明である。調査区内で検出した柱穴は4基である。柱穴の形状は円形で径は平均62cm、深さは平均14cmと極めて浅く、断面は皿状を呈していたものと考えられる。柱痕は検出していない。

桁行は2間検出しているものの、2間以上であろう。検出長は4.4mである。梁間も1間以上と考えられる。検出長は1.36mである。軸方向はN-10°-Eでやや東に振る。

所属時期は出土遺物からして8Cの可能性のあるものの、掘り方が浅いこともあり不確実である。

出土遺物(第46図No1、2)

No1は須恵器坏の口縁部破片である。口径10.8cmを測り、口縁は僅かに外傾気味である。腰部もやや屈曲する。2は土師器坏の底部細片である。底径5.6cmを測る。底部の切り離しはヘラ切りか。



第34図 SB2遺構図

#### SB4 (第35、46図)

グリッド;C8-14-16他 切り合い関係;C8-14-22P18を切る

時期;古代10C? 主軸方向;N-70°-E

規模;桁行2間×梁間2間 桁行3.64m×梁間3.10m 柱間距離 桁行1.79～1.85m(平均1.82m) 梁行1.41～1.64m(平均1.54m) 面積11.28㎡

柱穴数;8 柱形状;円形 柱痕;有 柱穴規模;径平均0.76m 深さ平均0.39m

覆土;不明 出土遺物;土師器坏

所見;調査区東C8-14-16グリッドで検出した。SB1とも隣接しているものの切り合い関係、新旧関係は不明である。検出した柱穴は8基である。柱穴の形状は円形で径は平均76cmと比較的大きく、深さも平均39cmを測る。規模的にはSB1と近似する。柱痕も一部底面に残存していた。

桁行東西列は2間で3.64mを測る。梁間南北列も2間で3.1mを測る。軸方向はN-70°-Eで大きく東に振る。

所属時期は出土遺物からして10Cの可能性のあるものの、出土遺物は1点のみであるため不確かである。

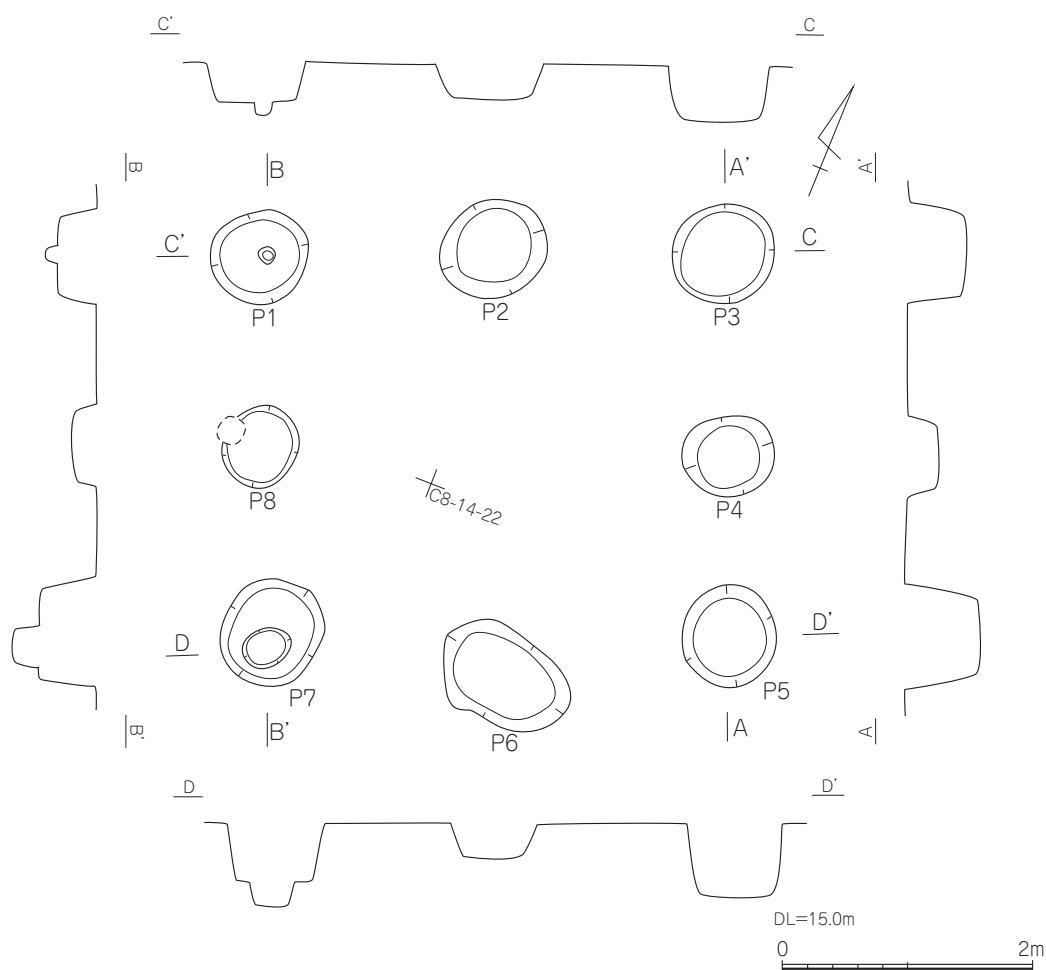
出土遺物(第46図No1)

No1は土師器坏の口縁部細片である。口径12.6cmを測り、口縁は直線的に僅かに開く。内外面共にナデ整形である。

#### SB5 (第36、46図)

グリッド;C8-11-22他 切り合い関係;なし

時期;古墳時代前期? 主軸方向;N-73°-W



第 35 図 SB4 遺構図

規模；桁行(4)間×梁間－ 桁行(8.28) m × 梁間－ 柱間距離 桁行1.62～2.17m (平均1.90m) 梁行－ 面積不明

柱穴数:4 柱形状:円形 柱痕:有 柱穴規模:径平均0.78m 深さ平均0.37m

覆土:不明 出土遺物:土師器高坏

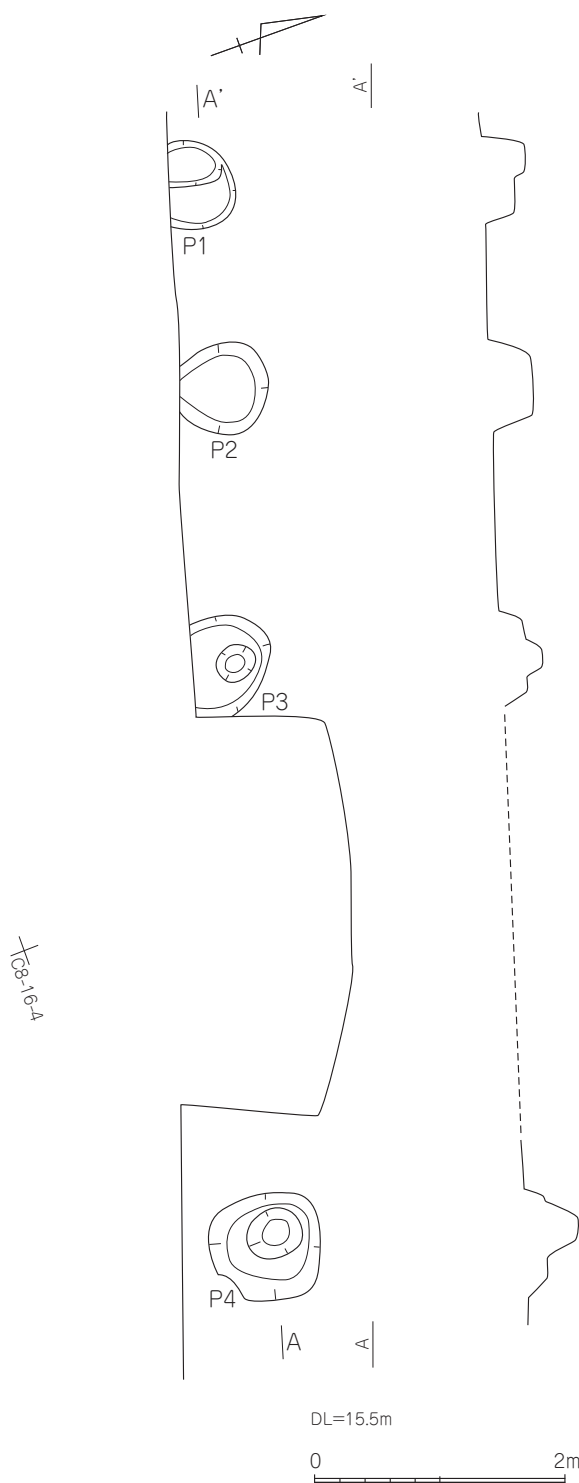
所見；調査区西北C8-11-22グリッドで検出した。南側が農道に切られているため規模等は不明である。検出した柱穴は4基である。柱穴の形状は円形で径は平均78cmと大型である。深さも平均37cmを測る。柱痕も一部底面に残存していた。

桁行東西列は東から2つ目の柱穴を検出していないものの4間と考えられ、検出長8.28mを測る。梁間は不明である。軸方向はN-73°-Wで大きく東に振る。

所属時期は出土遺物からして古墳時代前期初頭の可能性があるものの、出土遺物は1点のみであるため不確かである。

出土遺物(第46図No1)

No1は土師器高坏の裾部である。裾は大きく開き、径18.6cmを測る。径1cm程度の円形透孔を有する。器肉は5mmと薄い。外面はハケとミガキ、内面は細かい丁寧なハケである。古墳時代初頭か。



第 36 図 SB5 遺構図

1.67m) 梁行1.54 ~ 1.89m (平均1.72m) 面積24.08 m<sup>2</sup>

柱穴数:12 柱形状:方形 柱痕:有 柱穴規模:径平均0.80m 深さ平均0.46m

覆土:不明 出土遺物:須恵器壺、甕、土師器坏、碗

### SB6 (第37、46図)

グリッド:C8-14-21他 切り合い関係:SB11、C8-19-1P1を切る

時期:古代? 主軸方向:N-9°-E

規模:桁行(3)間×梁間(2)間 桁行(5.30)m × 梁間(3.18)m 柱間距離 桁行1.53 ~ 2.00m (平均1.77m) 梁行1.57m、1.61m (平均1.59m) 面積不明

柱穴数:6 柱形状:円形 柱痕:有 柱穴規模:径平均0.71m 深さ平均0.30m

覆土:不明 出土遺物:土師器坏細片

所見:調査区東C8-14-21グリッドで検出した。SB11と切り合い関係にあり、SB11より新しいと考えられる。調査区外に広がる。検出した柱穴は6基である。柱穴の形状は円形で径は平均71cmと比較的大きく、深さも平均30cmを測る。規模的にはSB11と近似する。柱痕も一部底面に残存していた。

桁行南北列は3間で5.3mを測る。梁間は調査区内で2間で3.1mを測る。軸方向はN-9°-Eで僅かに東に振る。

所属時期は出土遺物からして古代の可能性はあるものの、出土遺物は1点のみであるため不確かである。

出土遺物(第46図No1)

No1は細片のため判然としないが、土師器坏と考えられる。口縁は僅かに開き、内外面共にナデ整形である。時期は古代か。

### SB7 (第38、46図)

グリッド:C8-13-12他 切り合い関係:SD10に切られる

時期:古代 主軸方向:N-88°-E

規模:桁行4間×梁間2間 桁行6.70m × 梁間3.56m 柱間距離 桁行1.50 ~ 1.76m (平均

所見；調査区中央北側 C8-13-12 グリッドで検出した。SB9とは1.3m離れて位置する。検出した柱穴は6基である。柱穴の形状は方形で辺は平均80cmと比較的大きく、深さも平均46cmを測る。柱痕も一部底面に残存していた。

桁行東西列は4間で6.7mを測る。梁間は2間で3.56mを測る大型の建物跡である。軸方向は東西棟でN-88°-Eでほぼ真東向く。

所属時期は出土遺物からして古代末の可能性はある。

出土遺物(第46図No.1～5)

No.1から3は土師器である。1、2は碗で底部は円盤状高台で同じ柱穴跡から出土しているところから同一個体の可能性

がある。底部は回転糸切りで、底径7cm強である。内外面共に回転ナデである。3は坏である。底部は回転ヘラ切りで、体部は直線的に外傾する。体部内外面共にロクロナデで、内面底は回転ロクロ渦巻きが明瞭に残る。

4、5は須恵器である。4は壺か鉢の底部である。平底で腰部は丸味を持ち、体部やや開き気味である。内外面共にナデ調整である。5は甕と考えられる。内外面にタタキ整形が認められる。比較的大型のものと考えられる。

### SB8 (第39、46図)

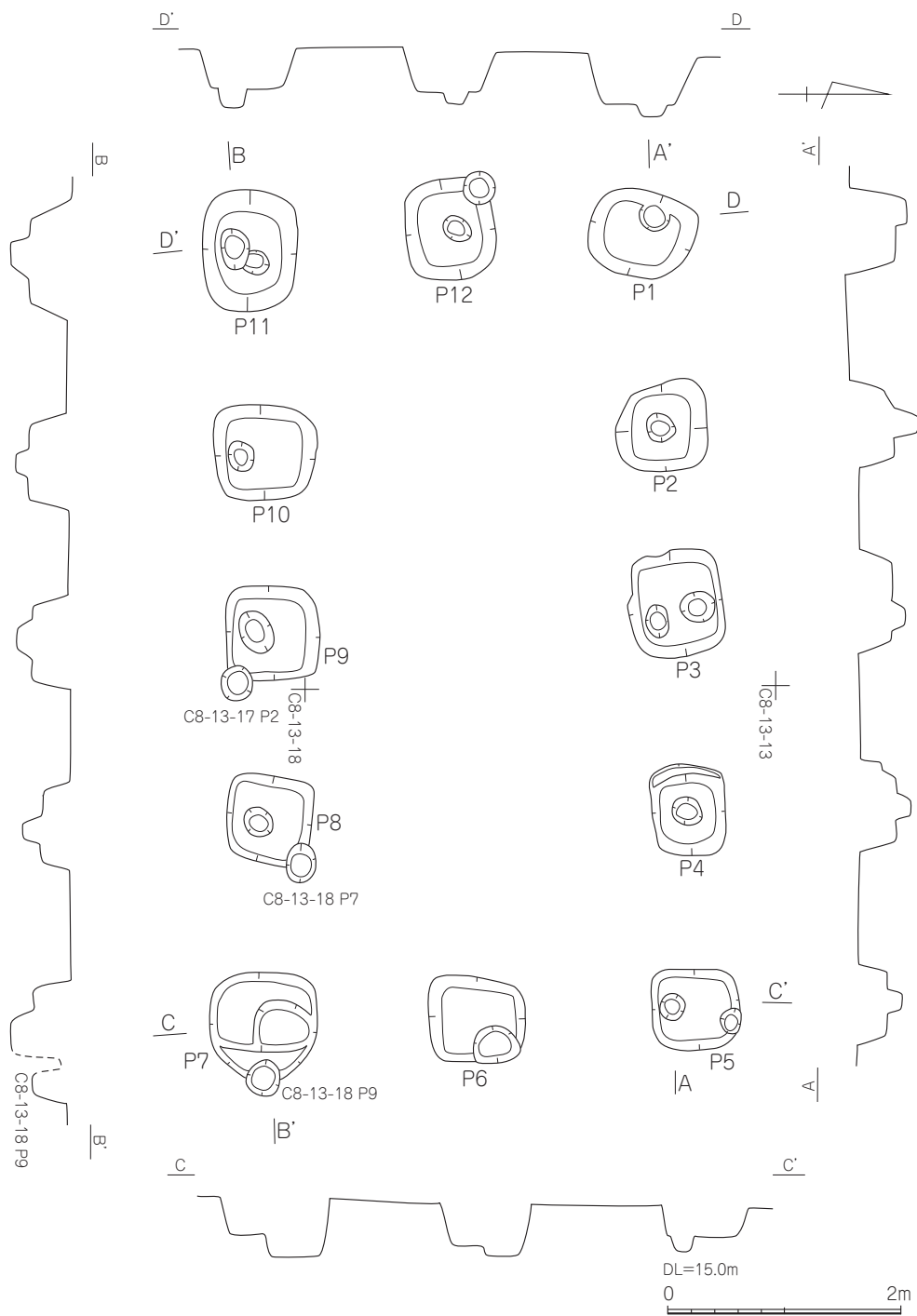
グリッド；C8-13-6他 切り合い関係；SK20、SX2に切られる

時期；8C前半？ 主軸方向；N-83°-W

規模；桁行5間×梁間(2)間 桁行12.0m×梁間(2.85)m 柱間距離 桁行1.94～2.24m(平均2.01m) 梁行1.40m、1.45m(平均1.43m) 面積－



第37図 SB6遺構図

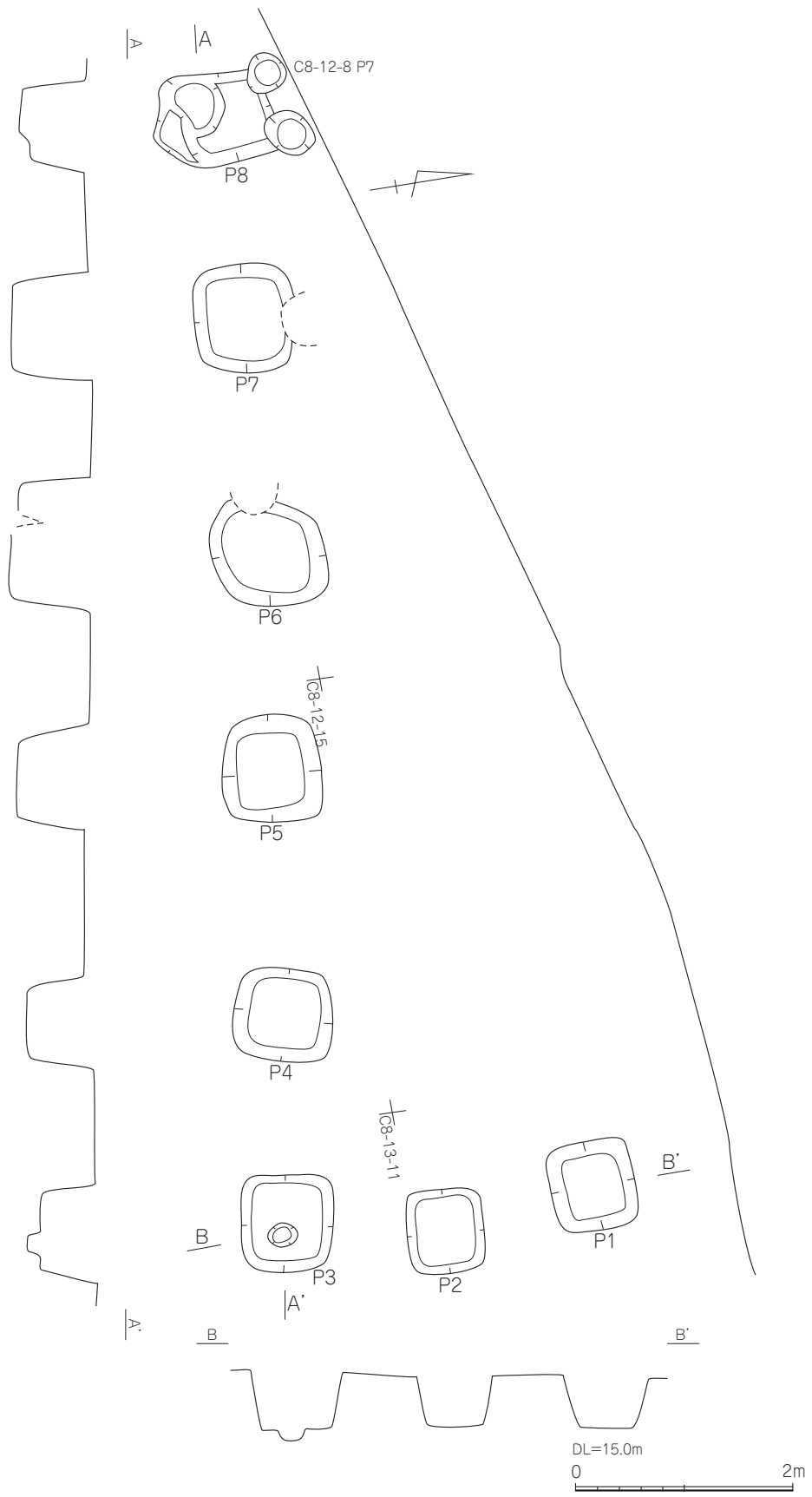


第 38 図 SB7 遺構図

柱穴数:8 柱形状:方形 柱痕:有 柱穴規模:径平均0.88m 深さ平均0.60m

覆土:不明 出土遺物:須恵器坏蓋、壺、甕、土師器皿

所見:調査区中央北側C8-13-6グリッドで検出した。更に調査区外北側に広がる。SB7とは3.7m離れて位置する。検出した柱穴は8基である。柱穴の形状は方形で辺は平均80cmと比較的大きく、深さも平均46cmを測る。柱痕も一部底面に残存していた。



第 39 図 SB8 遺構図

桁行東西列は5間で10.7mを測る。梁間は調査区内では2間で2.85mを測る。梁間はそれ以上と考えられる。本調査区では最大規模の大型の建物跡である。本遺跡内でも最大級の規模である。東西棟で軸方向はN-83°-Wでほぼ東向く。

所属時期は出土遺物からして古代の可能性がある。

出土遺物(第46図No1～5)

No1は土師器皿である。口径18.4cmを測るやや大きな皿である。体部は僅かに丸味を持ち、内外面共にナデ整形である。

2から5は須恵器である。2は坏蓋で端部にはかえりを有さない。口径は16.8cmを測る。天井部は回転ヘラケズリで平らである。3は壺の底部破片である。二重高台のような付け高台で、腰部に余り丸味を持たず、体部立ち上がる。高台径は10.4cmを測る。4は壺の肩部破片である。肩部は屈曲し、沈線が1条巡る。肩部の径は17.6cmを測る。内外面共に回転ナデ整形である。3、4は同一個体の可能性が極めて強く、また同一柱穴7からの出土である。5は甕か壺の胴部破片である。外面が格子タタキの後、ハケ整形、内面が渦巻きタタキである。

### SB9 (第40、47図)

グリッド:C8-12-20他 切り合い関係:ST6・7・9を切る、SD9・13・16に切られる

時期:古代10C? 主軸方向:N-4°-W

規模:桁行3間×梁間(1)間? 桁行5.53m×梁間(3.53)m 柱間距離 桁行1.65～1.96m(平均1.80m)  
梁行- 面積19.52㎡

柱穴数:8 柱形状:円形、方形 柱痕:有 柱穴規模:径平均0.70m 深さ平均0.37m

覆土:不明 出土遺物:土師器坏、甕、須恵器甕

所見:調査区中央部C8-12-20グリッドで検出した。SB10が西側に隣接している。検出した柱穴は8基である。柱穴の形状は西列は方形である。東列は円形となっているものの、ただ単に調査をせず下層の堅穴建物跡ST6の床面で捉えた為に円形となったものと考えられ、本来は西列と同様の方形と考えられる。柱穴の規模は一辺平均70cmと比較的大きく、深さも平均37cmを測る。柱痕も一部底面に残存していた。

桁行南北列は3間で5.5mを測る。梁間は1間で3.5mを測る。検出写真では梁間は2間だったものが、完掘は1間となっている。SB9の柱穴を調査せず下層のST6の調査を行った為に図面等が作成されていないようである。軸方向はN-4°-Wで僅かに西に振る。

所属時期は出土遺物からして古代末の可能性がある。

出土遺物(第47図No1～5)

No1、2は土師器坏である。1の腰部は僅かに屈曲し、内外面共にナデ調整である。色調は黄褐色を呈する。2は口縁部が直線的に開き、外面はロクロ目を顕著に残す。3は甕で口縁が外反し、口唇を摘み上げる。肩部は張らない。口縁内外面共にナデ、胴部はハケ調整である。5は須恵器甕片で外面が平行タタキ、内面が同心円文タタキで、器肉は8mmを測る。

4は混入品の弥生土器の蓋である。蓋上端はやや凹み、ミガキ調整を施す。裾部は開く。内面がハケ、外面がナデ整形である。



**SB10** (第41、47図)

グリッド:C8-12-23他 切り合い関係:SK2・3・9、SD14に切られる

時期:古代 主軸方向:N4°-W

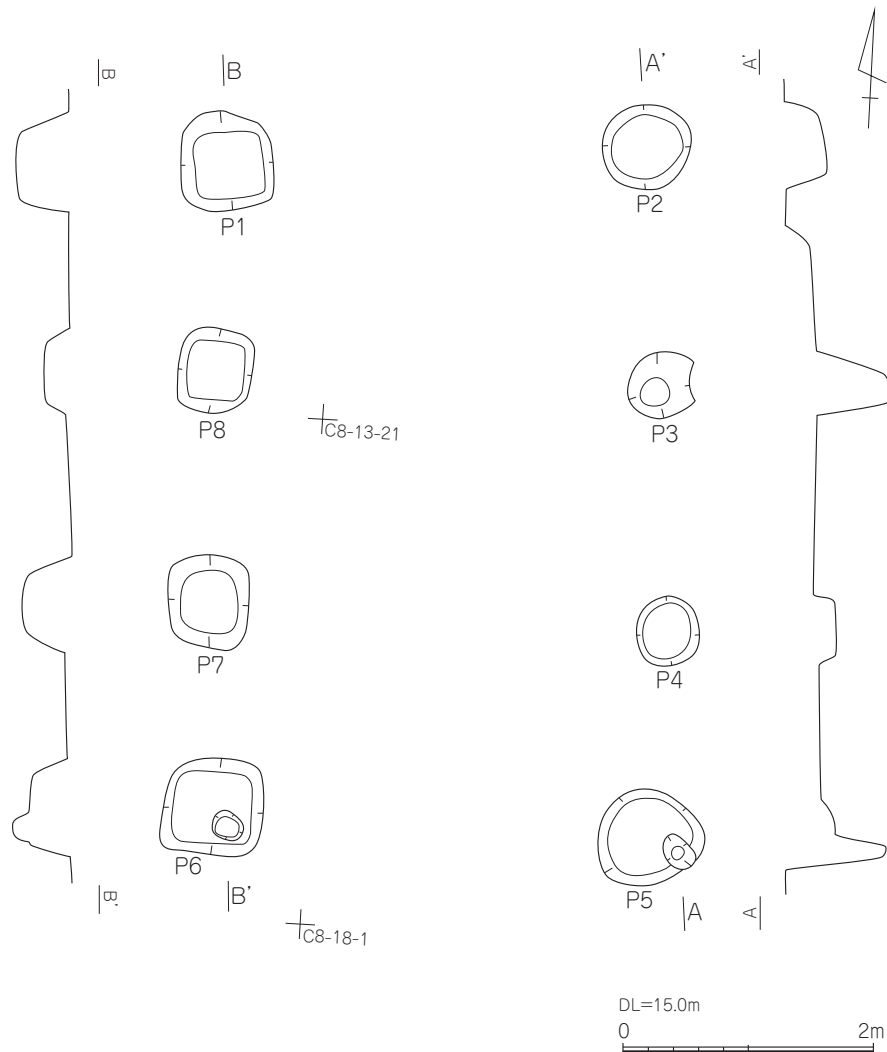
規模:桁行4間×梁間3間 桁行5.88m × 梁間5.72m 柱間距離 桁行1.20 ~ 2.58m (平均1.63m) 梁行1.62 ~ 2.10m (平均1.88m) 面積33.63 m<sup>2</sup>

柱穴数:13 柱形状:方形 柱痕:有 柱穴規模:径平均0.71m 深さ平均0.30m

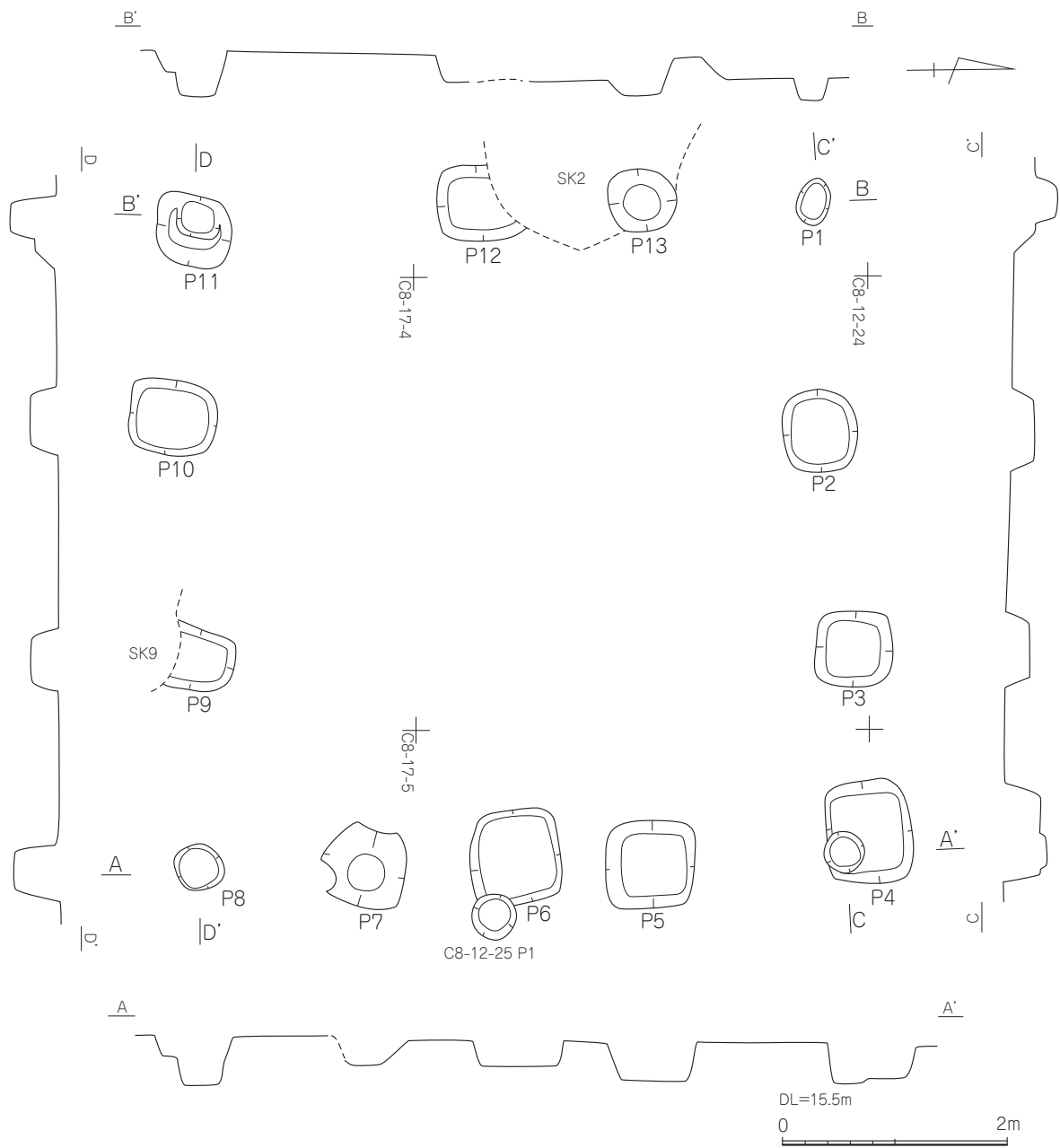
覆土:不明 出土遺物:須恵器壺、高坏、土師器坏、置き竈

所見:調査区中央部C8-12-23グリッドで検出した。SB9が東側に隣接している。検出した柱穴は13基である。当初SB10、12、15の3棟と考えていたようであるが、最終的にはSB10の1棟のみと判断している。柱穴の形状は方形である。柱穴の規模は一辺平均71cmと比較的大きく、深さは平均30cmを測る。柱痕も一部底面に残存していた。

桁行南北列は4間で5.88mを測る。西列は柱穴が1基欠ける。東列の柱間距離はやや不規則である。梁間は3間で5.72mを測り、桁行とほぼ同じ長さである。軸方向はN4°-WでSB9と同様で僅



第40図 SB9遺構図



第41図 SB10遺構図

かに西に振る。所属時期は出土遺物からして古代末の可能性はある。

出土遺物(第47図No1～4)

No1は土師器坏である。口径12cmを測り、口縁は僅かに内弯気味に開く。内外面共にナデ調整である。

2は置き竈と考えられる。部位は判然としないが、焼き口部の可能性がある。突帯が巡り、内面は縄目タタキ、外面は指頭である。

3は須恵器壺か。外面はハケ状の調整、内面はナデ調整である。胎土に白色鉍物粒を含む。4は高坏の脚部である。脚部裾は広がる。

### SB11 (第42、47図)

グリッド:C8-14-21他 切り合い関係:  
ST3を切る、SB6、C8-19-6P2に切られる

時期:古代 主軸方向:N-90°

規模:桁行(3)間×梁間(1)間 桁行  
(5.22) m × 梁間(1.95) m 柱間距離  
桁行1.63 ~ 1.83m (平均1.74m) 梁行  
1.95m 面積不明

柱穴数:5 柱形状:方形 柱痕:一部有  
柱穴規模:径平均0.75m 深さ平均  
0.50m

覆土:不明 出土遺物:須恵器鉢、土師  
器坏

所見:調査区東C8-14-21グリッドで検  
出した。SB6と切り合い関係にあり、  
SB6より古いと考えられる。調査区外  
に広がる。検出した柱穴は5基である。  
柱穴の形状は方形で辺は平均75  
cmと比較的大きく、深さも平均50cmを  
測る。規模的にはSB6と近似する。柱  
痕も一部底面に残存していた。

桁行南北列は3間で5.2mを測る。  
梁間は調査区内で1間で1.95mを測  
る。梁間は1間以上と考えられる。桁  
行についても間数は増える可能性はあ  
る。軸方向はほぼ真北を指す。

所属時期は出土遺物からして古代の可能性はあるものの、出土遺物は2点のみであるため不確かである。

出土遺物(第47図No1、2)

No1は土師器坏である。口縁部は僅かに内弯気味に開き、内外面共にナデ調整である。

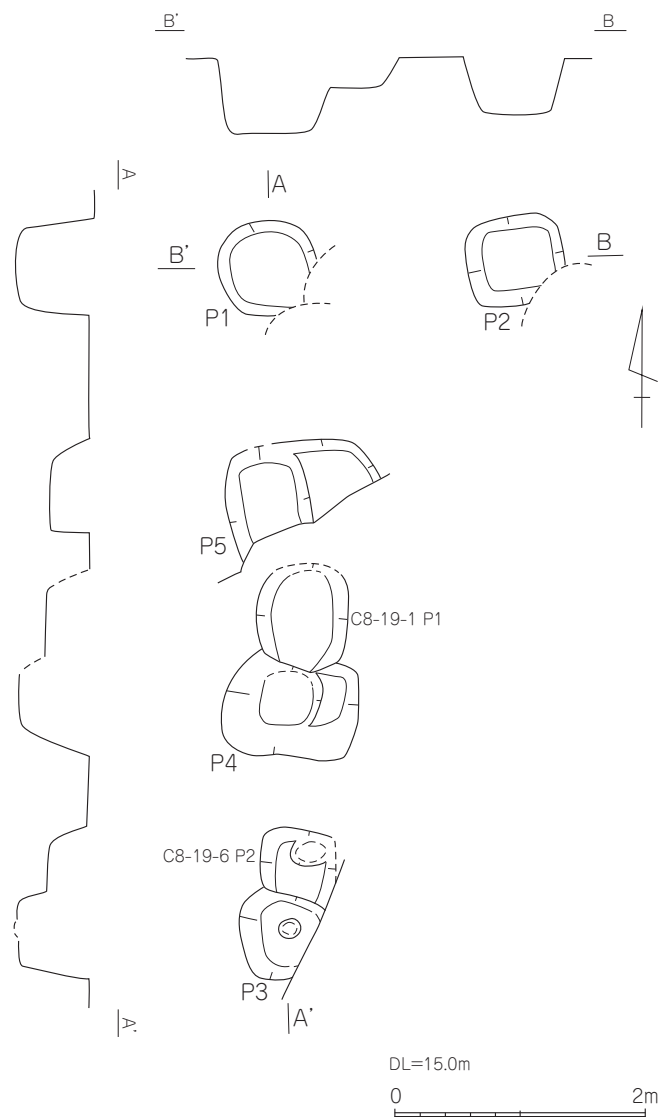
2は須恵器鉢の口縁部破片と考えられる。口径28.6cmを測り、口縁部は内弯気味に立ち上がる。内外面共にロクロナデ整形である。胎土に白色鉾物粒を少量含む。

### SB13 (第43、47図)

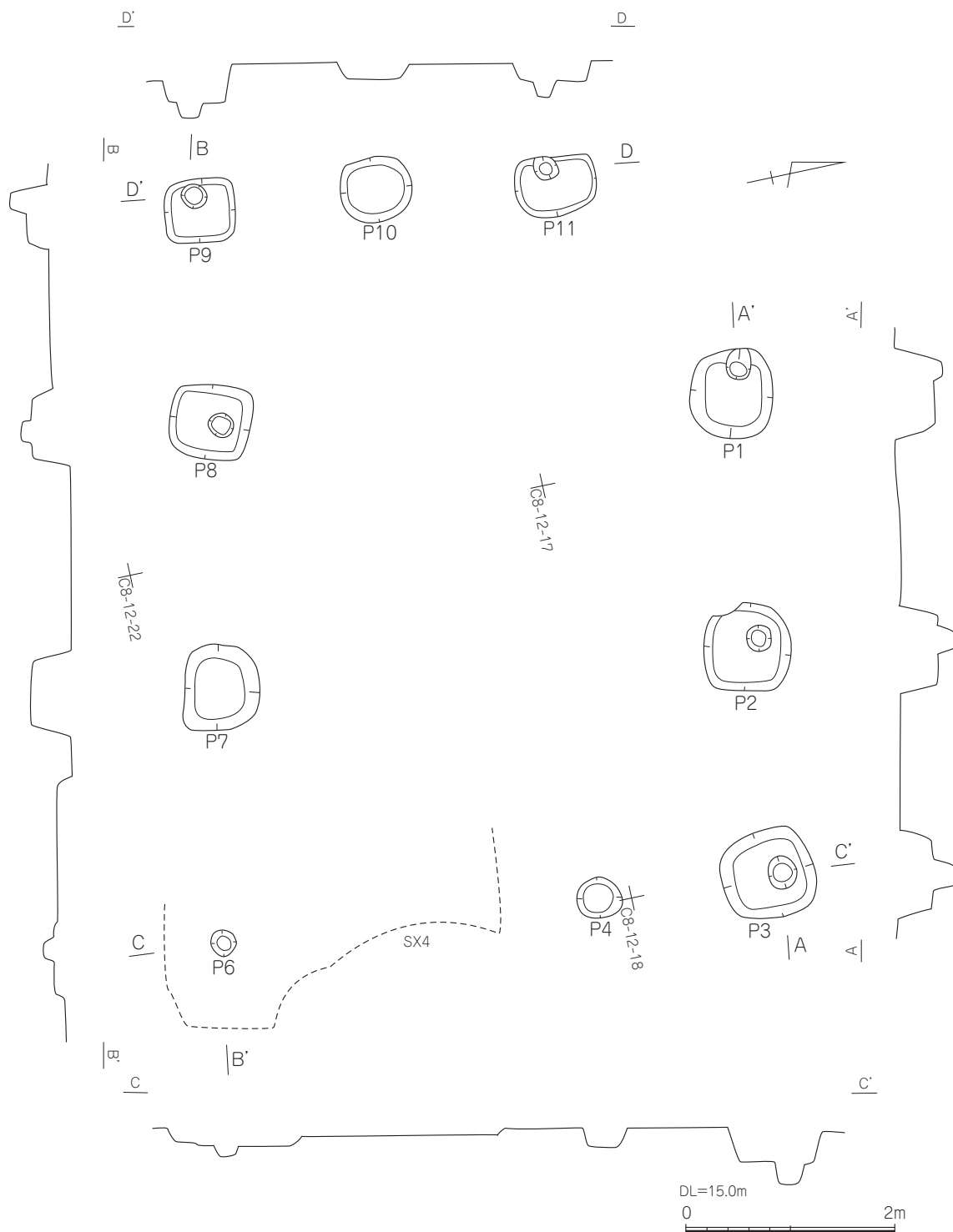
グリッド:C8-12-11他 切り合い関係:SD13、SX3・4に切られる

時期:古墳時代終末 主軸方向:N-83°-W

規模:桁行3間×梁間3間 桁行7.04m × 梁間5.34m 柱間距離 桁行2.16 ~ 2.55m (平均2.35m) 梁行



第42図 SB11 遺構図



第 43 図 SB13 遺構図

1.60 ~ 1.74m (平均1.69m) 面積37.59 m<sup>2</sup>

柱穴数:10 柱形状:方形 柱痕:有 柱穴規模:径平均0.74m 深さ平均0.37m

覆土:不明 出土遺物:須恵器坏蓋

所見:調査区西北C8-12-11グリッドで検出した。検出した柱穴は10基である。幾つか柱穴は欠ける。

柱穴の形状は方形で径は平均74cmと比較的大きく、深さも平均37cmを測る。柱痕も一部底面に残存していた。SB8と同一方向である。

桁行東西列は3間で7mを測る。梁間も3間で5.34mを測る。軸方向は東西棟でN-83°-Wでほぼ東向く。所属時期は出土遺物からして古墳時代後期の可能性があるものの、出土遺物は1点のみであるため不確かである。

出土遺物(第47図No1)

No1は須恵器坏蓋である。宝珠状の鈕を持ち、天井部は回転ヘラケズリである。胎土中に小黑斑が少量認められる。

**SB14** (第44、47図)

グリッド:C8-17-10他 切り合い関係:-

時期:古墳時代後期? 主軸方向:N-74°-W

規模:桁行(2)間×梁間(1)間 桁行(3.32)m×梁間(1.44)m 柱間距離 桁行1.64、1.68m(平均1.66m) 梁行1.44m 面積不明

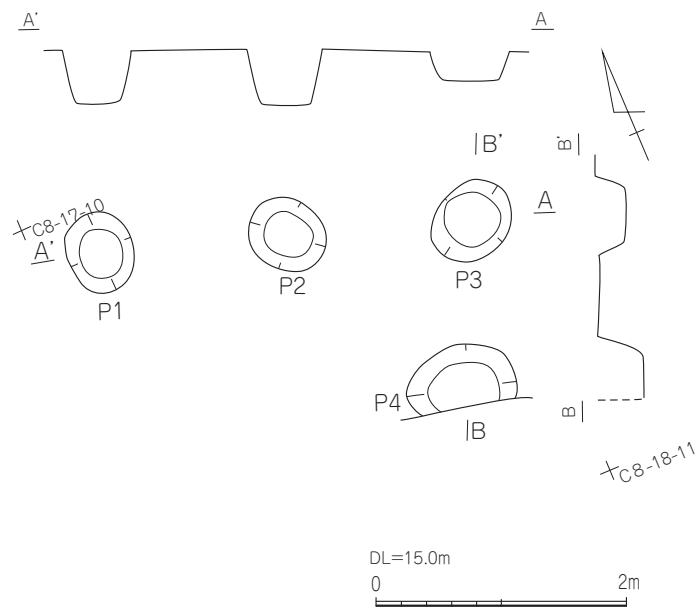
柱穴数:4 柱形状:円形 柱痕:無 柱穴規模:径平均0.72m 深さ平均0.35m

覆土:不明 出土遺物:須恵器坏蓋

所見:調査区中央南C8-17-10グリッドで検出した。検出した柱穴は4基のみである。柱穴の形状は円形で径は平均72cmと比較的大きく、深さも平均35cmを測る。柱痕は検出していない。

桁行東西列は2間で3.3mを測る。梁間も1間で1.44mを測る。桁行、梁間共にもっとあったものと考えられる。軸方向は東西棟でN-74°-Wで東向く。

所属時期は出土遺物からして古墳時代後期の可能性があるものの、出土遺物は1点のみであるた



第44図 SB14遺構図

め不確かである。

出土遺物(第47図No.1)

No.1は須恵器坏蓋である。天井部破片で、回転ヘラケズリを施す。

**SB16 (第45図)**

グリッド;C8-16-23他 切り合い関係;なし

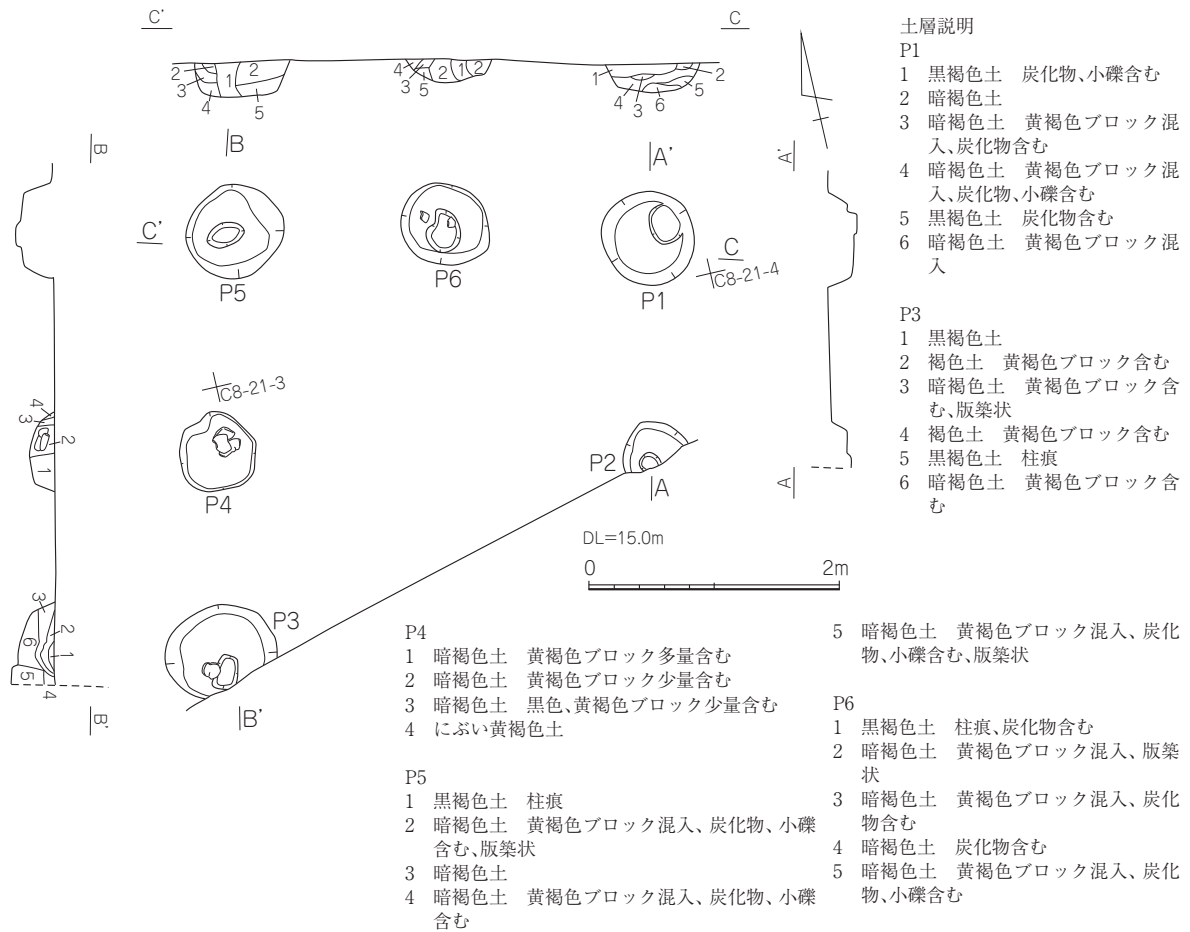
時期;不明 主軸方向;N-15°-E

規模;桁行(2)間×梁間2間 桁行(3.45)m×梁間3.30m 柱間距離 桁行1.73m 梁行1.65m 面積不明

柱穴数;6 柱形状;円形 柱痕;有 柱穴規模;径平均0.75m 深さ平均0.25m

覆土;不明 出土遺物;なし

所見;調査区南C8-16-23グリッドで検出した。検出した柱穴は6基である。更に調査区外へと広がる。柱穴の形状は円形で径は平均75cmと比較的大きく、深さは平均25cmでやや浅い。柱痕及び根石も検出している。柱痕は黒褐色土を主体とし、回りを黄褐色ブロックの入った暗褐色土で版築を行っているものも認められる。

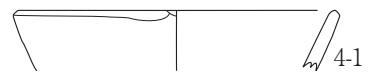


第 45 図 SB16 遺構図





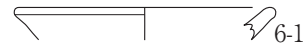
SB2 出土遺物



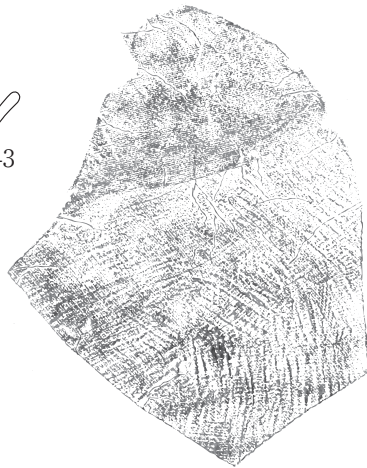
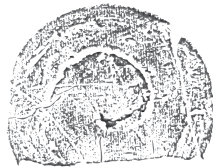
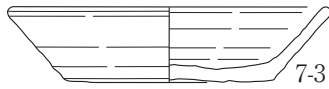
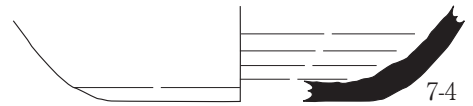
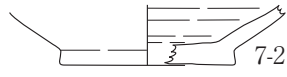
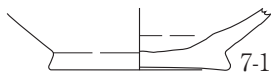
SB4 出土遺物



SB5 出土遺物

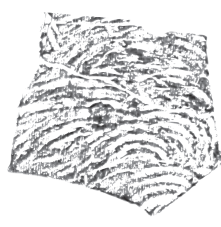
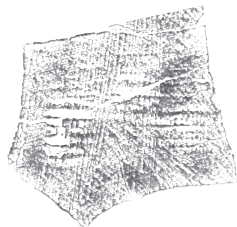
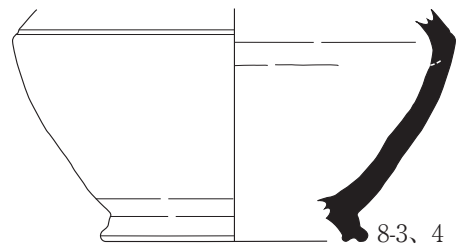
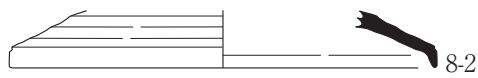
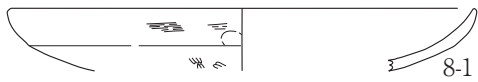


SB6 出土遺物



7-5

SB7 出土遺物



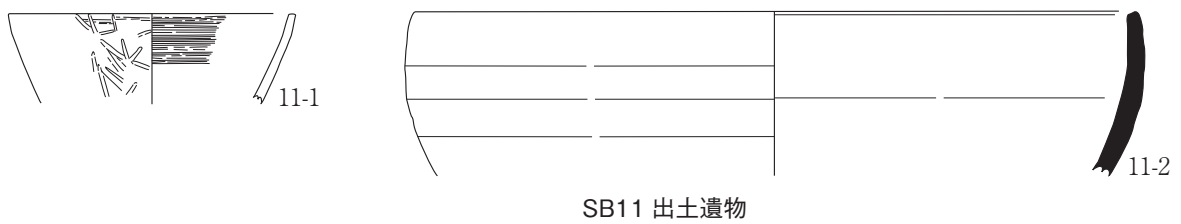
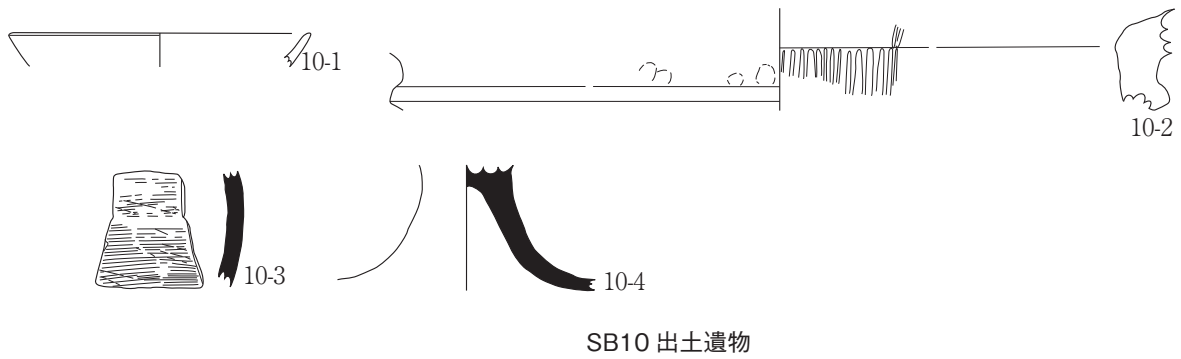
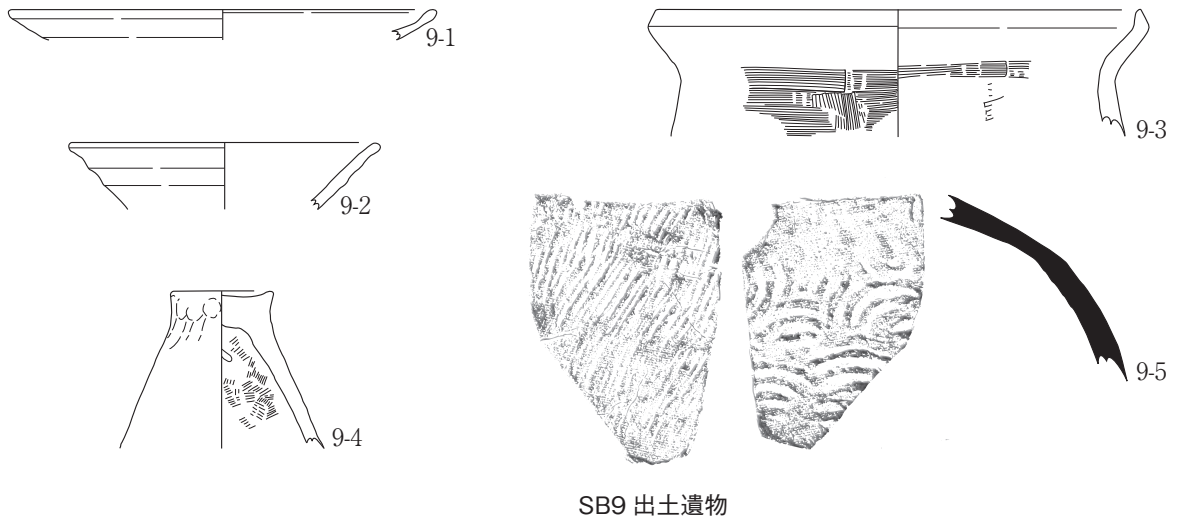
SB8 出土遺物



第 46 図 SB2・4～8 出土遺物実測図

桁行南北列は2間で3.45mを測る。桁行は更に大きくなる。梁間は2間で3.3mを測る。軸方向は南北棟でN-15°-Eで東に振る。

所属時期は遺物が出土していない為に不明である。



第 47 図 SB9 ~ 11・13・14 出土遺物実測図

### 第3節 壺棺墓

本調査区では2基検出している。共に竪穴建物跡の中で検出している。Ⅷ区では20基余りの壺棺を検出しているものの、全て竪穴建物跡外、周辺域での検出であった。本調査区の壺棺と考えられるものは竪穴建物跡に伴う単なる壺の可能性もあるものの、壺の大きさからして、壺棺と積極的に判断した。

第3表 壺棺一覧表

SG番号	調査区	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模(m)	規模(m)	深さ(m)	遺物	切り合い
SG1	Ⅶ-2	C8-9-21	弥生後期後半			(0.78)		(0.37)	弥生壺	ST2を切る
SG2	Ⅶ-2	C8-14-18	弥生後期後半						弥生壺	ST1を切る?

#### SG1 (第48、50図)

グリッド; C8-9-21 切り合い関係; ST2を切る 時期; 弥生時代後期後半 埋納土坑規模; (0.78) m  
深さ(0.37) m 形状; 不明 主軸方向; 不明 覆土; 暗褐色土 出土遺物; 弥生土器壺

所見; 調査区北東C8-18-6グリッドに位置し、ST2の調査の際に検出している。ST2の調査区外の北壁断面に引っかかるような状態で検出している。ST2の土層断面で出土し、竪穴建物跡に伴うものか竪穴建物跡を掘り込んで構築された壺棺か判断しかねる。ST2の土層断面で正位の状態ではST2の床面に接するような状態で出土している。写真、図面及び取り上げ遺物からして壺棺の蓋に相当するものは出土していないようである。

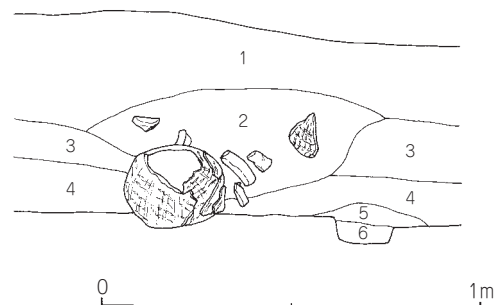
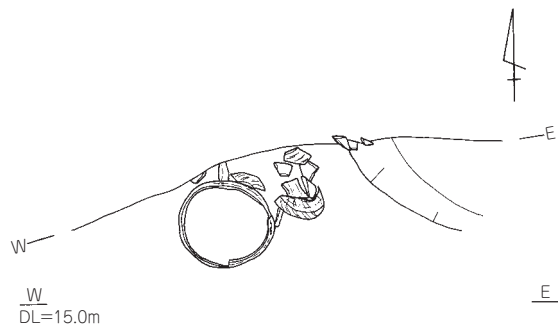
所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半である。

出土遺物(第50図No1)

No.1は弥生土器二重口縁壺で受け口状を呈する。口径14.0cm、器高32.3cm、底径5.4cmを測る。口縁の半分程を欠損する。体部は丸味を持ち、底部はやや丸味のある平底である。整形は外面がタタキ、ハケ、内面口縁がハケ、体部はナデ、ハケである。

#### SG2 (第49、50図)

グリッド; C8-14-18 切り合い関係; ST1を切る? 時期; 弥生時代後期後半 埋納土坑規



土層説明

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 黒褐色、明褐色土混入
- 3 褐色土 黒褐色、明褐色ブロック混入
- 4 褐色土 明褐色、黒褐色土混入
- 5 褐色土 明褐色小ブロック混入
- 6 褐色土 焼土(橙色)、炭化物混入

第48図 SG1遺構図

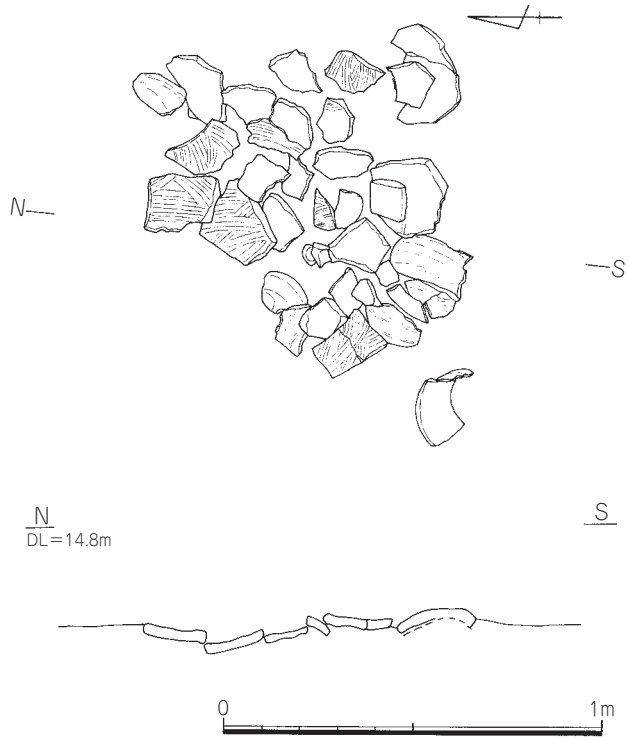
模：- 形状：- 主軸方向：- 覆土：-  
 出土遺物：弥生土器壺

所見：調査区東端C8-14-18グリッドに位置し、ST1の中で検出している。ST1の南東のベッド際で潰れたような状態で出土している。調査の段階では壺棺として扱っていないものの、整理作業の中で壺の大きさからして壺棺の可能性が高い為にSG2として扱った。

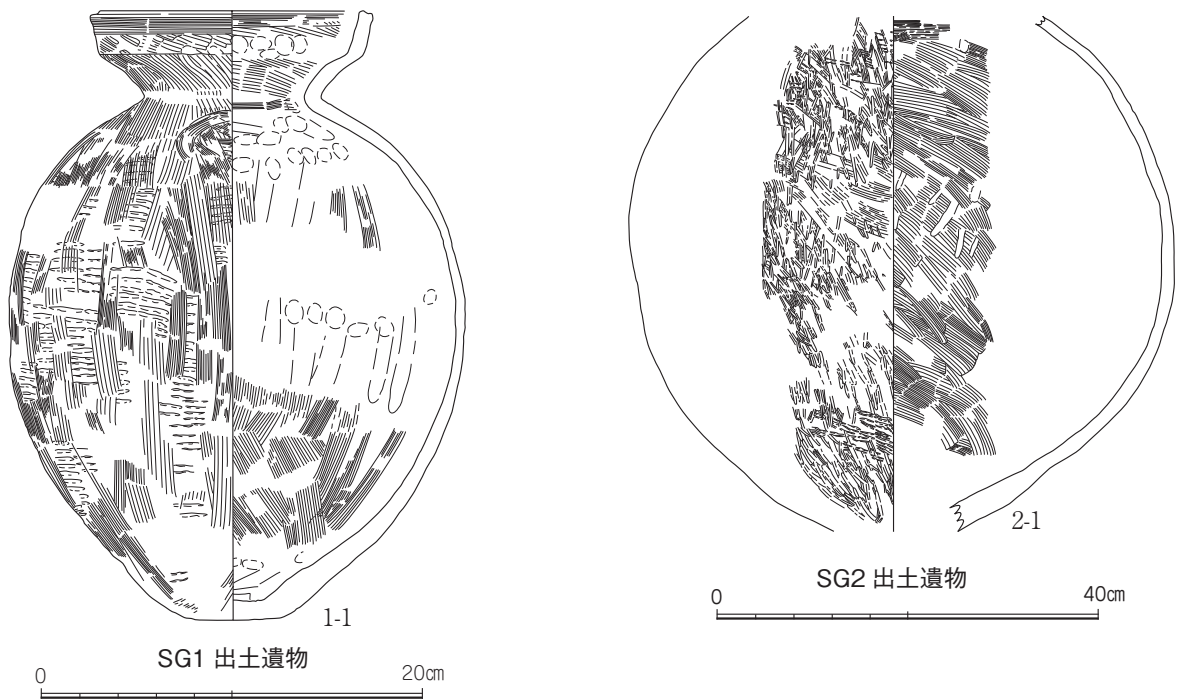
写真等見る限り掘り方は見当たらない。また口縁は欠損している。蓋に転用した土器は出土していない。所属時期は弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第50図No.1)

No.1は口縁、底部が欠損した弥生土器壺である。残存高54.5cm、胴部最大径58cmを測る。体部は丸味を持つ。整形は外面がタタキ、ナデ、ミガキ、内面は粗いハケ整形である。



第49図 SG2遺構図



第50図 SG出土遺物実測図

## 第4節 土坑

本調査区では土坑は43基検出した。土坑の密集度は北側中央部に多い。大型で径2m近い円形のものほとんどが近世のハンダ土坑と呼ばれるものである。

時期的には弥生時代後期後半の土坑はSK30、31、33、40等を上げることができる。次いで古墳時代に含まれるものはSK15で古墳時代後期に含まれる土坑墓と考えられるものである。遺物には勾玉、須恵器台付き長頸壺等の副葬品と考えられるものが出土している。古代と考えられるものは8世紀代と10世紀代の二時期に分かれるようである。中世のものも僅かであるものの検出している。報告書では遺物が明確に伴い時期決定が可能なものを主として取り上げた。

第4表 土坑一覧表

SK 番号	調査区- 旧遺構名	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模 (m)	規模 (m)	深さ (m)	遺物	切り合い	備考
SK1	Ⅶ2	C8-17-3他	近世	円形		2.32	(1.72)	0.25	混入緑釉	ST8切る	ハンダ土坑
SK2	Ⅶ2	C8-12-23	古代	楕円形	N-64° -W	2.34	1.83	0.18		SB10P12・13切る	
SK3	Ⅶ2	C8-12-23	古代?	円形		1.62	1.62	0.19		SK4切られる	
SK4	Ⅶ2	C8-12-18他	中世	円形		1.98	(1.90)	0.18	青磁	SK3切る	
SK5	Ⅶ2	C8-12-13他	不明	不整形		2.14	2.07	0.67	須恵甕片		
SK6	Ⅶ2	C8-17-3他	近世	円形		1.93	1.76	0.28		SK7切る	ハンダ土坑
SK7	Ⅶ2	C8-17-4他	近世	円形		1.80	1.77	0.35	混入緑釉	SK6切られる	ハンダ土坑
SK8	Ⅶ2	C8-17-9	近世	円形		2.18	1.97	0.51	混入土師坏		ハンダ土坑
SK9	Ⅶ2	C8-17-4	近世	円形		1.90		0.40	混入須恵坏	SB10P9切る	ハンダ土坑
SK10	Ⅶ2	C8-12-10	中世	長方形?	N-7° -E	2.06	(1.97)	0.26	混入手焙り		
SK11	Ⅶ2	C8-11-20他	不明	不明		0.72	(0.30)	0.06			
SK12	Ⅶ2	C8-11-25他	古代	不明		2.00	1.52	0.64		SD1切る	
SK13	Ⅶ2	C8-11-18他	不明	不整形		1.37	1.13	0.20			
SK14	Ⅶ2										
SK15	Ⅶ2	C8-12-24	7C初頭	長楕円形	N-75° -E	2.34	0.85	0.31	須恵、勾玉	SD13切られる	
SK16	Ⅶ2	C8-12-14他	不明	不明						SX2切られる	
SK17	Ⅶ2	C8-12-18他	古代	楕円形	N-12° -E	2.96	2.68	0.33	須恵坏蓋	SX4切る	
SK18	Ⅶ2	C8-12-23他	近世	円形		1.47	1.29	0.12			ハンダ土坑
SK19	Ⅶ2										近世井戸SE1
SK20	Ⅶ2	C8-12-15	不明	長方形	N-12° -E	2.75	1.79	0.14		SB8切る	
SK21	Ⅶ2	C8-13-14他	古代	円形		1.10	0.98	0.17			
SK22	Ⅶ2	C8-18-1他	弥生古墳	円形		0.97	0.86	0.13	土器細片		
SK23	Ⅶ2										SB14P4に変更
SK24	Ⅶ2	C8-17-5他	古代	楕円形	N-50° -W	0.92	0.73	0.11	須恵坏		
SK25	Ⅶ2	C8-17-4他	古代?	円形		0.97	0.91	0.13	須恵甕片		
SK26	Ⅶ2	C8-12-21他	10C	不明							
SK27	Ⅶ2	C8-13-25	10C	不整形?		0.55	(0.32)	0.38	青磁碗、小皿	SD19切られる	
SK28	Ⅶ2	C8-13-5他	古代	不明		1.58	(1.45)	0.11		SD7切られる	
SK29	Ⅶ2										SB5P4に変更
SK30	Ⅶ2N-SK2	C8-9-23	弥生後期	不整形	N-24° -W	2.22	0.46	0.23			
SK31	Ⅶ2N-SK27	C8-9-19他	弥生後期	不整形		2.40					
SK32	Ⅶ1-SK1	C8-17-18	古代	不明		(1.17)	1.15	0.09	須恵甕片		
SK33	Ⅶ1-SK2	C8-17-15	弥生後期	楕円形?	N-20° -E	(1.97)	(1.1)	0.17	甕片、鉢	SD37切られる	
SK34	Ⅶ1-SK3	C8-16-15	8C	円形	N-6° -W	0.98	0.90	0.16	高台坏		
SK35	Ⅶ1-SK4	C7-20-10	古代	不整形		1.22	0.76	0.10	須恵甕片		
SK36	Ⅶ1-SK5	C8-16-7他	不明	円形		0.92	0.87	0.50	鉄製品		
SK37	Ⅶ1-SK6	C8-16-7	古代	不明		0.87		0.14	須恵壺片		
SK38	Ⅶ1-SK7	C8-16-9他	8C後半	不整形		2.26	2.05	0.34	土師坏	SD37切られる	
SK39	Ⅶ1-SK8	C7-20-3他	古代	不明		(1.30)	1.11		須恵坏	SD19・54切られる	
SK40	Ⅶ1-SK9	C7-20-15他	弥生後期	不明		1.53	(0.63)	0.27	甕片	カクラン切られる	
SK41	Ⅶ1-SK10	C7-20-13他	不明	不明		2.25	(1.02)	0.04			
SK42	Ⅶ1-SK11	C7-20-18他		不明		2.54	(1.34)	0.07		SD51切られる	
SK43	Ⅶ1S-SK1	C8-16-25		不整形		1.52	1.26	0.11			



### SK10 (第51、56図)

グリッド;C8-12-10 切り合い関係;-

時期;中世 形状;長方形? 断面形態;箱形 主軸方向;N-7° -E

規模;2.06×(1.97) m 深さ0.26m 覆土;-

出土遺物;青磁碗、手焙り

所見;中央部北端C8-12-10グリッドに位置する。調査区外へと続く為全容は不明である。調査区内では矩形を呈する。南側に同様のSK20が位置しており、8C代のSB8を切っている。SK20からは明確な遺物が出土しておらず、時期は断定できないもののSK10と同時期と考えられる。

所属時期は出土遺物からして中世と考えられる。

出土遺物(第56図No.1～5)

No.1は青磁碗である。体部は直立気味である。外面には線描き蓮弁文を施す。

2から4は土器坏である。2は口径11.4cmで、体部は直線的に僅かに開く。整形は外面がロクロ目、内面はナデである。3、4は底部破片で、共に底部の切り離しは回転ヘラ切りである。内面底に回転渦巻き痕が残る。3の底径が7.2cm、4は6.5cmである。

5は瓦質土器の手焙りである。口径26.0cmを測る。口縁は内側に突出し、体部は丸味を持つ。胎土に雲母を多量に含む。

### SK15 (第52、56図)

グリッド;C8-12-24 切り合い関係;SD13に切られる

時期;7C初頭 形状;長楕円形 断面形態;箱形 主軸方向;N-75° -E

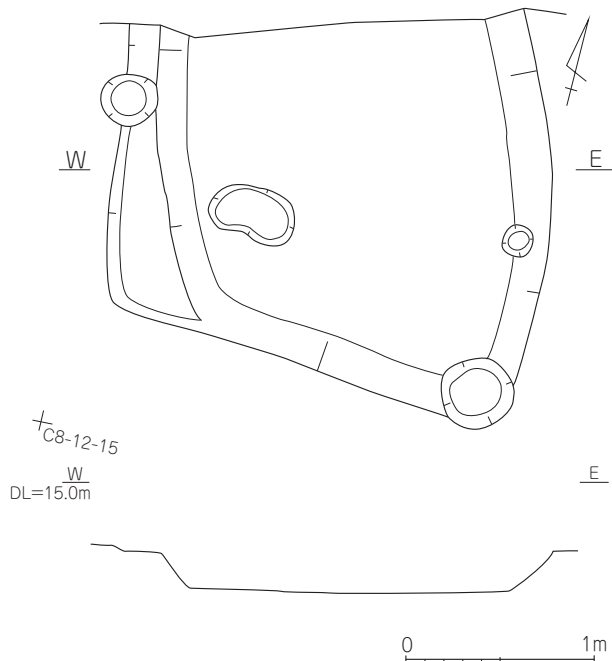
規模;2.34×0.85m 深さ0.31m

覆土;黒褐色土、褐色土

出土遺物;須恵器高坏、台付き長頸壺、坏蓋、坏、土師器坏、瑪瑙製勾玉、ガラス小玉

所見;調査区の中央部C8-12-24グリッドに位置する。周辺にはSB10が位置している。SD13に上面を切られている。形状は長楕円形で西側部がややすぼまる。東側部は隅丸である。規模は長径2.34m、短径0.85m、深さ31cmを測る。長軸方向はN-75° -Eである。土層断面図は短径部の一定下げた途中から作成しているのみで、覆土は判然としない。土層断面では中央部と壁際では土層が違っており、木棺を想定した土層断面となっているものの、不明である。

須恵器台付き長頸壺、高坏、坏、坏蓋等が出土しており、また勾玉が1点東端、ガラス小玉は東南部で出土している。大部分の遺物が破損し床面より浮いた状態で出土している。須恵器坏身がやや西寄りの床面から出土している。



第51図 SK10遺構図

所属時期は出土遺物からして7C初頭と考えられる。

出土遺物(第56図No1～8)

No.1は瑪瑙製勾玉である。頭部を穿孔する。頭部、尾部が屈曲する。全体を研磨する。節理部が発達し、黒褐色と乳白色の縞模様である。

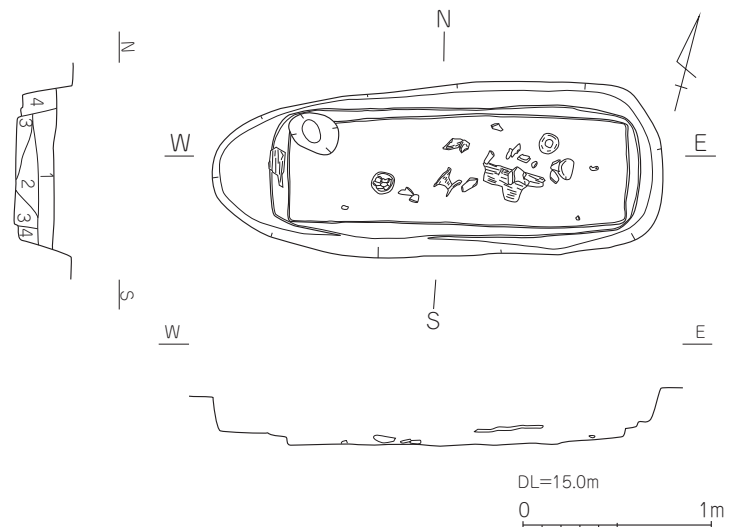
3、4は須恵器坏蓋、坏である。3は小型の坏蓋で全体的に丸味を持つ。天井部は回転ヘラ切りで、平らである。内面にはロクロ目を残す。やや軟質であり、焼成不良か。4は3と対になる小型の完形品の坏である。口径11.8cmを測る。丸底気味で底部は回転ヘラ切りである。口縁には短いかえりが外反気味に付く。内外面共回転ナデ調整である。

5は土師器坏である。口径17cmを測る。体部は丸味を持つ。口唇、口縁外面を強くヨコナデする。体部内面はナデ、外面は落剥して不明である。

6は須恵器高坏で全ての端が欠損し、摩耗する。残存高は8.3cmを測る。坏部は皿状に大きく開く。脚部には透かしを穿たない。

7は須恵器台付き長頸壺である。頸部を打ち欠く。肩部は張らず、自然釉がかかる。胴部上方は屈曲し、沈線が1条巡る。下半は丸味を持ってすぼまる。台部は広がり、端部はかえり状になる。整形は体部下半がヘラケズリ、他は回転ナデである。

2、8は観察表と写真のみで実測図はない。2は緑色、黄色のガラス小玉か。8は白色骨片である。



土層説明

- |                           |                      |
|---------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色土 土器含む               | 3 褐色、灰褐色土 小ブロック、土器含む |
| 2 黒褐色土 炭化物、焼土(小ブロック)、土器含む | 4 灰褐色土 小ブロック多量含む     |

第52図 SK15 遺構図

### SK24 (第53、56図)

グリッド:C8-17-5他 切り合い関係;-

時期:古代 形状:楕円形 断面形態:皿状 主軸方向:N-50° -W

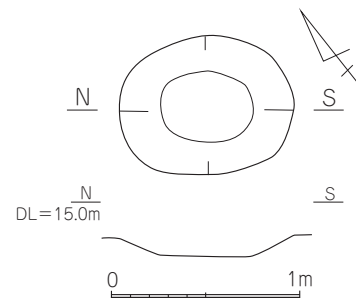
規模:0.92×0.73m 深さ0.11m

覆土:- 出土遺物:須恵器坏、土師器坏

所見:調査区中央部C8-17-5グリッドに位置する。近くに近世ハンダ土坑SK9が隣接する。形状は楕円形で規模は長径0.92m、短径0.73mである。深さ11cmと浅く、断面は皿状を呈する。長軸方位はN-50° -Wである。

出土遺物(第56図No1、2)

No.1は須恵器坏で口径15.8cmを測る。体部は丸味を持つ。内外



第53図 SK24 遺構図



面共にロクロ目を残す。

2は土師器坏の底部破片である。底径6.6cmを測る。底部切り離しは回転ヘラ切りである。体部は開く。内外面共に回転ナデである。

### SK27 (第54、56図)

グリッド;C8-13-25 切り合い関係;SD19に切られる

時期;10C 形状;不整形? 断面形態;階段状 主軸方向;-

規模;0.55×(0.32) m 深さ0.38m

覆土;- 出土遺物;青磁碗、土器坏、小皿

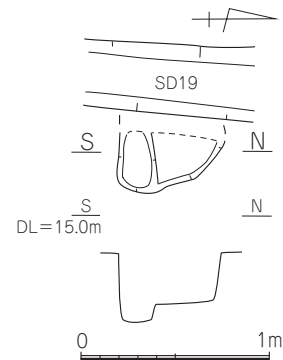
所見;調査区東側C8-13-25グリッドに位置する。西側部をSD19に切られ、全容は不明である。残存状態では長径0.55m、短径0.32mである。長径についてはほぼ本来の規模に近いものと考えられ、短径は1/3程がSD19に切られているようである。底面は2段になり南側部は深くっており、38cmを測る。覆土、遺物出土状況については不明である。

所属時期は出土遺物からして10C代と考えられる。

出土遺物(第56図No.1～6)

No.1は青磁碗である。見込みに陰刻を施すが不明である。釉は厚く、深緑色の発色である。

2から6は土器で、2は小皿である。口径6.9cmを測る。底部は回転糸切りで簀子状圧痕が付く。体部は短く開く。3から6は坏である。3は深い坏で、口径13.7cm、高さ4.2cm、底径7.1cmを測る。体部は外傾気味に開き、外面にロクロ目を残す。4も外面にロクロ目を残す。5、6も底部は回転糸切りである。5は内面底中央が凹む。



第54図 SK27遺構図

### SK33 (第55、59図)

グリッド;C8-17-15 切り合い関係;SD37に切られる

時期;弥生時代後期後半VI期 形状;楕円形? 断面形態;階段状 主軸方向;N-20°-E

規模;(1.97)×(1.1) m 深さ0.17m

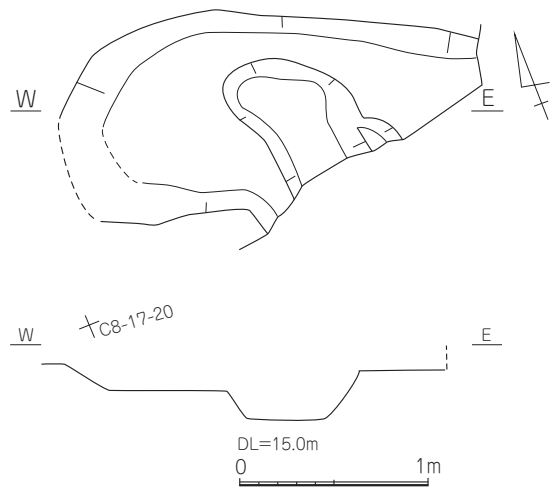
覆土;- 出土遺物;弥生土器甕、鉢

所見;南側中央部C8-17-15グリッドに位置する。SD37に切られる。土坑の南東部は調査区外に広がる為全容は不明である。調査区内で確認した規模は長径1.97m、短径1.1m、深さ17cmで浅い。床面は2段になる。覆土、遺物出土状況については不明である。

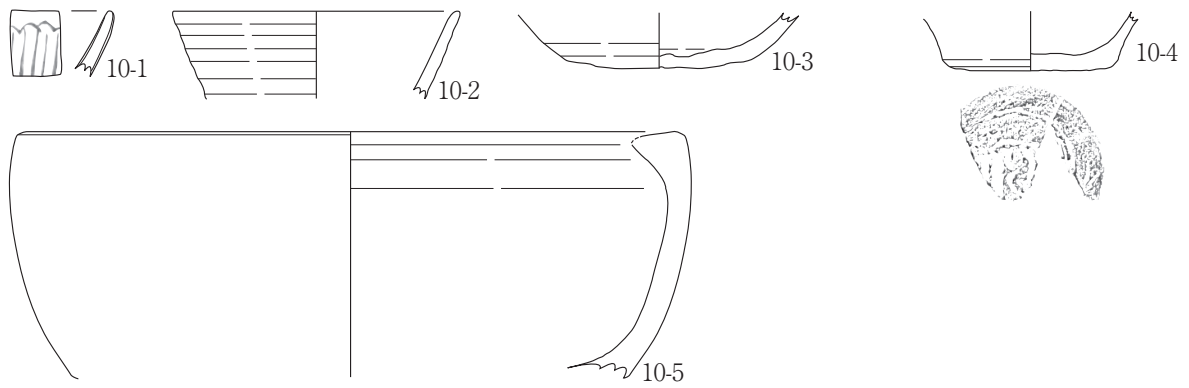
所属時期は出土遺物からして弥生時代後期後半と考えられる。

出土遺物(第59図No.1～6)

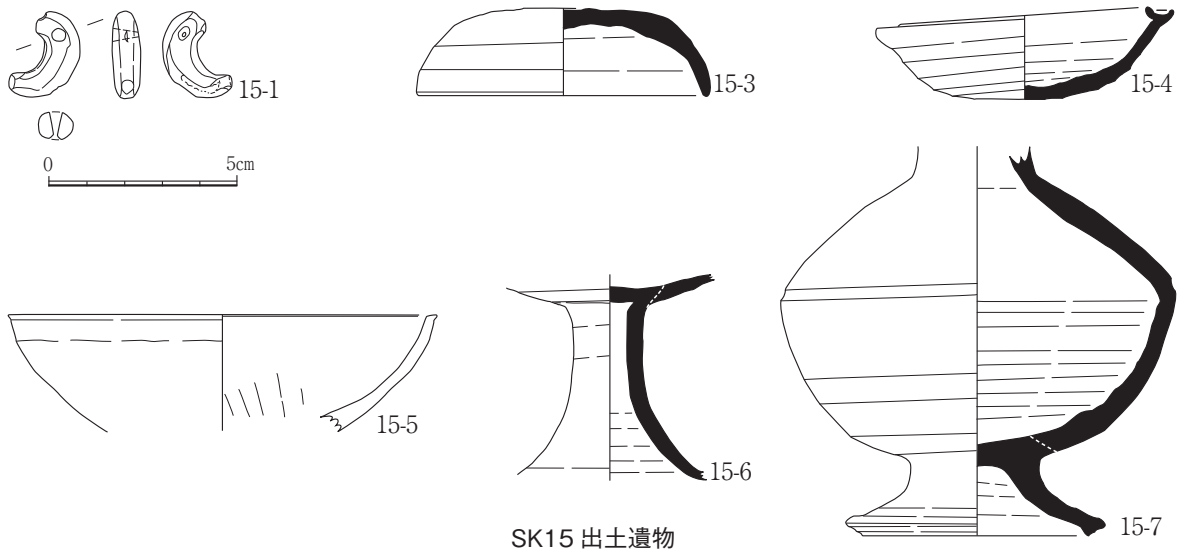
No.1、2は弥生土器甕である。1は口縁は「く」字状に外傾する。口縁内外面ハケ、胴部外面タタキ、



第55図 SK33遺構図



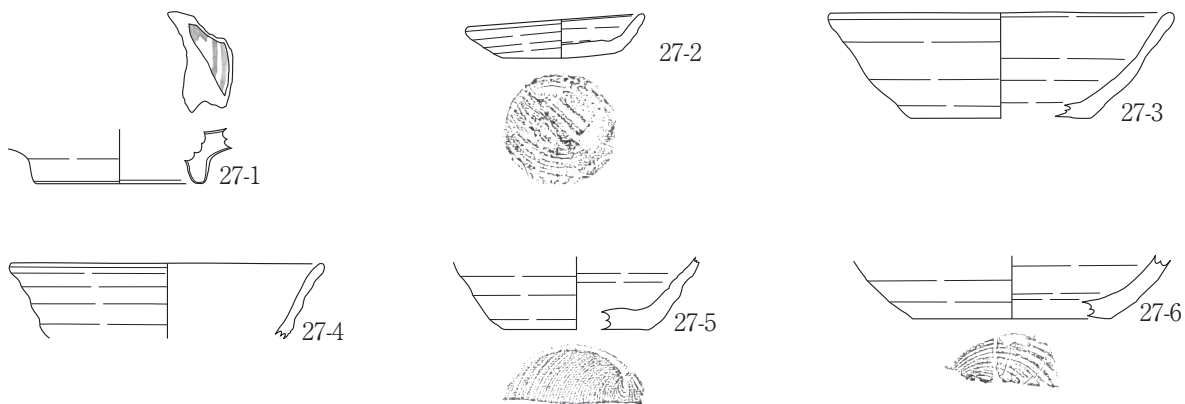
SK10 出土遺物



SK15 出土遺物



SK24 出土遺物



SK27 出土遺物



第 56 图 SK10 · 15 · 24 · 27 出土遺物実測図

ハケ、内面ヘラケズリ整形である。2は1と同一個体の可能性のある胴部破片である。内面にヘラケズリを施す。

3から6は鉢である。3は口径23.3cmを測る大型品である。丸底で体部は大きく開く。口縁内外面はヨコナデ、内外面上半がハケ、内外面下半がミガキ整形である。4は口径8.1cmの小型のものである。丸底で体部下半に丸味を持ち、口縁は直立気味である。全体を指頭で調整を行った後ハケ整形である。5は平底で体部は余り開かない。内外面共にハケ整形である。6は小さな高台状の底部で体部は大きく開く。内外面共にハケ整形である。

### SK34 (第57、59図)

グリッド:C8-16-15 切り合い関係:-

時期:古代 形状:円形 断面形態:皿状 主軸方向:N-6°-W

規模:0.98×0.9m 深さ0.16m

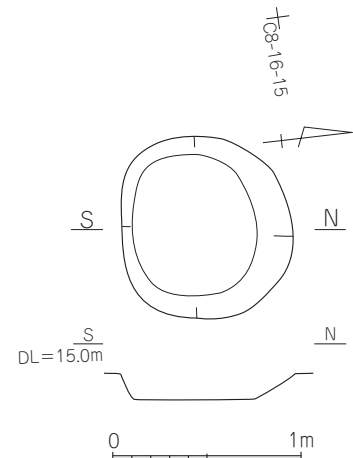
覆土:- 出土遺物:土師器坏

所見:調査区中央南側部C8-16-15グリッドに位置する。近くにSK38が位置している。形状はほぼ円形で直径0.98mと比較的大きいものの、深さは16cmと浅く断面は皿状を呈する。

出土遺物からして古代8Cの可能性がある。

出土遺物(第59図No1)

No1は土師器の坏の底部破片である。高台が付く。内面にはロクロ目を残す。器肉は全体的に薄い。



第57図 SK34 遺構図

### SK38 (第58、59図)

グリッド:C8-16-9他

切り合い関係:SD37、C8-16-9P1に切られる

時期:古代8C後半 形状:不整形 断面形態:起伏 主軸方向:-

規模:2.26×2.05m 深さ0.34m

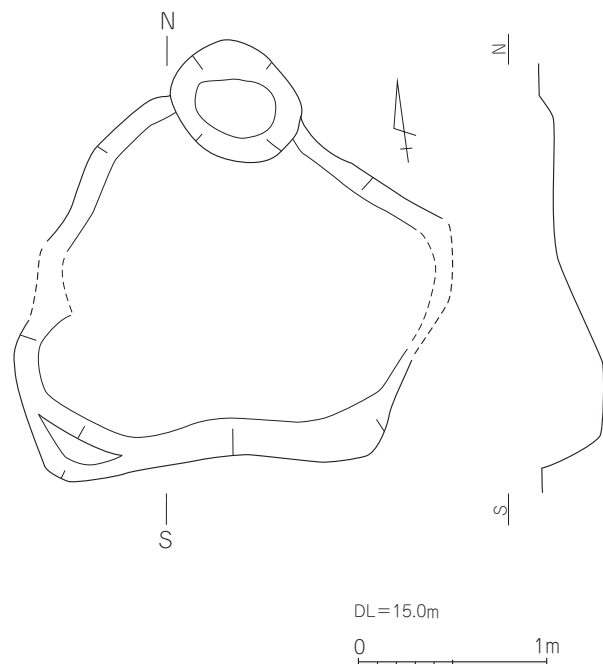
覆土:- 出土遺物:須恵器壺、坏、土師器坏

所見:調査区中央C8-16-9グリッドに位置する。近くにSK34が位置している。上面をSD37に切られる。形状は不整形である。規模は長径2.26m、短径2.05m、深さ34cmと比較的深い。底面は一定ではない。

出土遺物からして所属時期は8C後半と考えられる。

出土遺物(第59図No1～6)

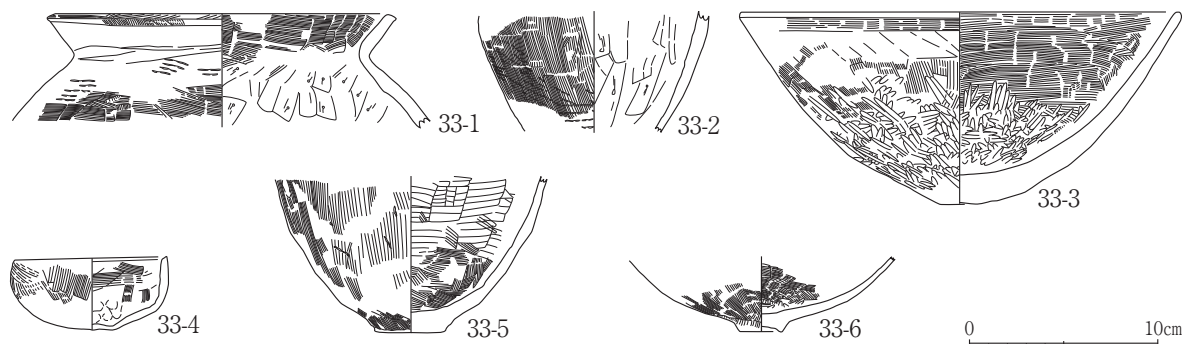
No1、2は須恵器である。1は壺と考えられる。口径13cmを測る。口縁は直線的に



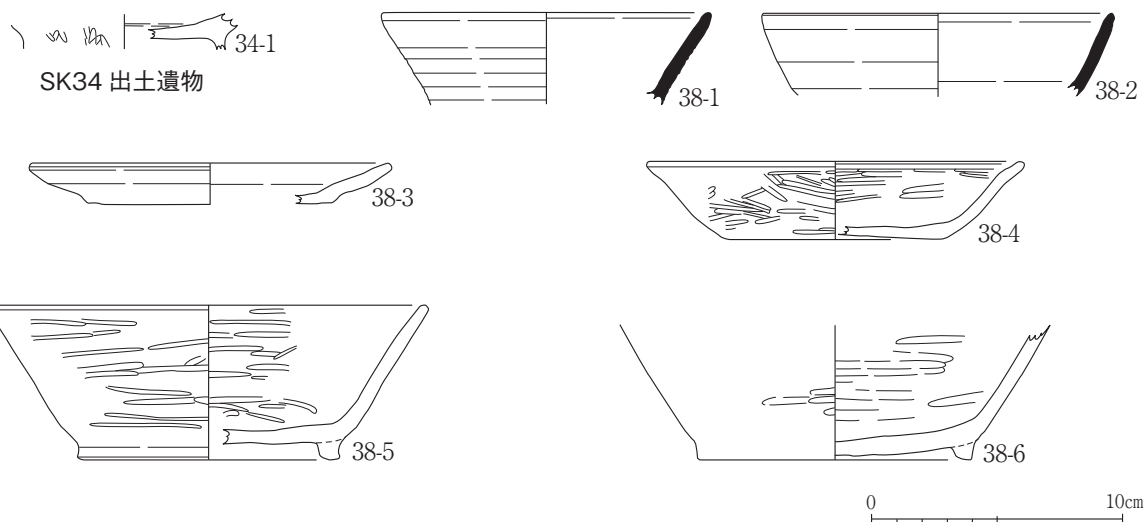
第58図 SK38 遺構図

外傾し、内外面共にロクロナデである。2は坏で口径13.8 cmを測る。体部は僅かに丸味を持ち開き、内外面共にロクロナデである。

3から6は土師器である。3は皿である。底部は回転ヘラ切りで、体部が大きく開く。内外面共にロクロナデである。4から6は坏である。4は盤状の坏で口唇内面に沈線を巡らせる。口径は14.8 cmを測る。内外面共にミガキを施し、赤褐色を呈する。5、6は深い坏で高台が付く。高台の断面は四角で底部端に付く。体部は直線的に外傾し、内外面共にミガキ調整である。



SK33 出土遺物



SK38 出土遺物

第 59 図 SK33・34・38 出土遺物実測図

## 第5節 溝状遺構

44条の溝状遺構を検出した。時期は弥生時代のものは北東隅で検出したSD30のみである。大部分のものが古代に含まれるもので、出土遺物からして古代末のものが多いようである。

東西に走る溝、南北に走る溝に大きく分けることができる。南北溝は西端のSD51が最も大きく、N-15°-Eの方位を採る。N-3°-E、N-10°-E、N-17°-E等が認められるものの、特に時期的な方位を導き出すことはできなかった。東西溝は比較的少なく、主な東西溝はSD13、37である。

### SD1 (第60、61図)

グリッド:C8-11-20他 切り合い関係:SD13切る

時期:古代? 主軸方向:N-10°-E

規模:長さ(6) m×幅0.32m 深さ0.07m 断面形状:皿状

覆土;- 出土遺物:須恵器坏

所見:調査区北西C8-11-20グリッドに位置し、南北溝で調査区外へと続く。調査区内での長さは6m、幅32cm、深さ7cmと浅い。12C代と考えられるSD13を切る。本溝から須恵器坏が出土しているものの、伴うかどうかは不明である。

出土遺物(第61図No.1)

No.1は須恵器坏である。口径14cmを測る。体部は直線的に外傾する。整形は外面がロクロ目、内面がナデである。

### SD4 (第60、61図)

グリッド:C8-14-4他 切り合い関係:-

時期:古代 主軸方向:N-73°-W

規模:長さ(3.37) m×幅0.28m 深さ0.07m 断面形状:皿状

覆土;- 出土遺物:土師器碗

所見:調査区東北部C8-14-4グリッドに位置する。東西方向溝でSD24、26と同様のものである。調査区内では長さ3.37m、幅28cm、深さ7cmと浅い。出土遺物は少なく10C代の可能性があるが判然としない。

出土遺物(第61図No.1、2)

No.1、2は共に土師器碗である。1は底径6.8cmを測る円盤状底部である。体部は開き、内面にロクロ目が残る。2は底径8cmを測る高台付の底部である。碁笥底状を呈する。

### SD7 (第60、61図)

グリッド:C8-13-5他 切り合い関係:SK28切る、SD13切られる

時期:古代? 主軸方向:N-8°-E

規模:長さ(9.90) m×幅0.34～0.48m 深さ0.19m 断面形状:皿状

覆土;- 出土遺物:須恵器甕、土器羽釜

第5表 溝状遺構一覧表

SD 番号	調査区- 旧遺構名	グリッド	時期	断面形態	主軸方向	規模長 さ(m)	幅 (m)	深さ (m)	遺物	切り合い	備考
SD1	Ⅶ2	C8-11-20他	古代?	皿状	N-10° -E	(6)	0.32	0.07	須恵坏	SD13切る	
SD2	Ⅶ2	C8-12-12他	11C?	皿状	N-12° -E	(12.65)	0.4	0.08		ST8切る	
SD3	Ⅶ2	C8-12-12他		皿状	N-17° -E	(3.1)	0.34	0.05			
SD4	Ⅶ2	C8-14-4他	古代	皿状	N-73° -W	(3.37)	0.28	0.07	土師碗		
SD5	Ⅶ2	C8-14-5他	11C?	皿状	N-60° -W	(0.72)	0.41	0.08			
SD6	Ⅶ2	C8-13-5他		皿状	N-3° -E	(7.4)	0.39	0.16		SD19と同一?	
SD7	Ⅶ2	C8-13-5他	古代?	皿状	N-8° -E	(9.9)	0.48	0.19	羽釜	SK28切る、SD13切られる	
SD8	Ⅶ2	C8-13-7他	古代?	皿状	N-78° -W	3.6	0.26	0.05	須恵壺片	SD9切られる	
SD9	Ⅶ2	C8-13-7他	11C?	皿状	N-20° -E	(20.42)	0.35	0.07	土器坏	ST6・7・9、SB7・9切る	
SD10	Ⅶ2	C8-13-12他	不明	皿状	N-26° -E	(4.6)	0.37	0.1		SB7切る	
SD11	Ⅶ2	C8-12-13他	古代?	皿状	N-62° -W	(4.67)	0.35	0.03		SB18切る	
SD12	Ⅶ2	C8-13-17他		皿状	N-84° -W	(2.75)	0.37	0.05		ST9切る	
SD13	Ⅶ2	C8-12-23他	12C?	皿状	N-75° -W	(40.79)	0.4	0.26		ST3・9、SB9・13切る	
SD14	Ⅶ2	C8-12-10他	古代?	皿状	N-12° -E	(12.43)	0.24	0.05	土師坏	SK20、SB10切る	
SD15	Ⅶ2	C8-13-19他		皿状	N-8° -W	3.65	0.27	0.03			
SD16	Ⅶ2	C8-12-20他	10C?	皿状	N-76° -W	(3.15)	0.17	0.06		SB9切る	
SD17	Ⅶ2										欠番
SD18	Ⅶ2	C8-18-4他		皿状	N-2° -E	3.28	0.22	0.05		ST3切る	
SD19	Ⅶ2	C8-13-15他		皿状	N-4° -E	(18)	0.41	0.07		ST3切る	
SD20	Ⅶ2	C8-18-1他		皿状	N-15° -E	2.4	0.26	0.05			
SD21	Ⅶ2	C8-13-10他		皿状	N-11° -W	22.63	0.34	0.07		ST3切る	
SD22	Ⅶ2	C8-12-21		皿状	N-88° -W	(2.8)	0.28	0.04			
SD23	Ⅶ2										欠番
SD24	Ⅶ2	C8-14-4他		皿状	N-75° -W	(4.63)	0.38	0.04			
SD25	Ⅶ2										欠番
SD26	Ⅶ2	C8-14-8他	不明	皿状	N-75° -W	(4.23)	0.36	0.09			
SD27	Ⅶ2										欠番
SD28	Ⅶ2										欠番
SD29	Ⅶ2										欠番
SD30	Ⅶ2	C8-9-19他	弥生	皿状	N-78° -W	(3.94)	0.77	0.14	石包丁		
SD31	Ⅶ2										欠番
SD32	Ⅶ2										欠番
SD33	Ⅶ2										欠番
SD34	Ⅶ2										欠番
SD35	Ⅶ2										欠番
SD36	Ⅶ2										欠番
SD37	Ⅶ1-SD1	C8-17-14他	古代?	皿状	N-73° -W	(24.65)	0.55	0.12	緑釉陶器	SK33・38、SD39切る	
SD38	Ⅶ1-SD2	C8-17-19	不明		N-71° -W	(0.75)	0.27	-	弥生細片		
SD39	Ⅶ1-SD3	C8-17-12他	古代	皿状	N-17° -E	(7.47)	0.6	0.1	土師碗	SD37切られる	
SD40	Ⅶ1-SD4	C8-17-16他	古代?	皿状	N-18° -E	(13.84)	0.5	0.11	土師坏片	ST10、SD37切る	
SD41	Ⅶ1-SD5	C8-16-8他	不明	皿状	N-11° -E	(10.05)	0.3	0.1		SD44切る	
SD42	Ⅶ1-SD6	C8-16-8他	不明	皿状	N-13° -E	(11.32)	0.2	0.06	弥生細片	SD44切る	
SD43	Ⅶ1-SD7	C8-16-3	不明	皿状	N-77° -W	(2.25)	0.25	0.04	弥生細片	SD41・42切る	
SD44	Ⅶ1-SD8	C8-16-8	不明	皿状	N-81° -W	(4.34)	0.6	0.25	弥生細片	SD41・42切られる	
SD45	Ⅶ1-SD9	C8-16-7他	古代?	皿状	N-83° -W	4.43	0.26	0.07	須恵坏	SD49切られる	
SD46	Ⅶ1-SD10	C8-16-2他	不明	皿状	N-78° -W	(7.26)	0.28	0.07	弥生細片	SD41切る	
SD47	Ⅶ1-SD11	C8-16-13	不明	皿状	N-9° -E	2.25	0.21	0.04	弥生細片		
SD48	Ⅶ1-SD12	C8-16-12他	不明	皿状	N-32° -E	(5.3)	0.27	0.04	無		
SD49	Ⅶ1-SD13	C8-16-2他	古代		N-3° -E	7.42	0.27	-	須恵壺片	SD45切る、SD46切られる	
SD50	Ⅶ1-SD14	C8-16-7他	不明	皿状	N-7° -E	10.47	0.32	0.04		SD46切られる	
SD51	Ⅶ1-SD15	C7-20-3他	近世	台形状	N-15° -E	(23.68)	1.2	0.39	唐津皿	SD55・56切られる	
SD52	Ⅶ1-SD16	C7-20-4他	不明	皿状	N-17° -E	(10.95)	0.52	0.07	弥生細片	SD55切る	
SD53	Ⅶ1-SD17	C7-20-5他	古代	皿状	N-10° -E	(8.82)	0.35	0.05	須恵壺片	SD55切られる	
SD54	Ⅶ1-SD18	C7-15-23	古代	皿状	N-10° -E	(1.35)	0.55	0.07	須恵碗		
SD55	Ⅶ1-SD19	C7-20-5他	古代	皿状	N-81° -E	(1.32)	1.11	-	須恵壺片	SD51切る、SD52切られる	
SD56	Ⅶ1-SD20	C7-20-13他		皿状	N-78° -W	(7.8)	0.28	0.09		SD51切る	



所見：調査区中央部よりやや東寄りのC8-13-5グリッドに位置する南北溝である。SD13等に切られる。軸はN-8°-Eとやや東に振る。規模は調査区内で長さ9.9m、幅30cm強、深さ10cm強である。遺物は少ない。古代の可能性はある。溝としては最も古い時期に相当する。

出土遺物(第61図No1、2)

No1は須恵器甕の口縁部破片である。口径18.4cmを測り、大きく外反する。口縁内に淡緑色の釉がかかる。胎土は乳灰白色を呈しており、灰釉陶器の可能性もある。

2は土器羽釜の鏝部分である。鏝部分の径は32.4cmを測る。胎土に微砂粒を多量に含む。

### SD8 (第60、61図)

グリッド:C8-13-7他 切り合い関係:SD9に切られる

時期:古代? 主軸方向:N-78°-W

規模:長さ3.6m×幅0.26m 深さ0.05m 断面形状:皿状

覆土:- 出土遺物:須恵器壺

所見：調査区中央部北端C8-13-7グリッドに位置する東西溝である。軸方向はN-78°-Wである。古代のSD9を切る。調査区内での規模は3.6mと短い。深さも5cm足らずである。遺物は少なく、所属時期は古代の可能性のあるものの判然としない。

出土遺物(第61図No1)

No1は須恵器壺である。口径19.2cmを測る。口縁はやや短く外傾し、肩部余り張らない。整形は口縁内外面共にナデ、体部外面が平行タタキ、内面が波状タタキである。胎土には小黒色斑点が付く。

### SD9 (第60、61図)

グリッド:C8-13-7他 切り合い関係:ST6・7・9、SB7・9を切る

時期:古代 主軸方向:N-20°-E

規模:長さ(20.42) m×幅0.25～0.35m 深さ0.03～0.07m 断面形状:皿状

覆土:- 出土遺物:土器坏

所見：調査区中央C8-13-7グリッドに位置する南北溝である。中央部の竪穴建物跡群ST6、7、9を切る。南端は調査区内で収束する。北側は調査区外へと続く。軸はN-20°-Eと東に強く振る。調査区内での規模は長さ20.42m、幅25cm、深さ3cmと極めて浅い。出土遺物は少ない。古代の可能性のあるものの判然としない。

出土遺物(第61図No1、2)

No1、2は土器坏である。1は口径12.2cmを測る。僅かに丸味を持って立ち上がり、外面はロクロ目、内面がナデ整形である。2は底部破片で底径4.6cmを測る。外面にロクロ目を顕著に残す。

### SD14 (第60、61図)

グリッド:C8-12-10他 切り合い関係:SK20、SB10を切る

時期:古代? 主軸方向:N-12°-E

規模:長さ(12.43) m×幅0.24m 深さ0.05m 断面形状:皿状

覆土:- 出土遺物:土師器坏

所見；調査区中央C8-12-10グリッドに位置する南北溝である。SK20、SB10を切る。溝南側部は調査区内で収束する。北側は更に調査区外へと続く。軸はN-12°-Eでやや東に振る。規模は長さ12.43m、幅24cm、深さ5cmと浅い。遺物は少なく古代の可能性のあるものの、混入の可能性も捨てきれない。

出土遺物(第61図No1)

No.1は土師器坏である。口径12.8cmを測る。体部は僅かに外反する。内外面共にロクロナデ整形である。

### SD30 (第60、61図)

グリッド:C8-9-19他 切り合い関係:-

時期:弥生時代後期後半 主軸方向:N-78°-W

規模:長さ(3.94)m×幅0.77m 深さ0.14m 断面形状:皿状

覆土:- 出土遺物:弥生小型土器、高坏、石包丁

所見；調査区北東隅C8-9-19グリッドに位置する東西溝である。弥生後期後半の土坑SK30、31が隣接する。西側は調査区外へと続く。検出した規模は長さ3.94m、幅77cm、深さ14cmである。遺物はやや纏まっており、弥生後期後半の遺物で占められているところから該期であろう。

出土遺物(第61図No1～3)

No.1は手捏ね小型土器である。底径3.6cmである。器種は不明である。やや開く脚が付き、外面は指頭圧痕が残る。内面はナデ整形である。2は高坏の脚部である。坏部は欠損する。裾部は大きく開き、透かし孔を有する。外面がミガキ、内面はナデ整形である。

3は石包丁である。磨製を打製に転用したもので、刃部を敲打により作出し、両端部に浅い抉入部を作出する。法量は長さ11.2cm、幅4.9cm、重さ57.2gを量る。緑色変岩製である。

### SD37 (第60、61図)

グリッド:C8-17-14他 切り合い関係:SK33・38、SD39を切る

時期:古代? 主軸方向:N-73°-W

規模:長さ(24.65)m×幅0.55m 深さ0.12m 断面形状:皿状

覆土:- 出土遺物:緑釉陶器

所見；調査区中央部C8-17-14グリッドに位置する東西溝である。軸方向はN-73°-Wで北側のSD13とやや似た規模と方位を採る。攪乱以外のほとんどの遺構を切る。溝の西端は調査区内で収束するものの、東側は調査区外へと続く。規模は長さ24.65m、幅55cm、深さ12cmである。遺物は緑釉陶器が出土しているものの、本溝跡に伴うかどうかは不確かである。

出土遺物(第61図No1)

No.1は緑釉陶器である。口径11.7cmを測り、器肉は薄い。体部は開き、口縁は僅かにくびれる。外面にロクロ目が残る。内外面に淡緑色の薄い釉が掛かる。

### SD39 (第61図)

グリッド:C8-17-12他 切り合い関係:SD37に切られる

時期;古代 主軸方向;N-17° -E

規模;長さ(7.47) m×幅0.6m 深さ0.1m 断面形状;皿状

覆土;- 出土遺物;土師器碗

所見;調査区中央C8-17-12グリッドに位置する南北溝である。軸方向はN-17° -Eで隣りのSD40とほぼ同一である。北側部では検出できていない。南側は更に調査区外へと続く。規模は長さ7.47m、幅60cm、深さ10cmである。出土遺物は少ないものの古代の可能性はある。

出土遺物(第61図No1、2)

No1、2は土師器碗である。共に高台が付く。1の底径は8cmを測り、体部は開き、内面にロクロ目を残す。2の底径は7.2cmを測り体部は開き、内外面共にナデ整形である。

### SD40 (第61図)

グリッド;C8-17-16他 切り合い関係;ST10、SD37を切る

時期;古代? 主軸方向;N-18° -E

規模;長さ(13.84) m×幅0.5m 深さ0.11m 断面形状;皿状

覆土;- 出土遺物;土器坏

所見;調査区中央C8-17-16グリッドに位置する南北溝である。SD39と規模、方位は似る。SD40は更に北側に続きSD2と同一の可能性はある。規模は長さ13.84m、幅50cm、深さ11cmである。南側は更に調査区外へと続く。出土遺物は少なく古代の可能性はあるものの判然としない。

出土遺物(第61図No1)

No1は土器碗である。底径7cmを測り、切り離しは回転糸切りである。内面にロクロ目を顕著に残す。

### SD45 (第61図)

グリッド;C8-16-7他 切り合い関係;SD49に切られる

時期;古代? 主軸方向;N-83° -W

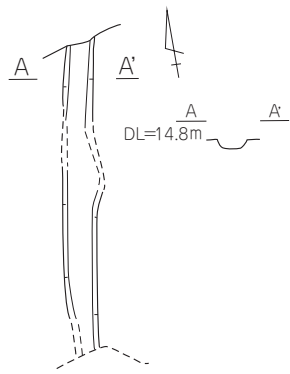
規模;長さ4.43m×幅0.26m 深さ0.07m 断面形状;皿状

覆土;- 出土遺物;須恵器坏

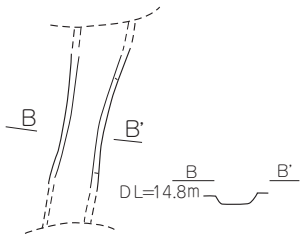
所見;調査区やや西寄りC8-16-7グリッドに位置する短い東西溝である。長さ4.43m、幅26cm、深さ7cmと浅い。遺物は須恵器が出土しているものの伴うかどうかは不確かである。

出土遺物(第61図No1)

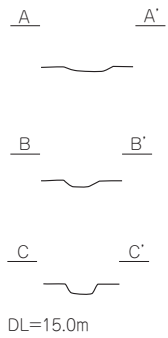
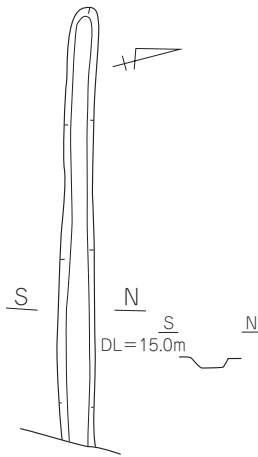
No1は須恵器坏である。体部はやや丸味を持つ。底部切り離しは不明である。切り離し後、ナデか。法量は口径12.4cm、器高3.6cm、底径9cmを測る。



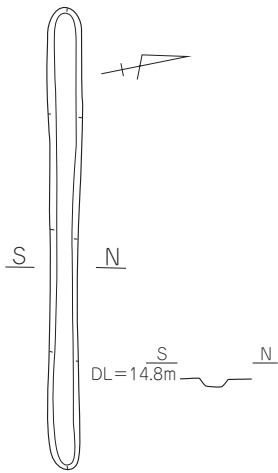
SD1



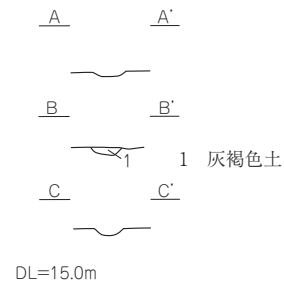
SD4



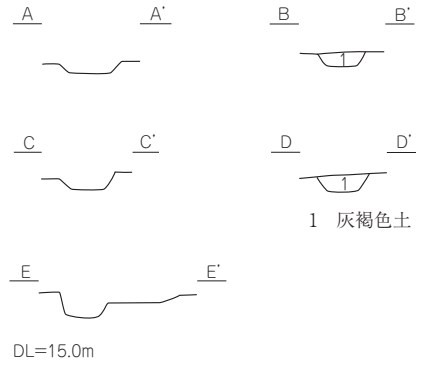
SD9



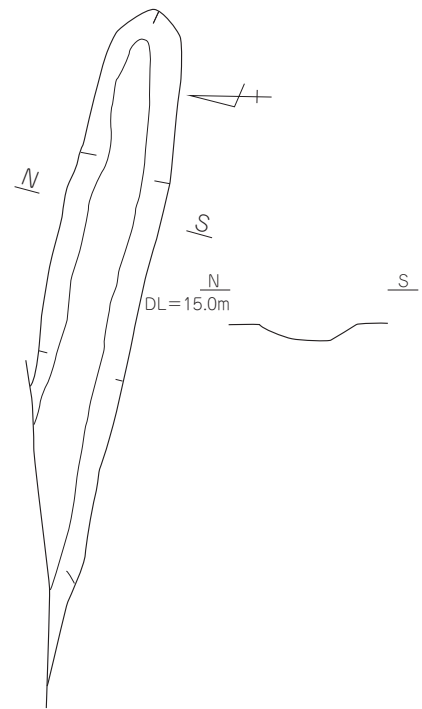
SD8



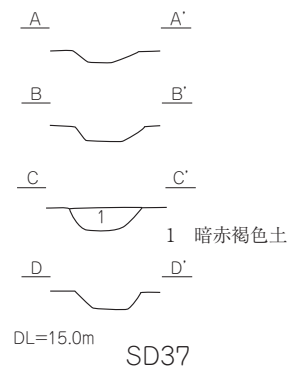
SD14



SD7



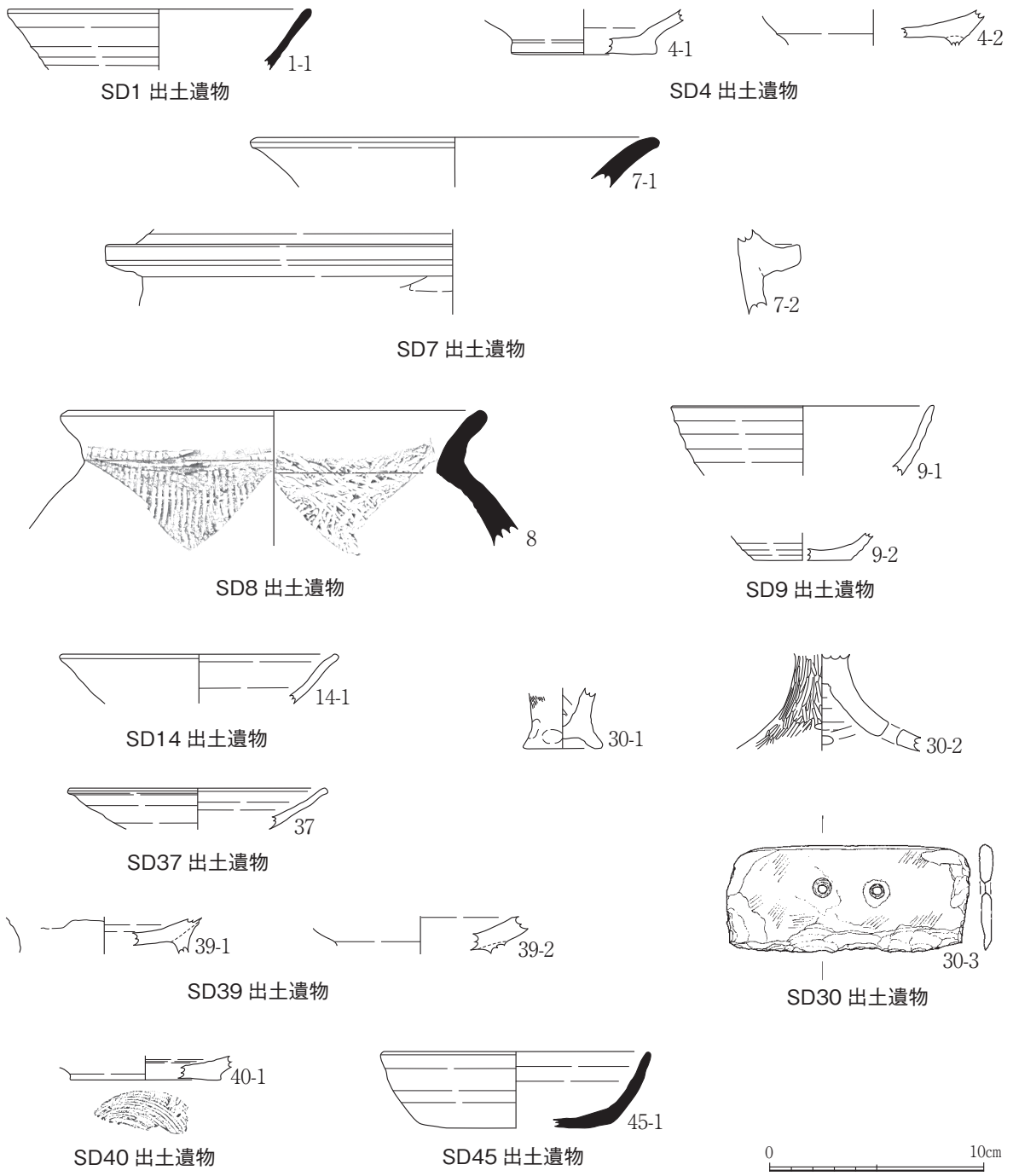
SD30



SD37



第 60 図 溝状遺構図



第 61 図 溝状遺構出土遺物実測図

## 第6節 柱穴跡

検出した柱穴跡は約300基である。北側部Ⅶ2区で大部分を検出している。南側Ⅶ1区は極めて少ない。遺物の出土した柱穴跡は比較的多いものの、位置が不確かなものがほとんどで柱穴跡一覧表も省略した。傾向として弥生、古墳時代の遺物出土柱穴跡は極めて少なく、古代がほとんどである。中には中世、近世のものも含まれるものの、数は限られてくる。ここでは34基の柱穴跡から出土した主な遺物43点のみ取り上げる。

器種は土師器が皿、台付皿、坏、碗、台付碗、黒色土器碗、瓦器碗、須恵器坏、布目平瓦等である。土師器の皿の口径は最小でC8-17-5-P7出土のもので7.3cm、最大のものでC8-14-3-P1出土の15cmである。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。整形は内外面共にロクロナデである。坏は口径の最小のものはC8-9-24-P3出土No.3の9cmである。最大のものでC8-12-15-P2出土の13cmである。10cm台が最も多く、11点中7点である。底部切り離しは回転ヘラ切りが大半を占めているものの、C8-13-5-P4出土のものは回転糸切りである。底部が出っ尻気味になるものが何点か認められる。また底部内面にロクロ渦巻き痕が残るものもある。碗類は土師器と黒色土器、瓦器に認められる。土師器の底部は円盤状底部で切り離しは回転糸切りである。時期的には10世紀から11世紀のものが多い。

### C8-9-18-P1 (第62図)

No.1は土師器坏で腰折れ状で、底部は出っ尻気味である。内外面共にロクロナデである。

### C8-9-19-P1 (第62図)

No.1は土師器坏で底部回転ヘラ切り、底部は出っ尻気味である。体部は直立気味である。内面底部はロクロ渦巻きが残る。2は土師器皿である。器高が低く、体部は大きく開く。表面が落剥して整形不明である。

### C8-9-19-P2 (第62図)

No.1は土師器坏で底部は出っ尻気味か。体部は外反気味である。表面が落剥し整形は不明である。

### C8-9-22-P1 (第62図)

No.1は土師器坏で底部は回転ヘラ切りである。底部は出っ尻気味、体部は外反気味である。体部内外面共にロクロ目、内面底部にロクロ渦巻きが残る。

### C8-9-23-P1 (第62図)

No.1は土師器皿で器高が低く、体部は大きく開く。表面が落剥し整形不明である。

### C8-9-23-P4 (第62図)

No.1は土師器坏で底部回転ヘラ切りか。体部は外傾気味である。内外面共にロクロナデである。



#### C8-9-24-P1 (第62図)

No.1は黒色土器碗である。内面のみ黒色処理を施す。体部は丸味を持ち、外面がロクロ目、内面はミガキ整形である。在地系か。2は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りか、口縁が折り縁状になる。内外面共に整形はロクロナデである。

#### C8-9-24-P3 (第62図)

No.1、2は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りか。器高が低く、内外面共にロクロナデ整形である。3は土師器坏である。底部は回転ヘラ切りで出っ尻気味である。体部は外傾気味で、体部内外面共にロクロ目が残り、内面底部にはロクロ渦巻きが残る。4は土師器台付皿である。皿部の器高は低く体部は開く。台裾は僅かに開く。内外面共にロクロナデ整形である。5も台付皿で台部分である。大型皿の可能性がある。台部は僅かに開き、内外面共にロクロナデ整形である。6はチャート製の石核である。船底形を呈し、甲板面は平らである。打面は転移し、規則性はない。燧石の石核の可能性がある。

#### C8-9-24-P4 (第62図)

No.1は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。器高は低く、体部は大きく開く。内外面共にロクロ目を残す。2は土師器坏である。底部は回転ヘラ切りで出っ尻気味である。体部は外傾気味である。体部内外面共にロクロ目を残し、内面底部にもロクロ渦巻き跡を残す。3は土師器碗である。体部大きく開く。表面が落剥しており、整形は不明である。器肉は薄く、色調は淡灰黄色を呈する。

#### C8-12-15-P2 (第62図)

No.1は土師器坏である。体部は外反気味で、内外面共にロクロナデ整形である。内面底部にロクロ渦巻きが残るか。

#### C8-12-21-P2 (第62図)

No.1は平瓦である。厚さ2.1cmで凸凹面共に布目が残る。

#### C8-13-5-P4 (第62図)

No.1は土師器坏である。底部は回転糸切りである。腰部は丸味を持ち、体部は開き気味である。整形は外面がロクロ目、内面はロクロナデ、内面底部にはロクロ渦巻きを残す。

#### C8-13-6-P3 (第62図)

No.1は黒色土器である。内面のみ黒色処理を施し、内面はミガキ整形である。

#### C8-13-7-P3 (第63図)

No.1は土師器碗の底部である。円盤状高台で底部は回転糸切りである。体部は開く。外面はロクロ目、内面はナデ整形である。

C8-13-7-P4 (第63図)

No.1は須恵器坏である。口径は小さく12 cmである。口縁が僅かに外反し、底部は回転ヘラケズリである。TK217相当か。

C8-13-8-P2 (第63図)

No.1は黒色土器碗である。内外面共に黒色処理、ミガキを施す。体部は僅かに内弯気味で、口唇内に沈線が1条巡る。

C8-13-10-P3 (第63図)

No.1は土師器台付皿である。皿部は器高が低く開く。台裾部は直立する。内外面共にロクロナデである。

C8-13-10-P8 (第63図)

No.1は土師器碗の底部である。円盤状高台で、底部は回転ヘラ切りである。体部は開き、内外面共にロクロナデ整形である。

C8-13-14-P3 (第63図)

No.1は土師器坏で底部は回転ヘラ切りである。体部は外傾し、内外面共に回転ナデ整形である。

C8-13-19-P1 (第63図)

No.1は弥生土器壺で口縁と底部は欠損する。頸部は直立し、肩部はなだらかである。整形は外面がタタキ、ハケ、内面がナデ、ハケ整形である。

C8-13-20-P4 (第63図)

No.1は土師器台付皿である。皿部は器高が低く開く。台裾部は直立か。内外面共にロクロナデ整形である。

C8-13-20-P5 (第63図)

No.1は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りである。器高は低く、体部開く。内外面共にロクロナデ整形である。

C8-13-25-P16 (第63図)

No.1は土師器坏である。表面落剥整形等は不明である。底部回転ヘラ切りか。底部出っ尻気味、体部は外傾気味で、内面底部にロクロ渦巻き痕が残る。

C8-14-3-P1 (第63図)

No.1は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りか。器高は低く、体部が開く。内外面共にロクロナデ整形である。

**C8-14-4-P8** (第63図)

No.1は土師器坏である。底部は回転ヘラ切りか。器高やや低く、体部が開く。外面はロクロ目、内面がロクロナデ整形である。

**C8-14-8-P9** (第63図)

No.1は瓦器碗である。体部は内弯気味で、口唇が尖り気味である。内外面共にナデ整形である。内外面共に色調は灰黒色を呈する。

**C8-17-5-P2** (第63図)

No.1は土師器皿である。器高は低く、体部は外傾する。表面が摩耗する。内外面共にロクロナデ整形か。

**C8-17-5-P7** (第63図)

No.1は土師器皿である。丸底で、口縁が短く立ち上がる。底部は回転ヘラ切り後ナデ整形である。体部も内外面共にナデ整形である。

**C8-17-8-P8** (第63図)

No.1は土師器皿である。丸底で、体部は丸味を持ち、口縁は強くナデ立ち上がる。底部は回転ヘラ切り後ナデか。体部内外面共にナデ整形である。

**C8-17-10-P4** (第63図)

No.1は土師器皿である。丸底で、口縁は外傾し、底部は回転ヘラ切り後ナデか。体部内外面共にナデ整形である。

**C8-17-12-P1** (第63図)

No.1は土師器高台付碗である。やや足長の高台でやや反る。碗部底部は回転ヘラ切りである。内外面共にナデ整形で、碗底部内面にロクロ渦巻き痕が残る。

**C8-17-13-P3** (第63図)

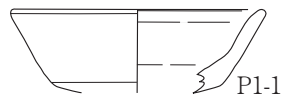
No.1は平瓦である。摩耗するものの凸凹面共に布目痕が残る。厚さ2.4cmを測る。

**C8-18-3-P3** (第63図)

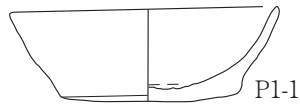
No.1は土器小壺である。短頸小壺で器高4.1cm、口径4.7cm、底径5.8cmである。底部は回転糸切りである。外面に煤が付着する。

**C8-18-7-P4** (第63図)

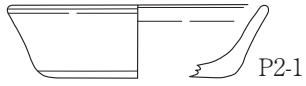
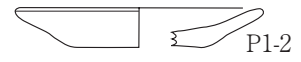
No.1は土師器皿である。丸底で体部は丸味を持ち、口縁を強くナデ、緩やかに開く。底部は回転ヘラ切り後ナデか。



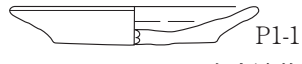
C8・9・18・P1 出土遺物



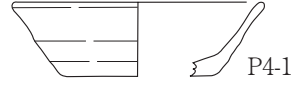
C8・9・19・P1 出土遺物



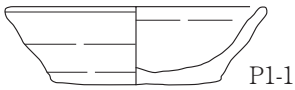
C8・9・19・P2 出土遺物



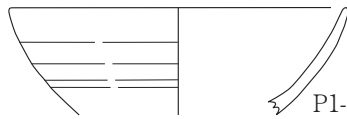
C8・9・23・P1 出土遺物



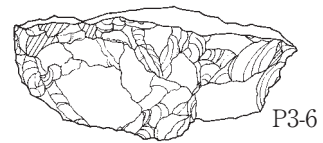
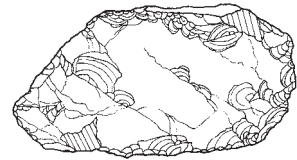
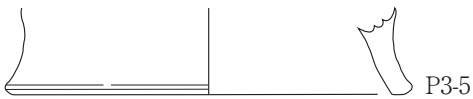
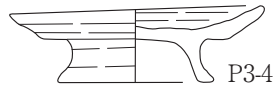
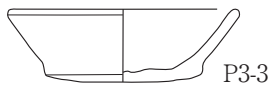
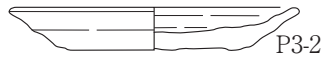
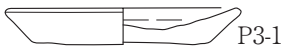
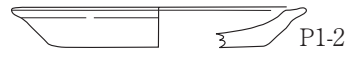
C8・9・23・P4 出土遺物



C8・9・22・P1 出土遺物

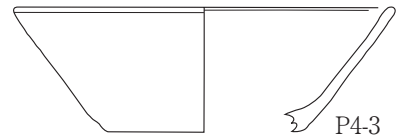
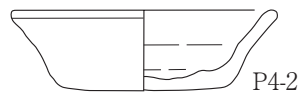
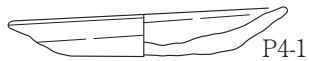


C8・9・24・P1 出土遺物

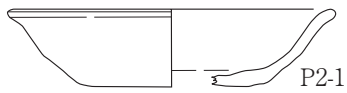


0 10cm

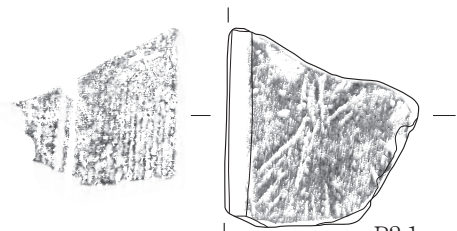
C8・9・24・P3 出土遺物



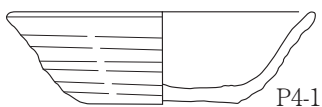
C8・9・24・P4 出土遺物



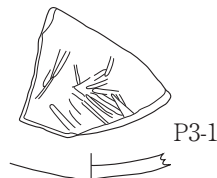
C8・12・15・P2 出土遺物



P2-1



C8・13・5・P4 出土遺物

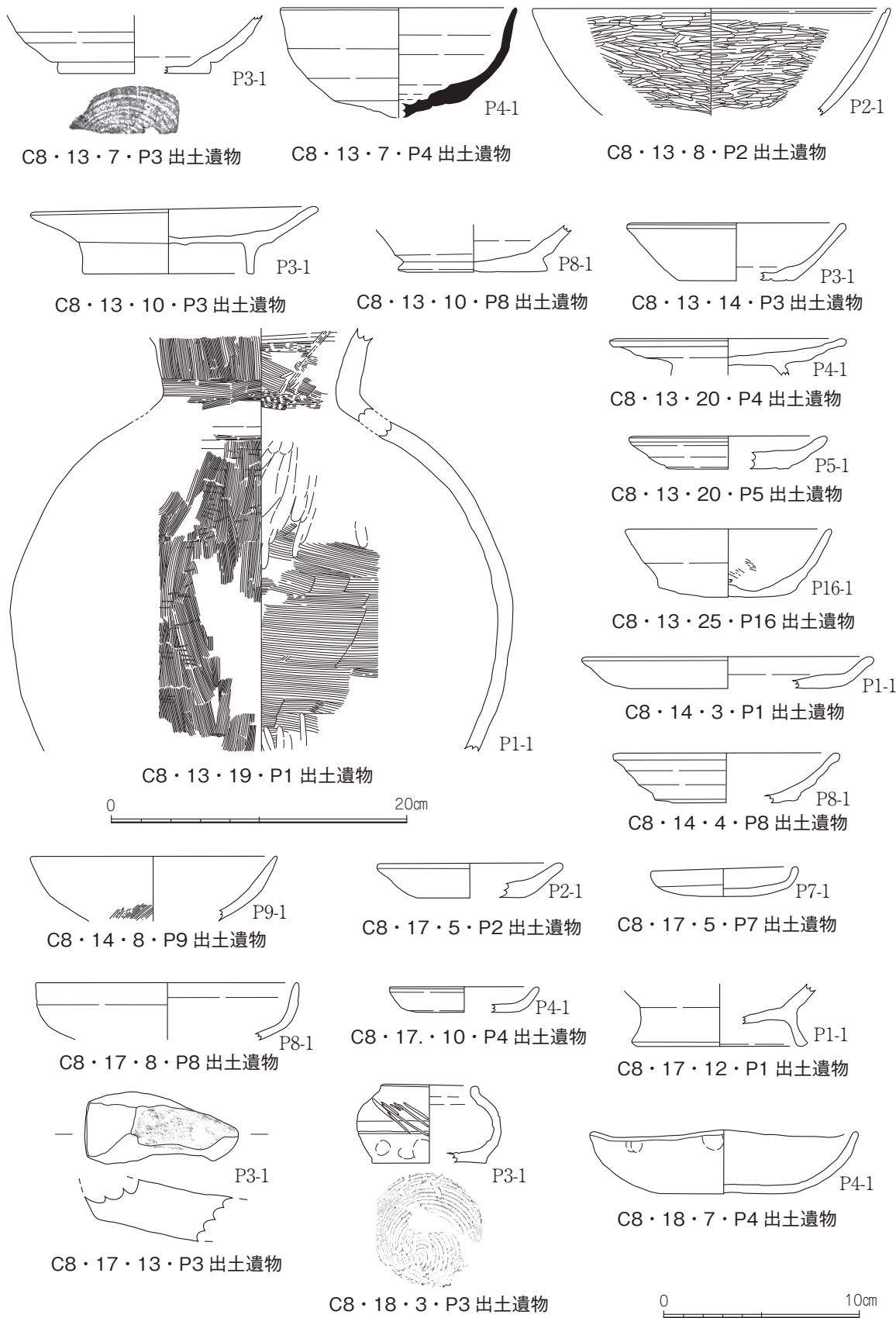


C8・13・6・P3 出土遺物

C8・12・21・P2 出土遺物

0 10cm

第 62 図 柱穴出土遺物実測図 (1)



第 63 図 柱穴出土遺物実測図 (2)

## 第7節 性格不明遺構

性格不明遺構SXとしたものは8基である。風倒木痕と考えられるものは省略した。ここで取り上げたものはSX1、2、3、5の4基である。形状、時期についてもそれぞれ相違しており、性格、機能等も一定ではないようである。

第6表 性格不明遺構一覧表

SX 番号	調査区- 旧遺構名	グリッド	時期	形状	主軸方向	規模 (m)	規模 (m)	深さ (m)	遺物	切り合い
SX1	Ⅶ2	C8-13-24	古代	長楕円	N-10° -E	(0.58)	0.22	0.13	須恵長頸壺	
SX2	Ⅶ2	C8-12-14他	近世	隅丸長方形	N-16° -E	3.82	2.6	0.19～0.24	近世陶磁器	SB8、SK16切る
SX3	Ⅶ2	C8-12-16他	古代	長方形	N-75° -W	6.52	3.85	0.24～0.30	須恵甕	SB13、SD2切る
SX4	Ⅶ2	C8-12-17他	不明	長方形	N-12° -E	3.16	3.45	0.08～0.15		SK17、SD2切られる
SX5	Ⅶ1-ST1	C8-17-18他	8C?	矩形?	N-12° -E	7.20	4.05	0.20～0.26	須恵高台坏、甕片	
SX6	Ⅶ1-SX1	C8-17-6	古代	不整形		2.17			長頸壺片	
SX7	Ⅶ1-SX2	C8-17-11	古代	不整形		1.35	0.62		須恵壺片	ST10切る
SX8	Ⅶ1	C8-17-11	近世	不整形		1.28				ST10切る

### SX1 (第64、68図)

グリッド:C8-13-24 切り合い関係:—

時期:古代 形状:長楕円形 主軸方向:N-10° -E

規模:(0.58)×0.22m 深さ0.13m

覆土:—

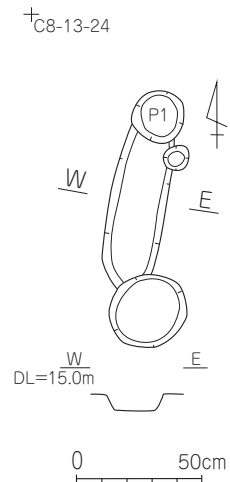
出土遺物:須恵器長頸壺、甕

所見:調査区東寄りのC8-13-24グリッドに位置する。古墳時代後期の竪穴建物跡ST4、5等が隣接している。細い楕円形の溝状のもので、両脇は他の柱穴の掘り込みが認められる。長さ0.58m、幅22cm、深さ13cmと浅い。断面は皿状を呈する。

所属時期は須恵器長頸壺が出土しており、古代の可能性がある。

出土遺物(第68図No1、2)

No1、2は須恵器で、1は長頸壺である。頸部は外反し、口縁端部を上方に摘み上げる。口径8.0cmを測る。胎土は精良である。8Cのものか。2は甕の胴部破片である。外面が平行タタキ、ハケ、内面は波状タタキ痕である。胎土に白色鉱物粒を少量含む。



第64図 SX1 遺構図

### SX2 (第65、68図)

グリッド:C8-12-14他 切り合い関係:SB8、SK16を切る

時期:江戸時代後期 形状:隅丸長方形 主軸方向:N-16° -E

規模:3.82×2.6m 深さ0.24m

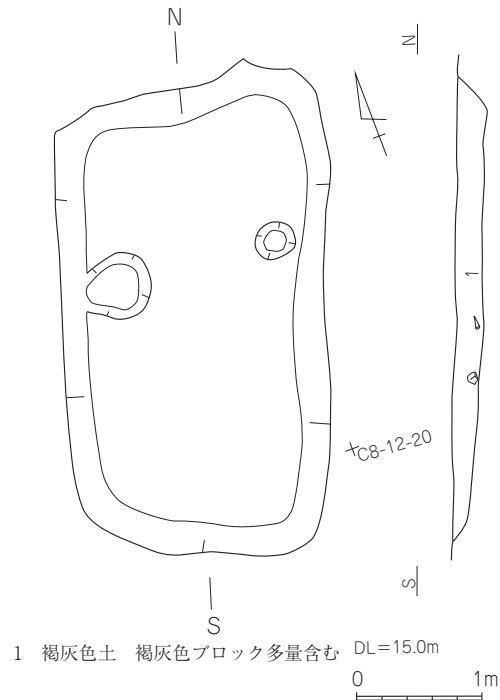
覆土:褐灰色土

出土遺物:近世陶磁器

所見:調査区北側中央部C8-12-14グリッドで検出した。長辺3.82mを測る比較的大きな隅丸長方形である。深さも24cmあり、比較的しっかりしている。礫の投棄が写真では認められる。所属時期は近世の陶磁器類が出土しており、江戸時代後期の所産と考えられる。近くに近世のハンダ土坑が数基あり、作業小屋、物置等の可能性がある。

出土遺物(第68図No1~6)

No1は染付け小碗、2は染付け皿、3は陶器丸碗である。4は染付け徳利か。5は唐津産の化粧掛けの大皿である。6は瓦質の手焙りである。焼き物の時期は江戸時代後期18Cのモノか。



第65図 SX2遺構図

**SX3** (第66、68図)

グリッド:C8-12-16他 切り合い関係:SB13、SD2を切る

時期:古代 形状:長方形 主軸方向:N-75° -W

規模:6.52×3.85m 深さ0.30m

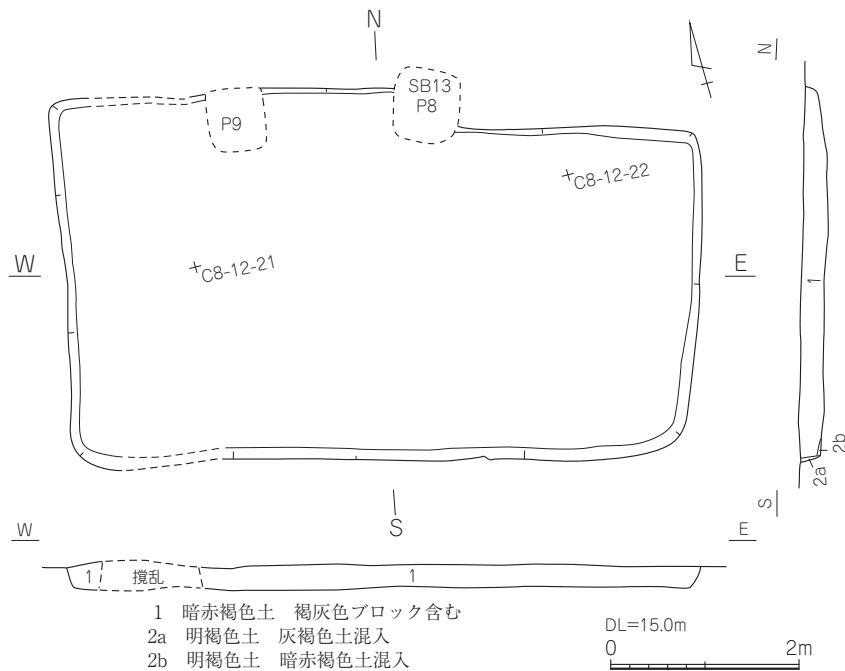
覆土:暗赤褐色土

出土遺物:須恵器甕、土師器甕

所見:調査区西北側C8-12-16グリッドに位置する。長辺6.52mを測る大きな長方形で深さも30cm程である。規模からして竪穴建物跡の可能性も捨てきれないが、出土遺物は古代の遺物がほとんどで、また切り合い関係からしても古墳時代までは遡らないと考えられる。

出土遺物(第68図No1~3)

No1は須恵器甕片で外面が平行タタキ、内面が波状タタキ整形である。器肉は7mmである。2、3は土師器甕の破片である。2は胴頸部で肩部が張らず、頸部が粗いヨコ



第66図 SX3遺構図



ハケ、胴部が斜ハケ整形である。内面はナデ整形である。外面には煤が付着する。3は外面が細かいハケ、内面はナデ整形である。胎土に白色鉍物粒を多量に含む。10C代のものか。

**SX5** (第67、68図)

グリッド:C8-17-18他 切り合い関係:-

時期:古代8C後半? 形状:矩形? 主軸方向:N-12°-E 規模:7.2×4.05m 深さ0.26m 覆土:-

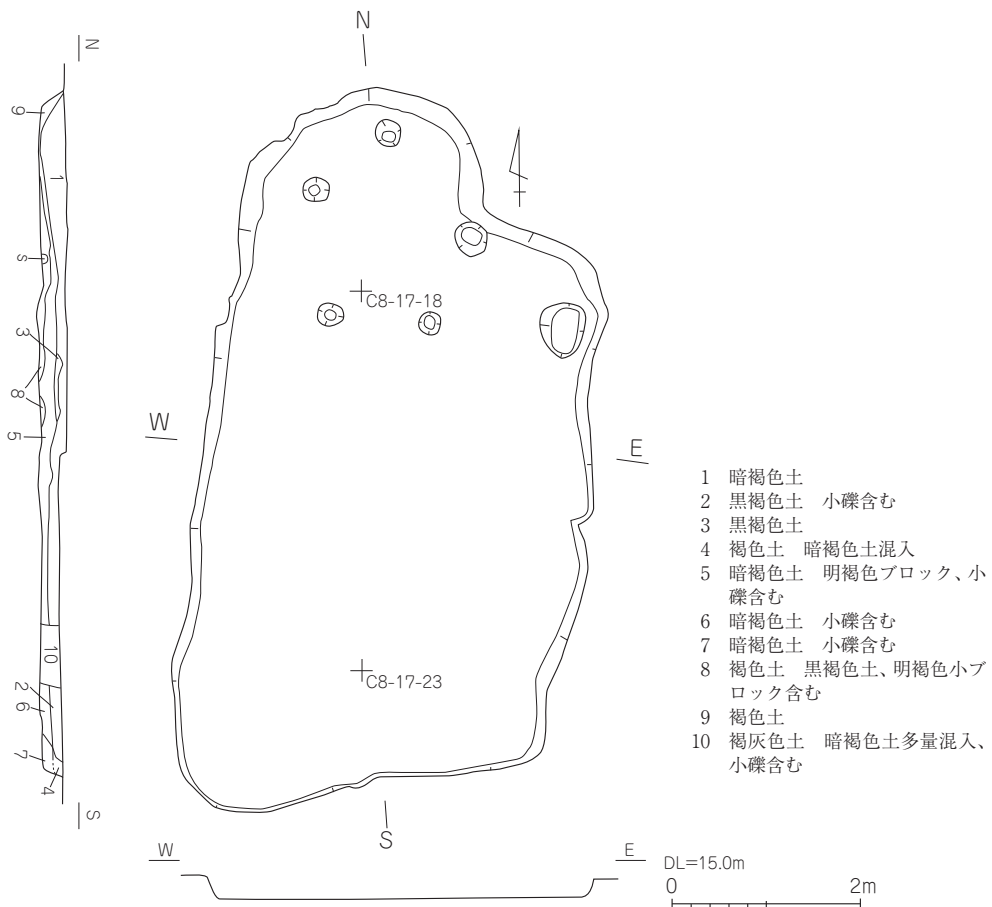
出土遺物:須恵器坏、甕、土師器坏、甕

所見:中央部南端で検出した。長辺7.2mを測る規模の大きなもので、やや矩形を呈する。Ⅷ区で幾つか検出した小竪穴状遺構と同様のものの可能性がある。

所属時期は出土遺物からして古代の可能性はある。

出土遺物(第68図No1~9)

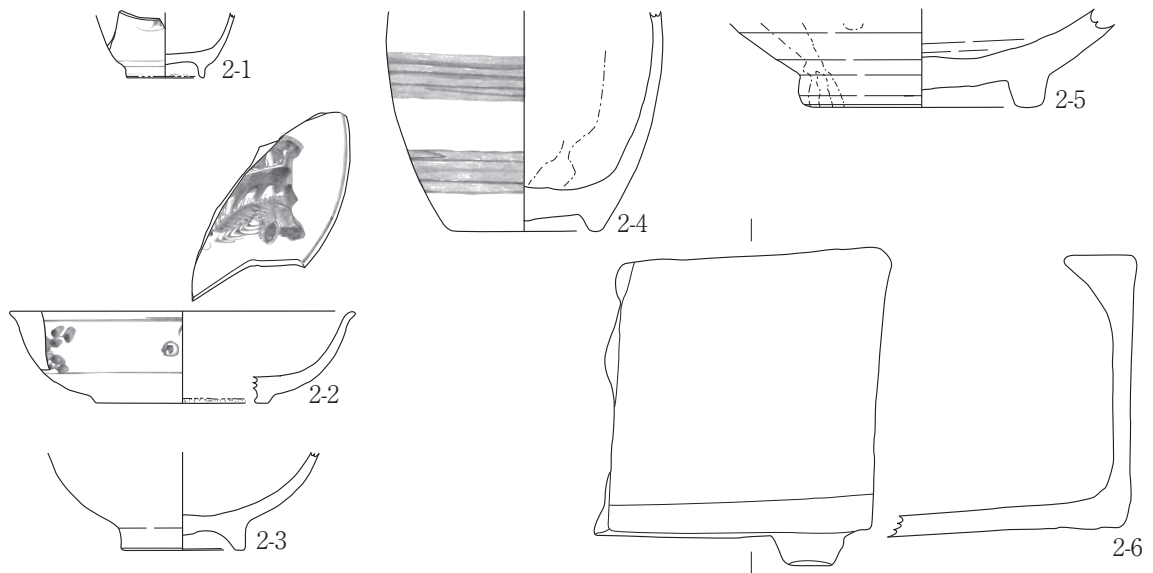
No1、2は須恵器で1は坏の底部である。断面方形の高台が付く。2は甕か壺の胴部破片である。3から9は土師器で4、9以外は坏である。坏の底径の大きさは規格性がなく6cmから9cmまでばらつきがある。共に底部の切り離しは回転ヘラきりで3の様に体部は開く。また5から7の様に内面中央部が凹むものが認められる。8は高台の付くものである。4、9は土師器甕である。4は口縁が外反するもので、内外面共にハケ整形である。9は口縁が短く受け口状に立ち上がり、口唇を上方に摘み上げる。肩部は張らない。整形は外面がナデ、内面はハケである。



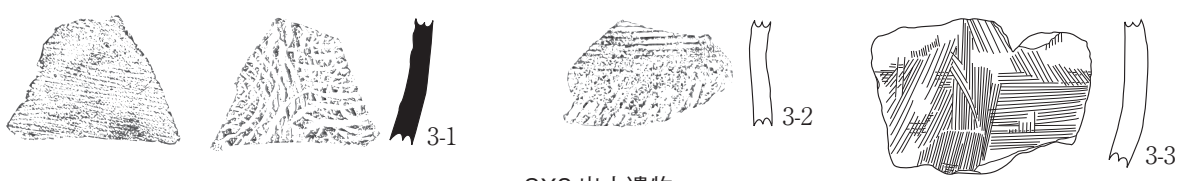
第 67 図 SX5 遺構図



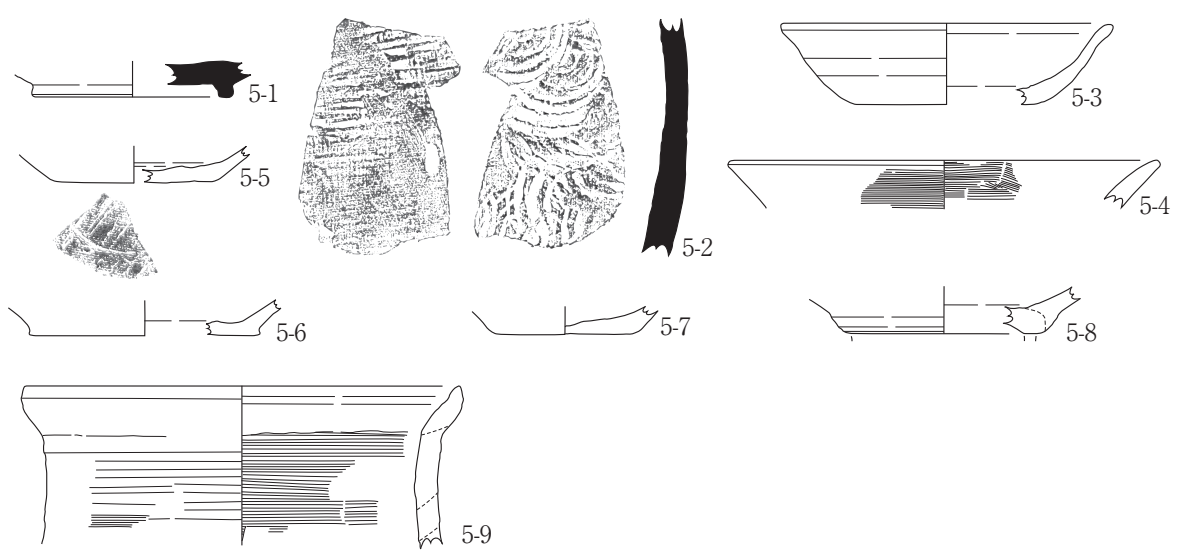
SX1 出土遺物



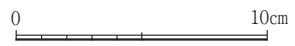
SX2 出土遺物



SX3 出土遺物



SX5 出土遺物



第 68 図 性格不明遺構出土遺物実測図

## 第8節 小結

### 1. 竪穴建物跡

竪穴建物跡は祈年遺跡全体では70軒程検出している。その中でⅦ区では10軒を検出した。調査区の北側Ⅶ2区に9軒が分布し、ST10のみが南側Ⅶ1区に位置している。

切り合い関係を見てみるとST9がST4からST7の全てに切られている。ST4がST5を、ST6がST7を切る。

弥生時代後期後半Ⅵ-1期に相当するST1からST3、ST9は同時期と考えられる。これら4軒については遺構形状もほぼ相似と言える。類似点を上げると、平面形が六角形、径7から8mの大型建物であること、中央に楕円形の炉跡を持ち、更に円形の炉跡が付随すること、ベッド状遺構を有するなど共通項が極めて多く、遺跡内に於いて一群を形成している。立地的には同様の形態のものは東側のⅧ区に4軒認められ、Ⅶ区の一群は西端に位置し、これより西側では弥生時代の竪穴建物跡は検出していない。

該期のほぼ同時期にST1、2の建物内で壺棺SG1、2を検出している。Ⅷ区では竪穴建物跡外で掘り方を伴う18基の壺棺を検出している。本区での壺棺は掘り方等は不明であるが、整理作業の中で大型壺であるところから壺棺と判断した。

次いで南側で1軒のみ離れた位置にあるST10は弥生時代後期終末Ⅵ-2期から古墳時代前期初頭の時期に相当する。平面形は隅丸方形で四囲にベッド状遺構を構築し、支柱穴は4本、炉跡は楕円形を呈し、本遺跡でも他の遺跡でもほぼ同様の類型が数多く認められる。

古墳時代後期に該当する建物跡はST4からST8の5軒である。ST4・ST5とST6・ST7の切り合い関係があるところから2時期が考えられる。造り付けの竈を北壁に有する。ST5についてはST4に壊されているところから竈を有するかどうかは不明である。本遺跡では古墳時代後期の竪穴建物跡は27軒検出しており、竈は北壁が最も多く、若干東壁の例も認められ、東壁に構築したものの方が新しい。付帯施設はほとんど不明で支柱穴の存在も不明なものが多い。時期的には6世紀後半から7世紀前半に該当する。

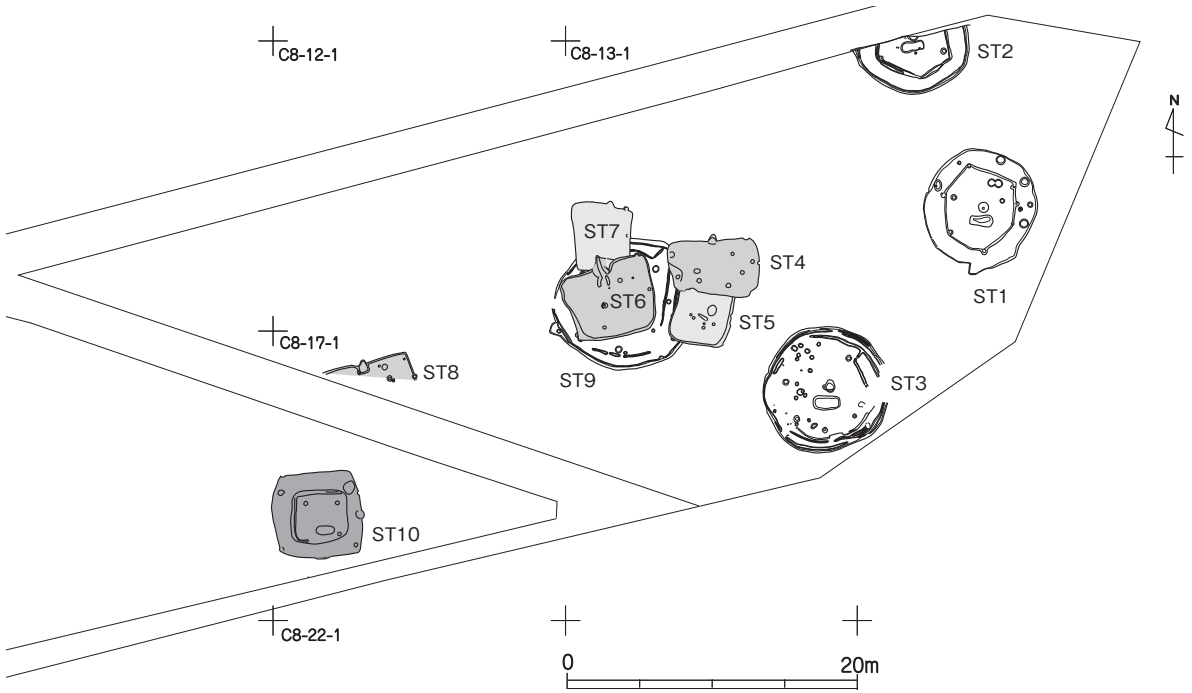
### 2. 掘立柱建物跡

Ⅶ区で検出した掘立柱建物跡は15棟程である。柱穴跡を多数検出しており、古代以外にも中世、近世の掘立柱建物跡の存在も考えられる。図面上では幾つかの掘立柱建物跡の並びが確認できているものの、発掘現場では認識されておらず、明確な掘り方を有するものをここでは取り上げる。

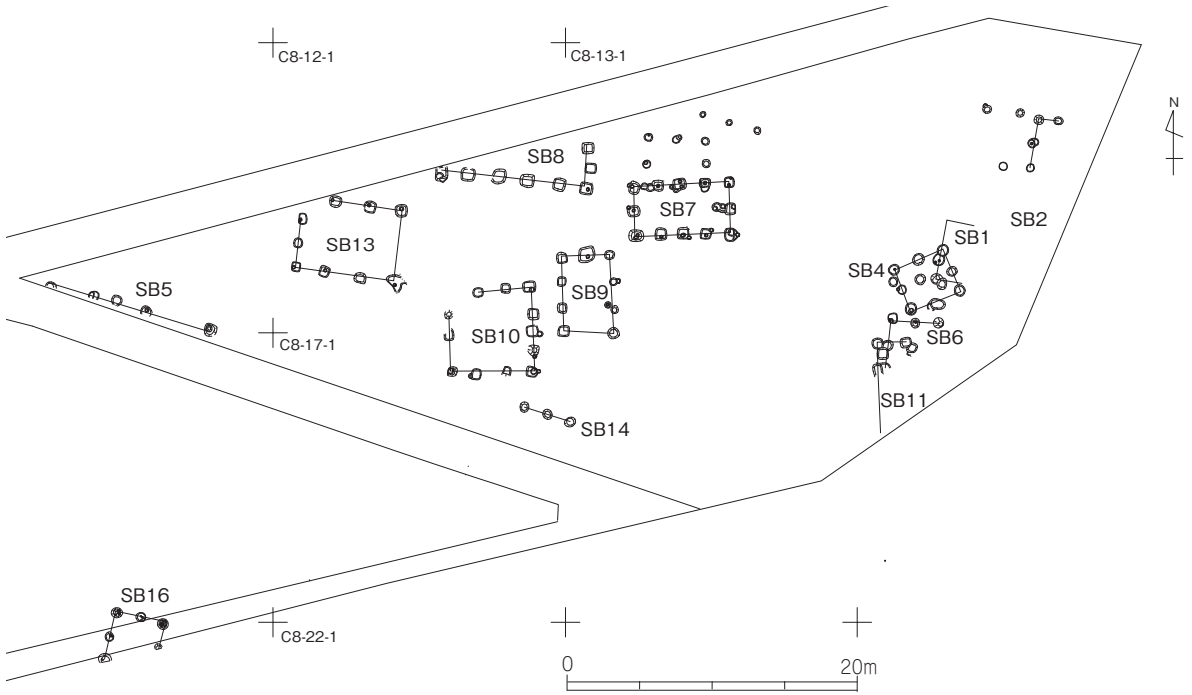
Ⅶ区で主となる掘立柱建物跡は中央部北側に展開するSB群でSB7、8、9、10、13の5棟である。調査区東側部でもSB1、4、6、11の4棟の纏まりが認められる。掘立柱建物跡に遺物が出土していても伴うかどうかは不確実であるものの、出土遺物からして時期的にはばらつきがある。

古墳時代の可能性のあるものはSB5、13、14でSB13は7世紀前半の可能性があり、SB13については竈付竪穴建物跡に伴う可能性がある。

古代と考えられるものはそれ以外のもので、SB8が8世紀代、SB4、9が10世紀代の可能性がある。



第 69 图 VII区竖穴建物跡時期別変遷図



第 70 图 VII区掘立柱建物跡全体配置図

## 参考文献

- 出原恵三、2000、土佐地域『弥生土器の様式と編年』四国編、木耳社
- 『祈年遺跡Ⅰ』2011、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『祈年遺跡Ⅱ』2012、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『大柿遺跡Ⅱ』2004、(財)徳島県文化財団埋蔵文化財センター
- 『奥谷南遺跡Ⅰ』1999、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『奥谷南遺跡Ⅲ』2001、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『具同中山遺跡群Ⅳ』2001、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『小籠遺跡Ⅱ』1996、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『小籠遺跡Ⅲ』1997、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『小籠北遺跡』1999、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『栄エ田遺跡』1995、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『里改田遺跡』2000、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『下ノ坪遺跡Ⅰ』1997、高知県野市町教育委員会
- 『下ノ坪遺跡Ⅱ』1998、高知県野市町教育委員会
- 『下ノ坪遺跡Ⅲ』2000、高知県野市町教育委員会
- 『新改西谷遺跡』2002、土佐山田町教育委員会
- 『陣山遺跡・陣山北三区遺跡』1997、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『須江上段遺跡松ノ本地区』2004、土佐山田町教育委員会
- 『田村遺跡群Ⅱ』2004-2006、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『土佐国衙発掘調査報告書第2集』1981、高知県教育委員会
- 『土佐国衙発掘調査報告書第3集』1982、高知県教育委員会
- 『土佐国衙発掘調査報告書第5集』1984、高知県教育委員会
- 『土佐国衙発掘調査報告書第9集』1988、高知県教育委員会
- 『土佐国衙発掘調査報告書第12集』2001、南国市教育委員会
- 『土佐神社西遺跡・土佐神社』2006、高知市教育委員会
- 『土佐山田町史』1979、土佐山田町
- 『南国市史上巻』1979、南国市
- 『西分増井遺跡Ⅱ』2004、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『拝原遺跡』1993、高知県香我美町教育委員会
- 『林田遺跡Ⅲ』2005、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『馬場末遺跡』2004、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『東崎遺跡Ⅰ』1991、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『ひびのきサウジ遺跡Ⅲ』2010、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『伏原遺跡Ⅰ』2010、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『伏原遺跡Ⅱ』2010、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『深淵遺跡発掘調査報告書』1989、野市町教育委員会
- 『辺路石南遺跡・五反地遺跡』1999、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 『松ノ木遺跡Ⅴ』2000、高知県本山町教育委員会
- 『山田三ツ又遺跡』1997、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

第7表 遺物観察表

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第7図	ST1	1	弥生土器	壺	(19.8)			広口壺、口縁開き、上下に拡張、波状文、頸部に斜格子刻みの突帯、内外面ハケ	砂粒多量
第7図	ST1	2	弥生土器	壺	(22.4)			広口壺、口縁大きく開く、口唇拡張せず、内外面ハケ	砂粒少量
第7図	ST1	3	弥生土器	壺	(22.2)			広口壺、口縁大きく開く、口唇拡張せず、内外面ハケ	砂粒少量
第7図	ST1	4	弥生土器	壺	(12.0)			複合口縁壺、受け口状口縁、内外面ハケ、色調明黄褐色	砂粒微量
第7図	ST1	5	弥生土器	甕	(18.0)			口縁「く」字状に外傾、外面タタキ、ハケ、内面指頭、ハケ	砂粒少量
第7図	ST1	6	弥生土器	甕	(18.4)			口縁「く」字状に外傾、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	砂粒少量
第7図	ST1	7	弥生土器	甕・底部			3.3	小さな平底、外面ハケ、内面ナデ	砂粒少量
第7図	ST1	8	弥生土器	甕・底部			3.2	小さな平底、外面ハケ、内面ナデ	砂粒少量
第7図	ST1	9	弥生土器	鉢	(9.6)			小型、内弯気味、内外面ナデ、ミガキ	砂粒微量
第7図	ST1	10	弥生土器	鉢	8.4	6.1		小型、尖底、外面タタキ、指頭、内面ナデ、指頭	砂粒少量
第7図	ST1	11	弥生土器	鉢・底部				丸底、体部開く、外面タタキ、内面ナデ	砂粒多量
第7図	ST1	12	弥生土器	鉢・底部				やや小型、尖底気味、外面ハケ、内面ナデ	砂粒多量
第7図	ST1	13	弥生土器	鉢	19.6	11.3	3.6	大型、小さな平底、体部開く、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、口縁内外面ヨコナデ	砂粒少量
第7図	ST1	14	弥生土器	鉢	(16.1)	8.6	3.0	底部丸味を持った小さな平底、体部開く、外面タタキ、ナデ、内面ナデ、ミガキ	小礫少量
第7図	ST1	15	弥生土器	鉢	(14.0)	8.1	1.6	底部小さな平底、体部開く、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	小礫少量
第7図	ST1	16	弥生土器	鉢	10.4	5.5	4.0	小型、平底、体部直立気味、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第7図	ST1	17	弥生土器	鉢	10.7	7.6	4.4	やや小型、平底、体部直立気味、外面タタキ、内面ハケ	砂粒少量
第7図	ST1	18	弥生土器	鉢	13.8	6.8	4.8	平底、体部やや開く、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第7図	ST1	19	弥生土器	鉢	14.1	8.1	3.2	丸味を持った平底、体部丸味、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ハラケズリ、口縁内外面ヨコナデ	砂粒微量
第7図	ST1・No8	20	弥生土器	鉢	14.4	8.2	4.9	平底、体部やや開く、外面タタキ、内面ハケ	小礫多量
第7図	ST1・No7	21	弥生土器	鉢	12.8	7.9	2.4	小さな平底、体部やや直立気味、外面タタキ、内面ハケ	小礫少量
第7図	ST1・No2	22	弥生土器	鉢	19.8	8.6	5.0	平底、体部大きく開く、底部外面ミガキ、外面タタキ、ナデ、内面ナデ、ミガキ	小礫多量
第7図	ST1・No4	23	弥生土器	鉢・底部			2.4	平底、体部やや開く、外面タタキ、内面ナデ	小礫少量
第7図	ST1・No1	24	弥生土器	高坏・坏部	10.6			坏部浅く皿状、脚部欠損、外面ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第7図	ST1	25	土製品	支脚	3.5	5.2	6.2	小型、上部受け部は小さい、外面指頭、ナデ	砂粒少量
第8図	ST1	26	金属製品	鉄鏃	長4.4	幅1.0	重2.0g	主頭状、短茎、断面長方形	鉄
第8図	ST1	27	金属製品	不明鉄製品	長(7.3)	幅(1.3)	重(6.6g)	鉤?、先端部やや幅広、茎断面長方形	鉄

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第9図	ST1・No5	28	石器	砥石	長18.7	幅(7.6)	重850g	1面のみ使用、縦に擦痕	泥岩?
第9図	ST1	29	石器	叩石	長7.9	厚2.8	重214g	側縁に僅かに敲打痕	砂岩
第9図	ST1	30	石器	有溝砥石	長6.4	厚4.4	重57g	1面のみ使用、浅い溝	軽石
第11図	ST2	1	弥生土器	壺	(19.8)			広口壺、口縁開く、口縁端部上下にやや拡張、波状文、 内外面ナデ	砂粒微量
第11図	ST2	2	弥生土器	壺	(17.2)			広口壺、口縁開く、内面は落剥、口縁拡張せず、凹線 状、外面ハケ	砂粒微量
第11図	ST2	3	弥生土器	壺?	(30.2)			広口壺?、口縁開く、一部極僅かに片口状?になり鉢 の可能性もあり、口縁拡張せず、凹線状、内外面ハケ	砂粒微量
第11図	ST2	4	弥生土器	壺・底部			5.6	底部丸底気味、体部丸味、外面ハケ、ミガキ、内面ハケ	小礫少量
第11図	ST2	5	弥生土器	甕	(17.2)			口縁「く」字状に外傾、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、色 調黄褐色	砂粒少量
第11図	ST2	6	弥生土器	甕・胴部			3.0	小さな平底、長胴、外面タタキ、下半ハケ、内面指ナ デ、ハケ	小礫少量
第11図	ST2	7	弥生土器	甕・底部			2.6	小さな平底、長胴、外面タタキ、ハケ、内面指ナデ、ハ ケ	小礫少量
第11図	ST2	8	弥生土器	鉢	11.5	5.9		尖底、口縁開く、内外面ナデ、ミガキ	砂粒少量
第11図	ST2	9	弥生土器	鉢	11.6	8.3		尖底、口縁開く、内外面ハケ	砂粒少量
第11図	ST2	10	弥生土器	鉢	15.3	7.3	3.4	やや小さな平底、体部開く、碗状にやや丸味を持つ、 外面タタキ、内面ハケ	砂粒少量
第11図	ST2	11	弥生土器	鉢	(15.2)			体部やや開き丸味、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	砂粒微量
第11図	ST2	12	弥生土器	鉢	10.4	6.5	3.8	ベタ平底、体部やや丸味、開かない、外面タタキ、ナ デ、内面ハケ	砂粒少量
第11図	ST2	13	弥生土器	鉢	(9.4)			小型、やや丸味、開かない、外面ハケ、ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第11図	ST2	14	土製品	支脚			(7.0)	脚部中空、内外面指頭	小礫少量
第13図	ST3	1	弥生土器	壺	(23.5)			複合口縁壺、口縁大きく拡張、内傾気味に立ち上がる、 内外面ハケ	砂粒微量
第13図	ST3	2	弥生土器	壺	(20.0)			広口壺、口縁大きく開く、口唇上部に拡張、内外面ハ ケ、ナデ	砂粒微量
第13図	ST3	3	弥生土器	壺	(27.0)			広口壺、口縁大きく開く、口唇上に僅かに拡張、内外 面ハケ、ナデ、ミガキ	小礫少量
第13図	ST3	4	弥生土器	壺	(21.1)			広口壺、口縁開く、口唇拡張せず、波状文、口縁内沈線 数条、外面ハケ、内面ナデ	砂粒少量
第13図	ST3	5	弥生土器	壺・頸部		頸部径 (16.4)		大型壺、頸部直立気味に立ち上がる、内外面ハケ、ナ デ	砂粒少量
第13図	ST3	6	弥生土器	甕	(10.1)	9.7	2.6	小型、口縁短く外反、体部やや丸味、底部丸底、底部脇 に焼成前孔径3mm、外面タタキ、ハケ、内面ナデ、ハケ	砂粒微量
第13図	ST3	7	弥生土器	甕	(11.2)			小型、口縁短く外反、体部やや丸味、外面胴部タタキ、 口縁内外ハケ、内面指ナデ、外面落剥	砂粒少量



図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第13図	ST3	8	弥生土器	甕	(9.8)			小型、小さな平底?、口縁短く外反、体部やや丸味、外面胴部タタキ、口縁内外ハケ、内面指ナデ、外面落剥	砂粒少量
第13図	ST3	9	弥生土器	甕	(21.0)			口縁外反、口唇面をなす、肩部なだらか、口縁内外面ナデ、胴部内外面ハケ	砂粒微量
第13図	ST3	10	弥生土器	甕	(18.0)			口縁短く僅かに外反、肩部なだらか、口縁内外面ハケ、ナデ、胴部外面ハケ、内面指ナデ	砂粒微量
第13図	ST3	11	弥生土器	甕	(16.6)			口縁「く」字状に外傾、外面タタキ、ハケ、内面指頭、ハラケズリ	砂粒少量
第13図	ST3	12	弥生土器	甕	(15.0)			口縁「く」字状に外傾、口唇僅かに上下に拡張、口縁ナデ、外面タタキ、ハケ、内面指ナデ	砂粒少量
第13図	ST3	13	弥生土器	甕	(24.6)			口縁「く」字状に外傾、肩部張らず、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	砂粒少量
第13図	ST3	14	弥生土器	甕・胴部			2.1	小さな平底、胴部砲弾形、外面ハケ、ミガキ、内面指ナデ	砂粒少量
第13図	ST3	15	弥生土器	壺・底部			5.1	壺底部?、平底、体部開く、外面ハケ、ミガキ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第13図	ST3	16	弥生土器	壺・底部			6.4	壺底部?、平底、体部やや開く、外面タタキ、ハケ、内面指ナデ	小礫少量
第14図	ST3	17	弥生土器	鉢	11.4	4.2		小型、尖底、体部開く、外面ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第14図	ST3	18	弥生土器	鉢	(9.1)	4.8	2.3	小型、平底、体部やや開く、外面ハケ、ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第14図	ST3	19	弥生土器	鉢	11.2	6.6	2.4	小型、平底、体部やや開く、外面ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第14図	ST3	20	弥生土器	鉢	13.9	6.2	2.5	平底、体部開く、外面ハケ、ナデ、内面ハケ	小礫少量
第14図	ST3	21	弥生土器	鉢	13.5	4.3	2.9	平底、体部大きく開く、外面ナデ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
第14図	ST3	22	弥生土器	鉢	12.7	6.1	3.1	平底、体部開く、外面ナデ、ひび割れ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
第14図	ST3	23	弥生土器	鉢	(12.3)	6.8	2.3	小さな平底、体部やや開く、外面ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第14図	ST3	24	弥生土器	鉢	13.2	6.2	4.0	やや突出した平底、体部開く、碗状、外面ハケ、ナデ、内面ハケ	小礫少量
第14図	ST3	25	弥生土器	鉢・底部				突出した円柱状の小底部、内外面ナデ、ハケ	砂粒微量
第14図	ST3	26	弥生土器	鉢・底部			3.0	やや突出した平底、体部やや丸味、外面ハケ、ナデ、内面ハケ	砂粒微量
第14図	ST3	27	弥生土器	鉢・底部			2.3	小さな平底、体部やや開く、外面ハケ、ナデ、内面ナデ	小礫少量
第14図	ST3	28	弥生土器	鉢・底部			3.7	突出した円柱状の底部、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	砂粒微量
第14図	ST3	29	弥生土器	鉢・底部			5.2	大型、ベタ平底、体部大きく開く、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	小礫少量
第14図	ST3	30	弥生土器	鉢	19.8	10.0		大型、丸底、碗状、内外面ハケ	小礫少量
第14図	ST3	31	弥生土器	鉢	19.6			大型、碗状、内外面ハケ、内面下半指ナデ	砂粒少量
第14図	ST3	32	弥生土器	鉢	(21.4)			大型、体部開く、内外面ヨコハケ、外面タタキ、ハケ、内面ハケ	砂粒少量

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第14図	ST3	33	弥生土器	鉢	(20.8)			大型、体部開く、口唇斜傾、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第14図	ST3	34	弥生土器	鉢	(17.0)			体部やや直立気味、口唇斜傾、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第14図	ST3	35	弥生土器	鉢	(13.3)			体部やや直線的に開く、口唇斜傾、外面タタキ、ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第14図	ST3	36	弥生土器	鉢	(23.4)			大型、体部開く、口唇丸味、口縁内外面ヨコハケ、外面ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第14図	ST3	37	弥生土器	鉢	(11.7)	5.2	3.4	小型、平底、体部開く、外面ナデ、ミガキ、内面ハケ、ミガキ	砂粒少量
第14図	ST3	38	弥生土器	鉢・底部			3.0	底部上げ底状、体部開く、外面ハケ、内面指ナデ	砂粒少量
第14図	ST3	39	弥生土器	鉢	(14.0)			口縁括れ、開く、口唇面取り、外面ハケ、ナデ、内面ハケ、ミガキ	砂粒少量
第14図	ST3	40	弥生土器	鉢	(17.0)			口縁括れ、開く、口唇面取り、内外面ハケ	小礫少量
第14図	ST3	41	弥生土器	鉢	(13.0)			口縁短く僅かに外反、体部直線的、口縁内外面ヨコナデ、ハケ、外面体部ナデ	砂粒少量
第14図	ST3	42	弥生土器	鉢	(20.0)			口縁括れ短く僅かに外反、口唇面取り、口縁内外面ヨコナデ、外面体部ナデ、内面ハケ	小礫少量
第14図	ST3	43	弥生土器	高坏・脚 裾部			(17.8)	裾大きく開く、円形透孔、内外面ナデ、ハケ	砂粒少量
第15図	ST3	44	弥生土器	小型土器	6.1	4.1		手捏ね土器、丸底、口縁開かず、内外面指頭	砂粒少量
第15図	ST3	45	弥生土器	小型土器			2.6	小型壺形土器、底部平底、胴部丸味、頸部くびれる、外面ハケ、内面指頭、指ナデ	砂粒少量
第15図	ST3	46	土製品	土製円盤	径4.1	厚0.5	重10.4g	再利用品、側縁打ちかき、部分的に磨く、孔径0.5cm	砂粒少量
第15図	ST3	47	土製品	土製円盤	径4.4	厚0.7	重12.8g	再利用品、側縁打ちかき、孔径0.5cm	砂粒少量
第16図	ST3	48	石器	叩石	長17.3	幅6.7	重750g	長楕円形、一先端部敲打痕顕著	砂岩
第18図	ST4	1	須恵器	坏蓋	(12.0)	4.0	天井部 6.4	天井部丸味を持たない、未調整、内外面ナデ	精良
第18図	ST4	2	須恵器	坏蓋	(13.0)			口縁丸味、端部丸味、内外面ナデ	精良
第18図	ST4	3	須恵器	坏蓋	(14.2)			口縁丸味、端部丸味、内外面ナデ	精良
第18図	ST4	4	須恵器	坏身	(12.0)			小型、受け部折り返して作出	精良、白色微鈹物粒
第18図	ST4	5	須恵器	坏身	(12.2)			小型、受け部折り返して作出	精良、白色微鈹物粒
第18図	ST4	6	須恵器	高坏・坏 部	(13.7)	坏高4.0		坏部緩やかに立ち上がる、内外面ナデ	精良、白色微鈹物粒

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第18図	ST4	7	須恵器	高坏・坏 部			底径 (4.8)	高坏坏部底部破片、腰部で屈曲する、内外面ナデ	精良
第18図	ST4	8	須恵器	甗・肩部			胴部径 (12.6)	肩部なだらかな、沈線2条巡る、上半に自然釉、内外面 ナデ	白色小礫 少量
第18図	ST4	9	須恵器	甗・胴部			器肉0.9	外面平行タタキ、内面ナデ	白色小礫 少量
第20図	ST5	1	土師器	甗	(17.7)			口縁僅かに外反、口唇やや尖る、口縁内外面ナデ、胴 部タテハケ	小礫多量
第22図	ST6	1	須恵器	甗・肩部				なだらかな肩部、内外面ナデ	精良、白 色微鈹物 粒
第22図	ST6	2	須恵器	高坏・脚 部			裾径7.4	脚部低い、裾やや開き、端部反り、丸味を持つ	精良
第22図	ST6	3	須恵器	甗・胴部				甗の胴部破片か?、内外面タタキ	精良、白 色微鈹物 粒
第22図	ST6・カマ ド	4	土師器	鉢	18.4	5.4	6.6	ロク口整形、酸化炎焼成、平底、体部丸味、器高やや浅 く開く、口唇丸味、底部外面回転ヘラ切り、他は回転 ナデ、色調赤褐色	砂粒少量
第22図	ST6	5	土師器	鉢	(19.0)			口縁僅かにくびれる、口縁内外面ヨコナデ	砂粒微量
第22図	ST6・カマ ド	6	土師器	甗	15.9			口縁「く」字状に僅かに外傾、口唇極僅かに内側に突 出、胴部張らず、口縁外面ナデ、胴部ハケ、口縁内面ハ ケ、体部指頭、ハケ	微白色鈹 物粒石英 多量
第22図	ST6・カマ ド	7	土師器	甗	18.2			口縁「く」字状に外傾、口唇丸味、胴部張らず、口縁内 外面ナデ、胴部ハケ、内面胴部ハケ	砂粒少量
第22図	ST6・ST7	8	土師器	甗・底部			3.5	小さな平底、僅かに上げ底気味、体部余り開かず立ち 上がる、外面ハケ、内面指ナデ、ハケ	砂粒少量
第23図	ST7	1	土師器	甗	(18.2)			口縁「く」字状に外傾、口唇平坦、胴部張らず、内外面 ハケ	小礫少量
第23図	ST7	2	土師器	甗・胴部				器肉7mm、薄い、外面ハケ、内面指ナデ、ハケ	微砂粒少 量
第23図	ST7	3	土師器	甗・胴部				器肉8mm、薄い、外面ハケ、内面指ナデ	小礫少量
第23図	ST7	4	土師器	甗・底部			2.7	小さな平底、体部やや直立気味、内外面ナデ、ハケ	小礫、白 色鈹物粒 少量
第23図	ST7	5	鉄製品	不明鉄製 品	長(5.4)	幅(3.6)	厚0.5	刃部なし、弯曲する	鉄
第26図	ST8	1	土師器	坏	(12.4)			口縁直立気味に開く、器肉薄い、内外面共にヨコナデ	精良
第26図	ST8・カマ ド	2	土師器	甗・胴部				器肉6mm、薄い、外面ハケ、内面指ナデ、ハケ	小礫少量

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第28図	ST9	1	弥生土器	壺	(23.2)			広口壺、口縁開く、口唇拡張せず、内外面ハケ	小礫少量
第28図	ST9	2	弥生土器	壺	(14.0)			広口壺、口縁外反、口縁内波状文、頸部立ち上がる、外面タタキ、ハケ、内面ナデ	小礫少量
第28図	ST9	3	弥生土器	壺	(23.2)			複合口縁壺、口縁大きく、受け口状、表面落剥、波状文、内面ハケ	小礫多量
第28図	ST9	4	弥生土器	壺	(18.5)			広口壺、口縁大きく開く、頸部微隆起帯、内外面ハケ、ナデ	小礫少量
第28図	ST9	5	弥生土器	壺	(9.0)			長頸壺、口縁部僅かに外反、口唇丸味、外面ハケ、ミガキ、口縁内ヨコミガキ	砂粒微量
第28図	ST9	6	弥生土器	壺・肩部			胴部径 (16.2)	長頸壺の肩部破片か、肩部ならぬか、外面ハケ、ミガキ	砂粒微量
第28図	ST9	7	弥生土器	壺・肩部			肩部径 (11.6)	長頸壺の肩部破片か、肩部僅かに張る、外面ハケ、ミガキ、内面ヘラケズリ	砂粒微量
第28図	ST9	8	弥生土器	壺・頸部				壺の頸部、頸部直立気味、口縁部にかけて外反、内外面ハケ	砂粒少量
第28図	ST9	9	弥生土器	壺・底部			3.2	小さな平底、体部開く、内外面ミガキ	砂粒少量
第28図	ST9	10	弥生土器	壺・底部			(9.0)	大きな平底、器肉3cmと厚い、体部大きく開く、外面ハケ、ミガキ、内面指ナデ	小礫多量
第28図	ST9	11	弥生土器	壺・底部			7.7	大きな平底、器肉2cmと厚い、体部開く、外面タタキ、ハケ、ナデ、内面ハケ、ナデ	小礫多量
第28図	ST9	12	弥生土器	甕	(24.3)			口縁「く」字状に強く外傾、口唇面になる、内外面ハケ	砂粒微量
第28図	ST9	13	弥生土器	甕	(11.5)			小型、口縁短く緩やかに外反、口唇面になる、口縁内外面ハケ、胴部外面ハケ、内面ヘラケズリ	砂粒微量
第28図	ST9	14	弥生土器	甕・胴部				胴部破片、線刻、木の葉状?	砂粒少量
第28図	ST9	15	弥生土器	甕	15.1			口縁「く」字状に外傾、外面タタキ、ハケ、内面指頭、ヘラケズリ	砂粒少量
第28図	ST9	16	弥生土器	甕・底部			2.0	小さな平底、体部余り開かない、外面タタキ、内面指ナデ	小礫少量
第28図	ST9	17	弥生土器	甕・底部			5.6	ベタ平底、壺の可能性もあり、体部開く、外面ハケ、ナデ、内面指ナデ	小礫多量
第28図	ST9	18	弥生土器	鉢	(18.8)	8.5	3.2	大型、体部丸味、底部やや平底、外面タタキ、ハケ、ナデ、内面ハケ	小礫少量
第28図	ST9	19	弥生土器	鉢	(17.2)	8.8		大型、丸底、体部丸味、口唇ナデで僅かにくびれる、口縁内外面ヨコナデ、内外面ハケ	砂粒少量
第28図	ST9	20	弥生土器	鉢	(19.8)			大型、体部丸味、口唇小さく平坦、口縁内外面ヨコナデ、外面指頭、ミガキ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
第28図	ST9	21	弥生土器	鉢	(15.4)	6.4	3.3	口縁開く、体部下半丸味、底部突出した小さな平底、外面ナデ、内面ハケ	砂粒少量
第29図	ST9	22	弥生土器	鉢	(11.8)	6.4	3.5	平底、体部余り開かない、外面下半タタキ、上半タタキ、ハケ、ひび割れ多数、内面ナデ、ハケ	砂粒少量

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第29図	ST9	23	弥生土器	鉢	(12.2)	7.3		体部やや直線的に開く、丸底、深い、口縁内外面ヨコナデ、外面指頭、ナデ、内面指ナデ、ハケ	小礫少量
第29図	ST9	24	弥生土器	鉢	(14.0)			体部やや直線的に開く、深い、口縁内外面ヨコナデ、外面指頭、ナデ、内面指ナデ	小礫少量
第29図	ST9	25	弥生土器	鉢	(10.7)			小型、体部やや直線的に開く、口縁内外面ヨコナデ、外面指頭、ナデ、内面指ナデ、ハケ	小礫少量
第29図	ST9	26	弥生土器	鉢	(9.2)			小型、体部やや直線的に立ち上がる、外面指頭、タタキ、ハケ、ナデ、内面ハケ	砂粒微量
第29図	ST9	27	弥生土器	鉢・底部			3.1	僅かに突出した平底、体部やや開く、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	砂粒微量
第29図	ST9	28	弥生土器	鉢・底部			3.0	突出した平底、体部開く、外面ナデ、内面ハケ	小礫少量
第29図	ST9	29	弥生土器	鉢・底部			3.3	小さな平底、体部開く、内外面ハケ	小礫少量
第29図	ST9	30	弥生土器	高坏	(15.4)	坏高5.5		皿状の坏部、口縁内外面ヨコナデ、体部内外面ハケ	小礫少量
第29図	ST9	31	弥生土器	高坏	(18.4)	坏高6.3		皿状の坏部、口唇部に沈線、口縁内面ヨコナデ、体部内外面ミガキ	精良
第29図	ST9	32	弥生土器	高坏	(11.9)	坏高6.0		碗状の坏部、やや深い、内外面ミガキ	精良
第29図	ST9	33	弥生土器	高坏・脚部				接合部絞り、裾開く、円形透孔、外面ハケ、内面指ナデ	小礫少量
第29図	ST9	34	弥生土器	小型土器	(2.0)	3.55	0.8	小型甕形土器、口縁丸味、頸部くびれる、肩部やや張る、底部平底、内面指頭、外面頸部ハケ、胴部指頭、ナデ	砂粒少量
第31図	ST10	1	弥生土器	壺	(17.6)			広口壺、口縁外反、口唇面、口縁内外ナデ、内外面ハケ	小礫少量
第31図	ST10	2	弥生土器	壺	(14.6)			複合口縁壺?、内傾、受け口状、内外面ハケ	砂粒微量
第31図	ST10	3	弥生土器	壺	(11.8)			直口壺?、口縁直線的にやや開く、口唇内外面ヨコナデでやや口唇尖る、内外面ハケ	小礫少量
第31図	ST10	4	弥生土器	壺・底部			5.2	丸底気味の平底、器肉厚い、外面タタキ、ナデ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
第31図	ST10	5	弥生土器	甕・底部			(4.2)	やや小さな平底、体部余り開かず下半は丸味、器肉やや厚い、外面ハケ、内面指ナデ	小礫多量
第31図	ST10	6	弥生土器	鉢	20.3	10.4		大型、やや尖り気味の丸底、碗状、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ、ミガキ	小礫多量
第31図	ST10	7	弥生土器	鉢	(19.5)			大型、体部余り丸味を持たず開く、碗状、外面タタキ、ハケ、内面ハケ、ナデ	砂粒少量
第31図	ST10	8	弥生土器	鉢	17.0	6.9	2.5	大型、僅かに平底、体部開く、口縁僅かに直立気味、碗状、口縁内外面ヨコナデ、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	小礫多量
第31図	ST10	9	弥生土器	鉢	17.1	6.8	4.5	大型、ほぼ丸底、口縁直線的に開く、外面タタキ、指頭、ハケ、内面ナデ、ハケ	小礫多量
第31図	ST10	10	弥生土器	鉢	(17.7)			大型、口縁開く、口唇平坦、外面ハケ、内面ナデ	砂粒少量
第31図	ST10	11	弥生土器	鉢	(16.4)			体部丸味を持つ、口縁内外面ヨコナデ、体部ハケ	小礫微量

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第31図	ST10	12	弥生土器	鉢	(12.2)	6.5	5.6	体部丸味、碗状、底部厚く平底、外面ナデ、内面ハケ	小礫少量
第31図	ST10	13	弥生土器	鉢	(7.3)	5.1	2.4	小型、体部丸味、口縁内弯、碗状、平底、外面ハケ、内面ナデ	小礫少量
第31図	ST10	14	弥生土器	鉢	7.5	4.1	2.5	小型、平底、体部開く、外面ナデ、ミガキ、内面ハケ	小礫微量
第31図	ST10	15	弥生土器	鉢・底部			1.8	底部尖底気味、体部大きく開く、大型鉢の底部か、外面タタキ、内面ナデ	小礫、白色鉱物粒多量
第31図	ST10	16	弥生土器	鉢・底部			3.5	平底、体部やや丸味、外面ナデ、内面ハケ、ナデ	砂粒微量
第31図	ST10	17	弥生土器	鉢・底部			1.9	小さな平底、体部余り開かない、外面ハケ、ミガキ、内面ナデ	小礫少量
第31図	ST10	18	弥生土器	鉢・底部			3.2	僅かに突出した平底、体部やや開く、外面タタキ、ナデ、内面ハケ	小礫少量
第31図	ST10	19	弥生土器	鉢・底部			3.5	僅かに突出した平底、木葉痕、体部開く、外面タタキ、ナデ、内面ナデ	砂粒少量
第31図	ST10	20	弥生土器	鉢・底部				尖底、体部丸味、体部開かない、外面ハケ、内面ナデ	砂粒少量
第31図	ST10	21	弥生土器	台付き鉢				低い脚がつく、鉢は頸部でくびれ、口縁直線的に広がる、器肉薄い、外面ナデ、ミガキ、内面ハケ、ナデ	小礫少量
第31図	ST10	22	弥生土器	高坏・脚部			脚裾径 10.8	坏部欠損、脚部裾直線的に広がる、内面絞り、ヘラケズリ、ナデ、ハケ、外面タタキ、ハケ、ナデ	小礫少量
第31図	ST10	23	土製品	支脚			7.9	中空、裾際やや広げる、外面タタキ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
第31図	ST10	24	土製品	支脚			7.5	中空、裾際やや広げる、外面タタキ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
第31図	ST10	25	土製品	支脚			8.4	中空、裾直線的に広げる、外面ハケ、内面ナデ、ハケ	小礫多量
第31図	ST10	26	弥生土器	線刻土器				胴部破片、線刻、題材不明	小礫少量
第31図	ST10	27	弥生土器	線刻土器				胴部破片、線刻、題材不明	小礫少量
第31図	ST10	28	弥生土器	線刻土器				胴部破片、線刻、題材不明	小礫少量
第32図	ST10	29	土製品	土製円盤	径4.9	厚1.2	重23g	焼成前円孔、孔径1.1cm、内外面ナデ	砂粒少量
第32図	ST10	30	石器	砥石	長7.2	幅5.1	重34g	板状、表面のみに擦痕、全側縁折断	粘板岩
第32図	ST10	31	石器	磨石	長10.9	幅7.1	重660g	スタンプ状、一端部平坦、摩耗が明確	砂岩
第46図	SB2・P7	1	須恵器	坏	(10.8)			口縁僅かに外傾気味、腰部やや屈曲	精良、白色微鉱物粒
第46図	SB2・P1	2	土師器	坏・底部			(5.6)	底部回転ヘラ切り	精良
第46図	SB4・P2	1	土師器	坏	(12.6)			口縁直線的に僅かに開く、内外面ナデ	砂粒少量
第46図	SB5・P1	1	土師器	高坏・脚部			(18.6)	裾大きく開く、円形透孔、器肉5mm、外面ハケ、ミガキ、内面細かい丁寧なハケ	精良
第46図	SB6・P2	1	土師器	坏	(10.2)			細片、口縁僅かに開く、内外面ナデ	精良
第46図	SB7・P3	1	土師器	碗・底部			(7.2)	円盤状高台、底部回転糸切り、体部開く、内外面口クロナデ	精良

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第46図	SB7・P3	2	土師器	碗・底部			(7.0)	円盤状高台、やや摩耗、底部回転糸切り、体部開く、内外面ロクロナデ	精良
第46図	SB7・P11	3	土師器	坏	12.6	3.0	8.4	平底、底部回転ヘラ切り、体部直線的に外傾、体部内外面ロクロナデ、内面底回転ロクロ渦巻き	精良
第46図	SB7・P4	4	須恵器	壺・底部			(11.4)	壺か鉢の底部か、平底、腰部丸味、体部やや開き気味、内外面ナデ	精良、白色微鈹物粒
第46図	SB7	5	須恵器	甕・胴部				大型、外面格子タタキ、内面渦巻きタタキ	精良、白色微鈹物粒
第46図	SB8・P7	1	土師器	皿	(18.4)			体部僅かに丸味、内外面共にナデ	砂粒微量
第46図	SB8・P5	2	須恵器	坏蓋	(16.8)			端部折り返す、天井部ヘラケズリ、平坦	砂粒微量
第46図	SB8・P7	3	須恵器	壺・底部			(10.4)	二重高台のような付け高台、腰部余り丸味を持たず、体部立ち上がる、No4と同一か	砂粒微量
第46図	SB8・P7	4	須恵器	壺・肩部				肩部屈曲する、沈線1条、肩部径17.6cm、内外面回転ナデ、No3と同一か	砂粒微量
第46図	SB8・P4	5	須恵器	甕・胴部				外面格子タタキ、ハケ、内面渦巻きタタキ	精良、白色微鈹物粒
第47図	SB9・P2	1	土師器	坏	(16.7)			腰部僅かに屈曲、内外面ナデ、色調黄褐色	精良
第47図	SB9・P2	2	土師器	坏	(12.2)			口縁直線的に開く、外面ロクロ目顕著	精良
第47図	SB9・P2	3	土師器	甕	(19.2)			口縁外反、口唇摘み上げる、肩部張らない、口縁内外面ナデ、胴部ハケ	砂粒少量
第47図	SB9	4	弥生土器	蓋	4.1			混入品、蓋上端やや凹み、ミガキ、裾部開く、内面ハケ、外面ナデ	砂粒少量
第47図	SB9・P3	5	須恵器	甕・胴部				器肉8mm、外面平行タタキ、内面同心円タタキ	微砂粒少量
第47図	SB10・P3	1	土師器	坏	(12.0)			口縁僅かに内弯気味に開く、内外面ナデ	精良
第47図	SB10・P5	2	土製品	置き竈	胴径 (31)			突帯が巡る、部位は不明、内面縄目タタキ、外面指頭	小礫少量
第47図	SB10・P4	3	須恵器	壺・肩部				壺?、肩部?、外面ハケ状調整、内面ナデ	白色鈹物粒少量
第47図	SB10	4	須恵器	高坏・脚部				坏部欠損、脚部裾広がる	白色鈹物粒微量
第47図	SB11・P3	1	土師器	坏	(11.4)			口縁僅かに内弯気味に開く、内外面ナデ、外面ミガキ	微砂粒少量
第47図	SB11・P1	2	須恵器	鉢	(28.6)			口縁内弯気味、内外面ロクロナデ	白色鈹物粒少量



図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第47図	SB13・P1	1	須恵器	坏蓋	(9.5)	2.1		ゆがみ、宝珠状鈕、天井部回転ヘラケズリ、かえり	白色鈳物 粒微量、 小黒斑
第47図	SB14・P4	1	須恵器	坏蓋				天井部回転ヘラケズリ	精良
第50図	SG1-ST2	1	弥生土器	壺	14.0	32.3	5.4	二重口縁、受け口状、口縁半分程欠損、体部丸味、底部 やや丸味のある平底、外面タタキ、ハケ、内面口縁ハ ケ、体部ナデ、ハケ	小礫多量
第50図	SG2-ST1	1	弥生土器	壺・胴部				口縁、底部欠損、残存高54.5cm、最大径58cm、体部丸 味、外面タタキ、ナデ、ミガキ、内面粗いハケ	小礫多量
第56図	SK10	1	磁器	青磁蓮弁 文碗				線描き蓮弁文	精良
第56図	SK10	2	土器	坏	(11.4)			体部直線的に僅かに開く、外面ロクロ目、内面ナデ	微砂粒微 量
第56図	SK10	3	土器	坏・底部			(7.2)	底部回転ヘラ切り、体部開く、内面底ロクロ渦巻き 痕、中心部へそ状に突起する	精良
第56図	SK10	4	土器	坏・底部			6.5	底部回転ヘラ切り、体部外反気味、内面底ロクロ渦巻 き痕、体部内外面共にナデ	砂粒微量
第56図	SK10	5	瓦質土器	手焙り	(26.0)			体部丸味、口縁内に突出、口唇平坦、底部平底?	雲母多 量、白色 鈳物粒少 量
第56図	SK15	1	石製品	勾玉	全長2.3	厚0.9	重2.9g	頭部に穿孔、頭部、尾部が屈曲、全体を研磨、節理部発 達、黒褐色と乳白色の縞模様	瑪瑙?
第56図	SK15	2	ガラス製 品	小玉				破碎、緑色と黄色、マーブルか	ガラス
第56図	SK15-No 5、8	3	須恵器	坏蓋	11.4	3.5	天井部 8.4	小型、全体的に丸味、天井部回転ヘラ切り、平ら、内面 ロクロ目、焼成不良か?	微砂粒少 量
第56図	SK15-No8	4	須恵器	坏	11.8	3.7		小型、完形、丸底気味、底部回転ヘラ切り、短いかえり 外反気味、内外面回転ナデ	白色鈳物 粒微量
第56図	SK15-No2	5	土師器	坏	(17.0)			体部丸味を持つ、口唇、口縁外面ヨコナデ、体部内面 ナデ、外面落剥?	小礫少量
第56図	SK15-No6	6	須恵器	高坏				残存高8.3cm、全ての端が欠損、摩耗、坏部皿状に大き く開く、脚部透かしなし	微白色鈳 物粒多量
第56図	SK15-No4	7	須恵器	台付き長 頸壺		(15.5)	8.9	頸部欠損、肩部張らず、自然袖、胴部上方屈曲、沈線1 条、下半丸味を持ってすぼまる、台部広がり、端部か えり状、体部下半ヘラケズリ、他は回転ナデ	白色小礫 少量
第56図	SK15	8	動物遺存 体	骨片				白色骨片	骨
第56図	SK24	1	須恵器	坏	(15.8)			体部丸味、口唇丸味、内外面ロクロ目	精良
第56図	SK24	2	土師器	坏・底部			(6.6)	底部回転ヘラ切り、体部開く、内外面回転ナデ	精良

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第56図	SK27	1	陶磁器	青磁碗・ 底部			(6.6)	見込みに陰刻、不明、釉厚い、深緑色	灰白色、 精良
第56図	SK27	2	土器	小皿	6.9	1.8	4.7	底部回転糸切り、箕子状圧痕、体部短く開く	精良
第56図	SK27	3	土器	坏	(13.7)	4.2	(7.1)	底部回転糸切り、体部外傾気味に開く、深い、外面ロ クロ目、内面ナデ	精良
第56図	SK27	4	土器	坏	(12.4)			体部外傾気味に開く、外面ロクロ目、内面ナデ	精良
第56図	SK27	5	土器	坏・底部			(5.7)	底部回転糸切り、外面ロクロ目、内面ナデ、内面底中 央凹む	精良
第56図	SK27	6	土器	坏・底部			(7.9)	底部回転糸切り、腰部丸味、内外面ナデ	精良
第59図	SK33	1	弥生土器	甕	(17.6)			口縁「く」字状に外傾、口縁内外面ハケ、胴部外面タタ キ、ハケ、内面ヘラケズリ	小礫少量
第59図	SK33	2	弥生土器	甕・胴部				胴部下半、No.1 と同一個体の可能性有り、外面タタ キ、ハケ、内面ヘラケズリ	小礫少量
第59図	SK33	3	弥生土器	鉢	(23.3)	10.2		大型、丸底、体部大きく開く、口縁内外面ヨコナデ、内 外面上半ハケ、内外面下半ミガキ	小礫多量
第59図	SK33	4	弥生土器	鉢	(8.1)	3.9		小型、丸底、体部下半丸味、口縁直立気味、全体を指 頭、部分的上半にハケ	雲母、白 色鉱物粒 少量
第59図	SK33	5	弥生土器	鉢・底部			3.8	平底、体部余り開かない、内外面ハケ、外面ひび割れ	小礫少量
第59図	SK33	6	弥生土器	鉢・底部			2.1	小さな高台状の底部、体部大きく開く、内外面共にハ ケ	小礫少量
第59図	SK34	1	土師器	坏・底部			(8.0)	高台、内面ロクロ目	精良
第59図	SK38	1	須恵器	壺・口縁	(13.0)			壺の口縁か?、直線的に外傾する、内外面ロクロナデ、 黒色斑点	精良
第59図	SK38	2	須恵器	坏	(13.8)			体部僅かに丸味を持ち開く、内外面ロクロナデ	精良
第59図	SK38	3	土師器	皿	(14.1)	1.7	(9.6)	底部回転ヘラ切り、体部大きく開く、内外面共ロクロ ナデ	精良
第59図	SK38	4	土師器	坏	(14.8)	3.1	(8.5)	盤状、底部回転ヘラ切り、体部外反、口唇内面沈線、内 外面共にミガキ、赤褐色	精良
第59図	SK38	5	土師器	坏	(17.2)	6.2	(10.3)	高台付、高台断面四角、底部端に付く、体部直線的に 外傾、内外面共にミガキ	砂粒微量
第59図	SK38	6	土師器	坏・底部			(10.6)	高台付、高台断面四角、底部端に付く、体部直線的に 外傾、内外面共にミガキ	砂粒微量
第61図	SD1	1	須恵器	坏	(14.0)			直線的に外傾する、外面ロクロ目、内面ナデ	精良
第61図	SD4	1	土師器	碗・底部			(6.8)	底部切り離し不明、円盤状底部、体部開く、内面ロク ロ目	微砂粒微 量
第61図	SD4	2	土師器	碗・底部			(8.0)	高台付、底部基筒底状、摩耗	微砂粒少 量
第61図	SD7	1	須恵器	甕	(18.4)			大きく外反、内面に自然釉?、肩部近くにも	乳灰白 色、精良

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第61図	SD7	2	土器	羽釜・鍔				鍔径32.4cm、大きな反り気味の鍔、内外面ナデ	微破砕砂 粒多量
第61図	SD8	1	須恵器	壺	(19.2)			口縁やや短く外傾、肩部余り張らない、口縁内外面ナ デ、体部外面平行タタキ、内面波状タタキ、小黒色斑 点	精良
第61図	SD9	1	土器	坏	(12.2)			僅かに丸味を持って立ち上がる、外面ロクロ目、内面 ナデ	精良
第61図	SD9	2	土器	坏・底部			(4.6)	外面ロクロ目顕著、内面ナデ	精良
第61図	SD14	1	土師器	坏	(12.8)			僅かに外反、内外面ロクロナデ	精良
第61図	SD30	1	弥生土器	小型土器			3.6	手捏ね、脚やや開く、外面指頭圧痕、内面ナデ	砂粒少量
第61図	SD30	2	弥生土器	高坏・脚 部				坏部欠損、裾部大きく開く、透かし孔、外面ミガキ、内 面ナデ	小礫少量
第61図	SD30	3	石器	石包丁	長11.2	幅4.9	重57.2	磨製を打製に転用、刃部打製で作出、両端部浅い挟入 部	緑色変岩
第61図	SD37	1	緑釉陶器	皿	(11.7)			体部開く、口縁僅かにくびれる、外面ロクロ目、淡緑 色の釉	精良
第61図	SD39	1	土師器	碗・底部			(8.0)	高台付、体部開く、内面ロクロ目	精良
第61図	SD39	2	土師器	碗・底部			(7.2)	高台付、体部開く、内外面ナデ	精良
第61図	SD40	1	土師器	碗・底部			(7.0)	底部回転糸切り、体部開く、内面ロクロ目	微砂粒微 量
第61図	SD45	1	須恵器	坏	(12.4)	3.6	(9.0)	底部切り離し不明、ナデ、体部やや丸味、内外面ロク ロナデ	精良
第62図	C8-9- 18-P1	1	土師器	坏	(10.2)	(3.3)	(6.8)	腰折れ状、底部出っ尻気味、内外面ロクロナデ	精良、白 色微鋳物 粒
第62図	C8-9- 19-P1	1	土師器	坏	10.5	3.8	7	底部回転ヘラ切り、底部出っ尻気味、体部直立気味、 内面底ロクロ渦巻き、表面落剥整形不明	精良、白 色微鋳物 粒
第62図	C8-9- 19-P1	2	土師器	皿	(9.5)	1.6	(5.8)	器高低く、体部大きく開く、表面落剥整形不明	精良、白 色微鋳物 粒
第62図	C8-9- 19-P2	1	土師器	坏	(10.0)	2.9	(7.4)	底部出っ尻気味?、体部外反気味、表面落剥整形不明	微砂粒少 量
第62図	C8-9- 22-P1	1	土師器	坏	(10.2)	3.1	(6.8)	底部回転ヘラ切り、底部出っ尻気味、体部外反気味、 体部内外面ロクロ目、内面底ロクロ渦巻き	微砂粒少 量
第62図	C8-9- 23-P1	1	土師器	皿	(9.6)	1.55	(6.4)	器高低く、体部大きく開く、表面落剥整形不明	精良
第62図	C8-9- 23-P4	1	土師器	坏	(9.8)	3.0	(6.4)	底部回転ヘラ切り?、体部外傾気味、内外面ロクロナ デ	精良

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第62図	C8-9- 24-P1	1	黒色土器	碗	(13.4)			体部丸味、内面のみ黒色処理、外面ロクロ目、内面ミガキ	精良、微雲母微量
第62図	C8-9- 24-P1	2	土師器	皿	(11.4)	1.6	(8.6)	折り縁状口縁、底部回転ヘラ切り?、内外面ロクロナデ	精良、白色微鈹物粒
第62図	C8-9- 24-P3	1	土師器	皿	(9)	1.4	(6.9)	器高低い、底部回転ヘラ切り?、内外面ロクロナデ	精良、白色微鈹物粒
第62図	C8-9- 24-P3	2	土師器	皿	(11.2)	1.7	(7.8)	器高低い、底部回転ヘラ切り?、内外面ロクロナデ	精良
第62図	C8-9- 24-P3	3	土師器	坏	(9)	2.9	(6.2)	底部回転ヘラ切り、底部出っ尻気味、体部外傾気味、体部内外面ロクロ目、内面底ロクロ渦巻き	精良、微雲母微量
第62図	C8-9- 24-P3	4	土師器	台付皿	10.1	2.8	皿7.4、 高台6.2	台付き、皿部器高低く開く、台裾僅かに開く、内外面ロクロナデ	精良、白色微鈹物粒
第62図	C8-9- 24-P3	5	土師器	台付皿・ 台部			(15.5)	台付き皿?、大型皿?、台部僅かに開き、内外面ロクロナデ	砂粒少量
第62図	C8-9- 24-P3	6	石器	石核	長7.3、 幅3.9、 厚3.2		重102.7	船底、甲板面平ら、打面は転移、規則性はない、燧石の石核か?	チャート
第62図	C8-9- 24-P4	1	土師器	皿	10.7	2.0	6.8	底部回転ヘラ切り、器高低い、体部大きく開く、内外面ロクロ目	精良
第62図	C8-9- 24-P4	2	土師器	坏	(10.4)	3.2	6.6	底部回転ヘラ切り、底部出っ尻気味、体部外傾気味、体部内外面ロクロ目、内面底ロクロ渦巻き	精良
第62図	C8-9- 24-P4	3	土師器	碗	(15.0)	4.9	(8.2)	体部大きく開く、表面落剥、整形不明、器肉薄い、色調淡灰黄色	精良
第62図	C8-12- 15-P2	1	土師器	坏	(12.6)	3.1	7.4	体部外反気味、内外面ロクロナデ、内面底ロクロ渦巻き?	精良
第62図	C8-12- 21-P2	1	瓦	平瓦	厚2.1			凸凹面布目	精良
第62図	C8-13- 5-P4	1	土師器	坏	11.9	3.7	6.3	底部回転糸切り、腰部丸味、体部開き気味、外面ロクロ目、内面ロクロナデ、内面底部ロクロ渦巻き	精良
第62図	C8-13- 6-P3	1	黒色土器	碗				内面のみ黒色処理、内面ミガキ	精良、微雲母微量
第63図	C8-13- 7-P3	1	土師器	碗・底部			(7.8)	円盤状高台、底部回転糸切り、体部開く、外面ロクロ目、内面ナデ	精良
第63図	C8-13- 7-P4	1	須恵器	坏	(12.0)	5.7	(6.6)	口径小、口縁僅かに外反、底部回転ヘラケズリ	精良、白色微鈹物粒少量
第63図	C8-13- 8-P2	1	黒色土器	碗	(18.2)			内外面黒色処理、ミガキ、体部僅かに内弯気味、口唇内沈線	精良、微雲母少量

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第63図	C8-13- 10-P3	1	土師器	台付皿	14.8	3.4	皿10、 高台8.7	台付き、皿部器高低く開く、台裾直立、内外面ロクロナデ	精良
第63図	C8-13- 10-P8	1	土師器	碗・底部			(7.6)	円盤状高台、底部回転ヘラ切り、体部開く、内外面ロクロナデ	精良
第63図	C8-13- 14-P3	1	土師器	坏	(10.7)	2.9	(5.8)	底部回転ヘラ切り、体部外傾、内外面回転ナデ	精良
第63図	C8-13- 19-P1	1	弥生土器	壺				口縁、底部欠損、頸部直立、肩部なだらか、外面タタキ、ハケ、内面ナデ、ハケ	小礫少量
第63図	C8-13- 20-P4	1	土師器	台付皿	(11.7)	(2.0)	皿8.4、 高台 (6.2)	台付き、皿部器高低く開く、台裾直立?、内外面ロクロナデ	精良
第63図	C8-13- 20-P5	1	土師器	皿	(10.1)	1.7	(6.2)	底部回転ヘラ切り、器高低い、体部開く、内外面ロクロナデ	精良、白色微鈹物粒微量
第63図	C8-13- 25-P16	1	土師器	坏	(10.4)	3.5	7.1	底部回転ヘラ切り?、底部出っ尻気味、体部外傾気味、内面底ロクロ渦巻き、表面落剥整形不明	小礫少量
第63図	C8-14- 3-P1	1	土師器	皿	(15.0)	1.6	(12.0)	底部回転ヘラ切り?、器高低い、体部開く、内外面ロクロナデ	微砂粒微量
第63図	C8-14- 4-P8	1	土師器	坏	(11.6)	2.6	7.1	底部回転ヘラ切り?、器高やや低い、体部開く、外面ロクロ目、内面ロクロナデ	精良
第63図	C8-14- 8-P9	1	瓦器	碗	(12.6)			内弯気味、口唇尖り気味、内外面ナデ、内外面灰黒色	微砂粒少量
第63図	C8-17- 5-P2	1	土師器	皿	(9.4)	1.8	(5.4)	器高低い、体部外傾、表面摩耗、内外面ロクロナデ?	白色微鈹物粒微量
第63図	C8-17- 5-P7	1	土師器	皿	7.3	1.5	7.0	丸底、口縁短く立ち上がる、底部回転ヘラ切り後ナデ、体部内外面ナデ	精良
第63図	C8-17- 8-P8	1	土師器	皿	(13.3)			丸底、体部丸味、口縁強くナデ立ち上がる、底部回転ヘラ切り後ナデ?、体部内外面ナデ	精良
第63図	C8-17- 10-P4	1	土師器	皿	(7.6)	1.3	(5.0)	丸底、口縁外傾、底部回転ヘラ切り後ナデ?、体部内外面ナデ	精良
第63図	C8-17- 12-P1	1	土師器	高台付碗			8.5	やや足長の高台、高台やや反る、碗部底部回転ヘラ切り、内外面ナデ、碗底部内面ロクロ渦巻き	精良
第63図	C8-17- 13-P3	1	瓦	平瓦	厚2.4			凸凹面布目、摩耗	精良
第63図	C8-18- 3-P3	1	土器	小壺	4.7	4.1	5.8	短頸小壺、底部回転糸切り、外面煤付着	精良
第63図	C8-18- 7-P4	1	土師器	皿	(13.6)	3.2	(7.4)	丸底、体部丸味、口縁強くナデ、緩やかに開く、底部回転ヘラ切り後ナデ?	精良
第68図	SX1	1	須恵器	長頸壺	(8.0)			頸部外反、口縁端部上方に摘み上げる	精良

図版 番号	遺構名・ 取り番号	遺物 番号	種別	器種・ 部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径、 重(g)	特徴	胎土、 材質
第68図	SX1	2	須恵器	甕・胴部				外面平行タタキ、ハケ、内面波状タタキ	白色鈹物 粒少量
第68図	SX2	1	磁器	染付け小 碗・底部			(3.1)	小型、腰部に界線、外面絵付け不明、艶あり、畳付釉ハギ	白色、精 良
第68図	SX2	2	磁器	染付け皿	(13.7)	3.6	(6.8)	外面見込み内絵付け、界線、艶あり、畳付釉ハギ	白色、精 良
第68図	SX2	3	陶器	碗・底部			4.8	丸碗、透明釉、貫入、畳付釉ハギ	乳白色、 精良
第68図	SX2	4	磁器	徳利			6.1	染付け、碁笥底、帯状の絵付け2条、畳付釉ハギ	乳白色、 精良
第68図	SX2	5	陶器	大皿・底 部			9.5	焼き締め、見込み内白色化粧掛け、外面釉垂れ	赤褐色、 微白色鈹 物粒
第68図	SX2	6	瓦質土器	手焙り				箱形、隅に円柱状の短い脚	灰白色、 精良
第68図	SX3	1	須恵器	甕・胴部				外面平行タタキ、内面波状タタキ、器肉7mm	精良
第68図	SX3	2	土師器	甕・胴部				胴頸部、肩部張らず、頸部粗いヨコハケ、胴部斜ハケ、内面ナデ、外面煤付着	砂粒微量
第68図	SX3	3	土師器	甕・胴部				外面細かいハケ、内面ナデ	白色鈹物 粒多量
第68図	SX5	1	須恵器	坏・底部			(7.8)	高台断面方形、やや内側に付く	白色鈹物 粒微量、 精良
第68図	SX5	2	須恵器	甕・胴部				外面平行タタキ、内面波状タタキ	白色鈹物 粒微量、 精良
第68図	SX5	3	土師器	坏	(13.2)	3.2		底部回転ヘラ切り、体部外反気味、体部外面ロクロ目、内面回転ナデ	精良
第68図	SX5	4	土師器	甕	(16.4)			口縁外反、内外面ハケ	砂粒微量
第68図	SX5	5	土師器	坏・底部			(6.6)	底部回転ヘラ切り、内外面回転ナデ、内面中央凹む	微砂粒少 量
第68図	SX5	6	土師器	坏・底部			(9.2)	底部回転ヘラ切り、底部脇僅かに突出、体部開く、内外面回転ナデ、内面中央凹む、内外面赤褐色	精良
第68図	SX5	7	土師器	坏・底部			(5.7)	底部回転ヘラ切り、体部開く、内外面回転ナデ、内面中央凹む、摩耗	精良
第68図	SX5	8	土師器	坏・底部			(8.0)	高台、体部開く、内外面回転ナデ	精良
第68図	SX5	9	土師器	甕	(17.3)			口縁短く受け口状に立ち上がる、口唇上方に摘み上げる、肩部張らず、外面ナデ、内面ハケ	砂粒少量

# 写真図版







Ⅶ区空撮・南より



Ⅶ区空撮・西より



写真2



Ⅶ区空撮・西より・合成写真





VI-2区空撮・南より



VI-1区空撮・南より



写真4



Ⅶ-2区全景・東より



Ⅶ-1区全景・西より





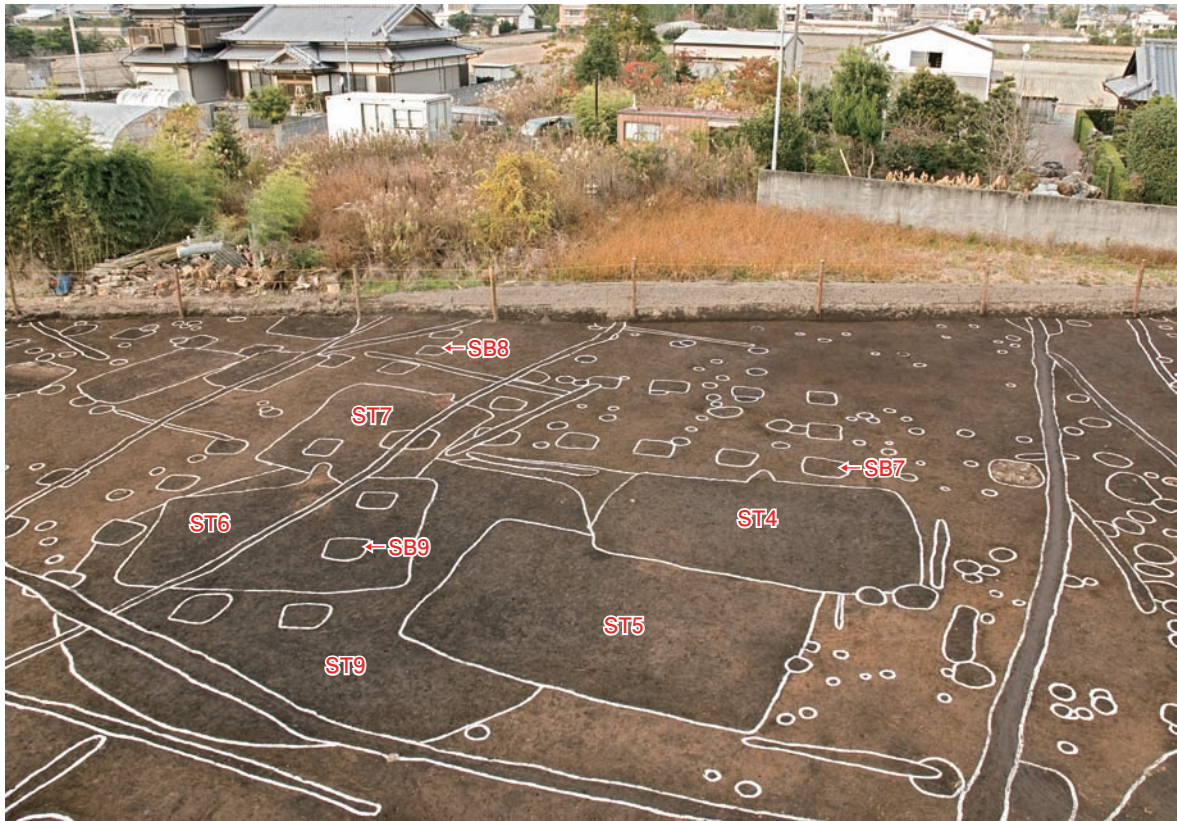
Ⅶ-1 南区全景・東より



Ⅶ-2 区検出・東より



写真6



Ⅶ-2区中央部検出・南より



Ⅶ-1区検出・東より





Ⅶ区 ST1・南より



Ⅶ区 ST1・土層・東より



写真8



Ⅶ区 ST2・南より



Ⅶ区 ST2・南南西より



Ⅶ区 ST2・土層・南西より

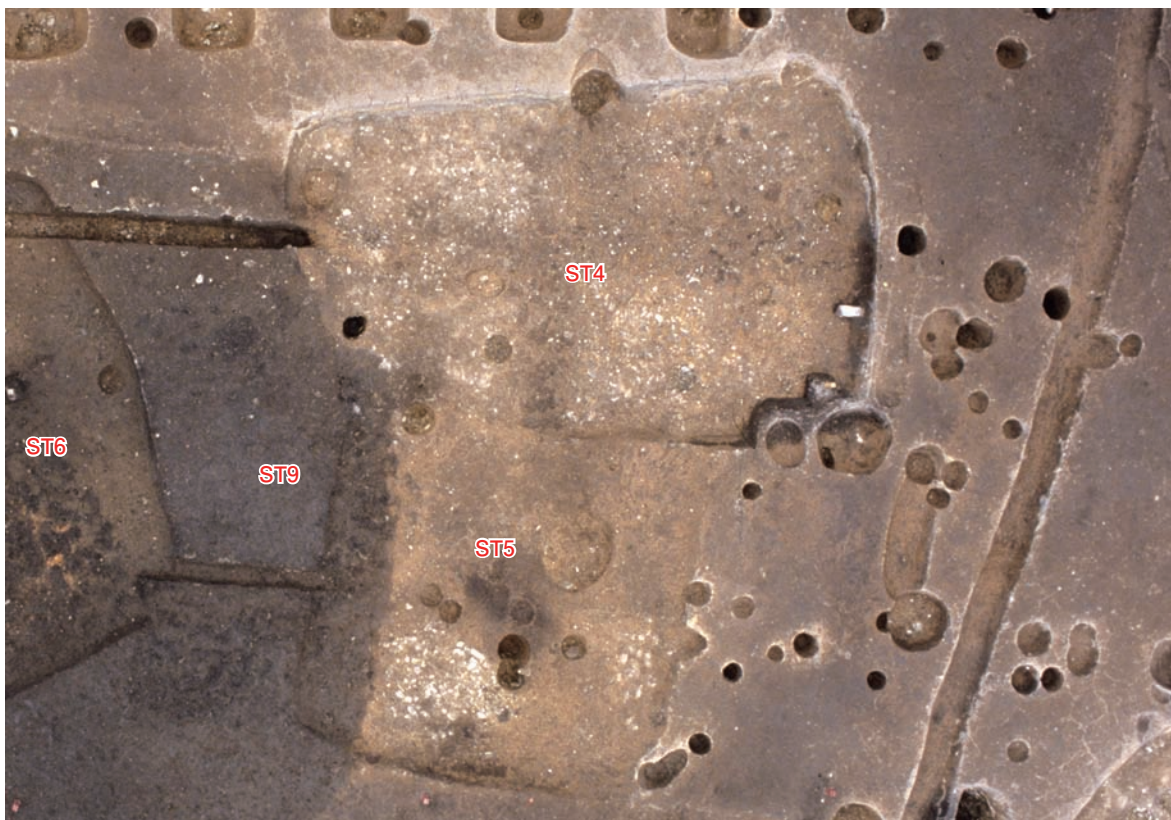


Ⅶ区 ST2・土層・南より





Ⅶ区 ST3・東より



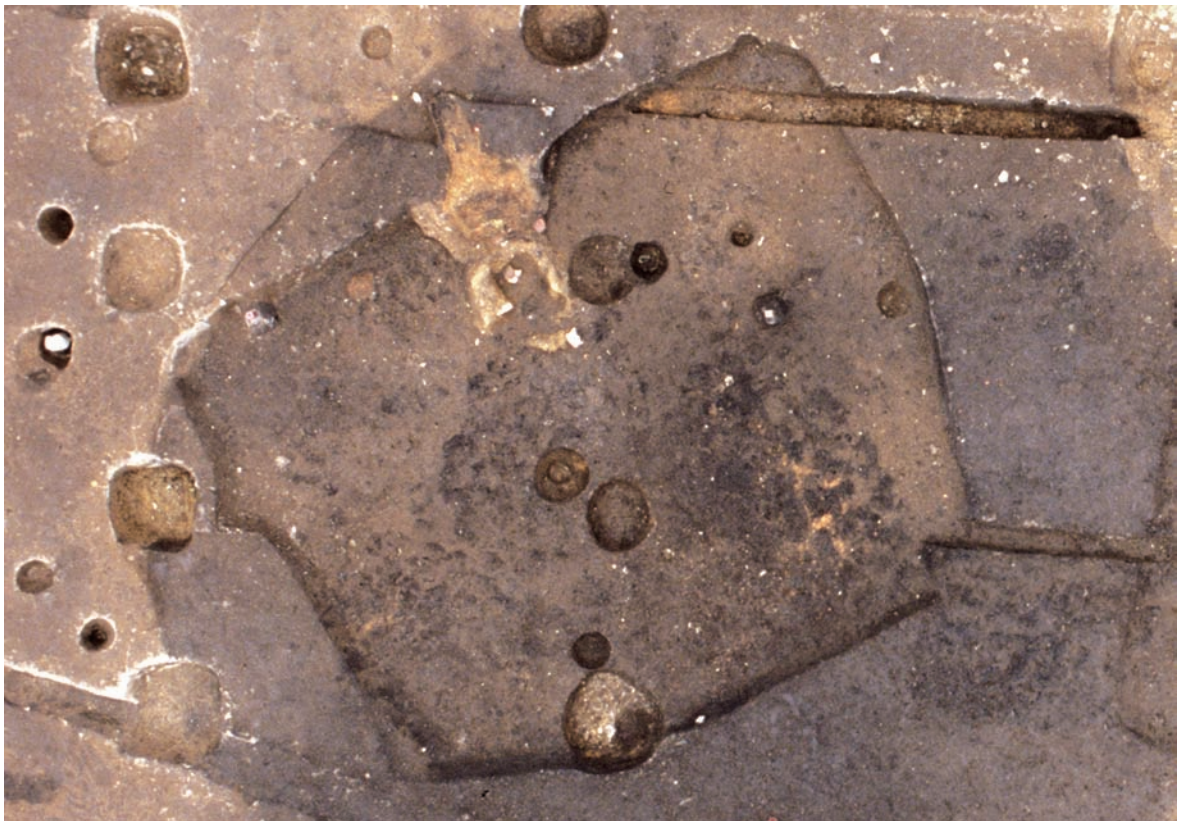
Ⅶ区 ST4・ST5・南より



写真10



Ⅶ区 ST4・土層・南東より



Ⅶ区 ST6・南より





Ⅶ区 ST6・土層・北東より



Ⅶ区 ST7・南より



写真12



Ⅶ区 ST8・南より



Ⅶ区 ST8・土層・東より





Ⅶ区ST9・南より



Ⅶ区ST10・南より



写真14



Ⅶ区SB 全景・南より



Ⅶ区SB 検出・東より





Ⅶ区 SB2・東より



Ⅶ区 SB4・南東より



Ⅶ区 SB5・西より



Ⅶ区 SB7・南より



Ⅶ区 SB7・東より



Ⅶ区 SB8・南より



Ⅶ区 SB9・東より



Ⅶ区 SB10・南より



写真16



Ⅶ区 SB11・東より



Ⅶ区 SB13・南より



Ⅶ区 SB14・南より



Ⅶ区 SB16・北東より



Ⅶ区 SG1・南より





Ⅶ区 SG2-1・遺物 (1)



Ⅶ区 SG2-1・遺物 (2)



Ⅶ区 SK15・完掘・西より



Ⅶ区 SK15・遺物 (1)



Ⅶ区 SK15・遺物 (2)



写真18



Ⅶ区 SK15・遺物 (3)



Ⅶ区 SK15・遺物 (4)



Ⅶ区 SK15・遺物 (5)



Ⅶ区 SK17



Ⅶ区 SK21





Ⅶ区 SK21・遺物



Ⅶ区 SK30



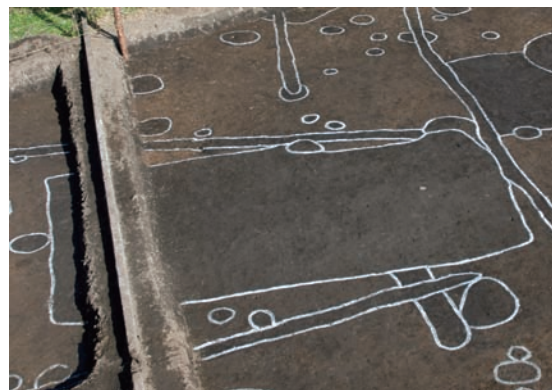
Ⅶ区 SX2



Ⅶ区 SX5・拡張・東より



Ⅶ区 SX3・東より



Ⅶ区 SX3 検出状況・南より



Ⅶ区 P1

写真20



Ⅶ区 ST1-1



Ⅶ区 ST1-2



Ⅶ区 ST1-3



Ⅶ区 ST1-4



Ⅶ区 ST1-5



Ⅶ区 ST1-6



Ⅶ区 ST1-7



Ⅶ区 ST1-8



Ⅶ区 ST1-9



Ⅶ区 ST1-10



Ⅶ区 ST1-11



Ⅶ区 ST1-12



Ⅶ区 ST1-13



Ⅶ区 ST1-14



Ⅶ区 ST1-15

※遺物写真は縮尺不同一





Ⅶ区 ST1-16



Ⅶ区 ST1-17



Ⅶ区 ST1-18



Ⅶ区 ST1-19



Ⅶ区 ST1-20



Ⅶ区 ST1-21



Ⅶ区 ST1-22



Ⅶ区 ST1-23



Ⅶ区 ST1-24



Ⅶ区 ST1-25



Ⅶ区 ST1-26



Ⅶ区 ST1-27



Ⅶ区 ST1-28



Ⅶ区 ST1-29



Ⅶ区 ST1-30



Ⅶ区 ST2-1



Ⅶ区 ST2-2



Ⅶ区 ST2-3

写真22



Ⅶ区 ST2-4



Ⅶ区 ST2-5



Ⅶ区 ST2-6



Ⅶ区 ST2-7



Ⅶ区 ST2-8



Ⅶ区 ST2-9



Ⅶ区 ST2-10



Ⅶ区 ST2-11



Ⅶ区 ST2-12



Ⅶ区 ST2-13



Ⅶ区 ST2-14



Ⅶ区 ST3-1



Ⅶ区 ST3-2



Ⅶ区 ST3-3



Ⅶ区 ST3-4



Ⅶ区 ST3-5



Ⅶ区 ST3-6





Ⅶ区 ST3-7



Ⅶ区 ST3-8



Ⅶ区 ST3-11



Ⅶ区 ST3-9



Ⅶ区 ST3-10



Ⅶ区 ST3-12



Ⅶ区 ST3-13



Ⅶ区 ST3-14



Ⅶ区 ST3-15 · 底部



Ⅶ区 ST3-16



Ⅶ区 ST3-17



Ⅶ区 ST3-18



Ⅶ区 ST3-19



Ⅶ区 ST3-20



Ⅶ区 ST3-21

写真24



Ⅶ区 ST3-22



Ⅶ区 ST3-23



Ⅶ区 ST3-24



Ⅶ区 ST3-25



Ⅶ区 ST3-26・底部



Ⅶ区 ST3-27・底部



Ⅶ区 ST3-28



Ⅶ区 ST3-29



Ⅶ区 ST3-30



Ⅶ区 ST3-31



Ⅶ区 ST3-32



Ⅶ区 ST3-33



Ⅶ区 ST3-34



Ⅶ区 ST3-35



Ⅶ区 ST3-36



Ⅶ区 ST3-37



Ⅶ区 ST3-38



Ⅶ区 ST3-39



Ⅶ区 ST3-40



Ⅶ区 ST3-41



Ⅶ区 ST3-42



Ⅶ区 ST3-43



Ⅶ区 ST3-44



Ⅶ区 ST3-45



Ⅶ区 ST3-46・47



Ⅶ区 ST3-48



Ⅶ区 ST4-1



Ⅶ区 ST4-2



Ⅶ区 ST4-3



Ⅶ区 ST4-4



Ⅶ区 ST4-5



Ⅶ区 ST4-6



Ⅶ区 ST4-7



Ⅶ区 ST4-8



Ⅶ区 ST4-9



Ⅶ区 ST5-1



写真26



Ⅶ区 ST6-1



Ⅶ区 ST6-2



Ⅶ区 ST6-3



Ⅶ区 ST6-4



Ⅶ区 ST6-4 · 底面



Ⅶ区 ST6-5



Ⅶ区 ST6-6



Ⅶ区 ST6-7



Ⅶ区 ST6-8



Ⅶ区 ST7-1



Ⅶ区 ST7-2



Ⅶ区 ST7-3



Ⅶ区 ST7-4



Ⅶ区 ST7-5



Ⅶ区 ST8-1



Ⅶ区 ST8-2



Ⅶ区 ST9-1



Ⅶ区 ST9-2





Ⅶ区 ST9-3



Ⅶ区 ST9-4



Ⅶ区 ST9-5



Ⅶ区 ST9-6



Ⅶ区 ST9-7



Ⅶ区 ST9-8



Ⅶ区 ST9-9



Ⅶ区 ST9-10



Ⅶ区 ST9-11



Ⅶ区 ST9-12



Ⅶ区 ST9-13



Ⅶ区 ST9-14



Ⅶ区 ST9-15



Ⅶ区 ST9-16



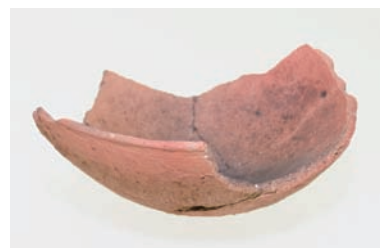
Ⅶ区 ST9-17



Ⅶ区 ST9-18



Ⅶ区 ST9-18・底部



Ⅶ区 ST9-19

写真28



Ⅶ区 ST9-19・底部



Ⅶ区 ST9-20



Ⅶ区 ST9-21



Ⅶ区 ST9-21・底部



Ⅶ区 ST9-22



Ⅶ区 ST9-23



Ⅶ区 ST9-24



Ⅶ区 ST9-25



Ⅶ区 ST9-26



Ⅶ区 ST9-27



Ⅶ区 ST9-28



Ⅶ区 ST9-29



Ⅶ区 ST9-30



Ⅶ区 ST9-31



Ⅶ区 ST9-32



Ⅶ区 ST9-33



Ⅶ区 ST9-34



Ⅶ区 ST10-1



Ⅶ区 ST10-2



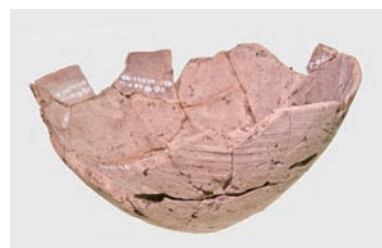
Ⅶ区 ST10-3



Ⅶ区 ST10-4



Ⅶ区 ST10-5



Ⅶ区 ST10-6



Ⅶ区 ST10-6・底部



Ⅶ区 ST10-7



Ⅶ区 ST10-8



Ⅶ区 ST10-8・底部



Ⅶ区 ST10-9



Ⅶ区 ST10-10



Ⅶ区 ST10-11



Ⅶ区 ST10-12



Ⅶ区 ST10-13



Ⅶ区 ST10-14



Ⅶ区 ST10-15・底部



Ⅶ区 ST10-16・底部



Ⅶ区 ST10-17

写真30



Ⅶ区 ST10-18・底部



Ⅶ区 ST10-19・底部



Ⅶ区 ST10-20・底部



Ⅶ区 ST10-21



Ⅶ区 ST10-22



Ⅶ区 ST10-23・24・25



Ⅶ区 ST10-26・27・28



Ⅶ区 ST10-29



Ⅶ区 ST10-30



Ⅶ区 ST10-31



Ⅶ区 SB2-1



Ⅶ区 SB2-2



Ⅶ区 SB4-1



Ⅶ区 SB7-1



Ⅶ区 SB7-1・底部



Ⅶ区 SB5-1



Ⅶ区 SB7-2



Ⅶ区 SB7-2・底部





Ⅶ区 SB7-3



Ⅶ区 SB7-3・底部



Ⅶ区 SB7-4



Ⅶ区 SB7-5・内面



Ⅶ区 SB8-1



Ⅶ区 SB8-2



Ⅶ区 SB8-3



Ⅶ区 SB8-4



Ⅶ区 SB8-5



Ⅶ区 SB9-2



Ⅶ区 SB9-3



Ⅶ区 SB9-4



Ⅶ区 SB9-5



Ⅶ区 SB10-2



Ⅶ区 SB10-3



Ⅶ区 SB10-4



Ⅶ区 SB11-1



Ⅶ区 SB11-2

写真32



Ⅶ区 SB13-1



Ⅶ区 SB13-1・内面



Ⅶ区 SB14-1



Ⅶ区 SG1-1



Ⅶ区 SG2-1



Ⅶ区 SK10-1



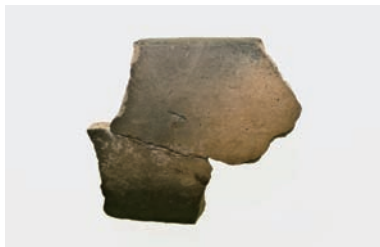
Ⅶ区 SK10-2



Ⅶ区 SK10-3・底部



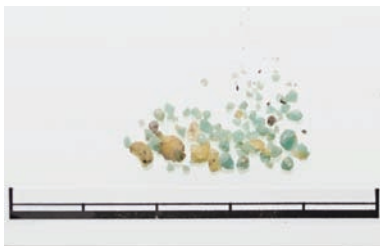
Ⅶ区 SK10-4・底部



Ⅶ区 SK10-5



Ⅶ区 SK15-1



Ⅶ区 SK15-2



Ⅶ区 SK15-3・内面



Ⅶ区 SK15-3・外面



Ⅶ区 SK15-4・内面



Ⅶ区 SK15-4・外面



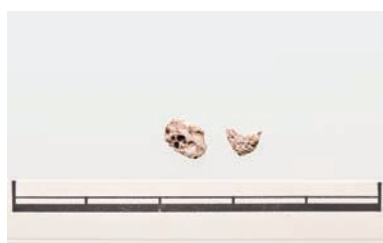
Ⅶ区 SK15-7



Ⅶ区 SK15-5



Ⅶ区 SK15-6



Ⅶ区 SK15-8



Ⅶ区 SK24-1



Ⅶ区 SK24-2・底部



Ⅶ区 SK27-1・底部



Ⅶ区 SK27-2・内面



Ⅶ区 SK27-2・底部



Ⅶ区 SK27-3



Ⅶ区 SK27-4



Ⅶ区 SK27-5・底部



Ⅶ区 SK27-6・底部



Ⅶ区 SK33-1



Ⅶ区 SK33-2

写真34



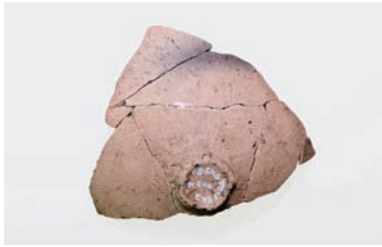
Ⅶ区 SK33-3



Ⅶ区 SK33-4



Ⅶ区 SK33-5



Ⅶ区 SK33-6 · 底部



Ⅶ区 SK34-1 · 底部



Ⅶ区 SK38-1



Ⅶ区 SK38-4 · 内面



Ⅶ区 SK38-5 · 内面



Ⅶ区 SK38-6 · 内面



Ⅶ区 SK38-4 · 底部



Ⅶ区 SK38-5 · 底部



Ⅶ区 SK38-6 · 底部



Ⅶ区 SK38-2



Ⅶ区 SD1-1



Ⅶ区 SD4-2 · 底部



Ⅶ区 SD7-1



Ⅶ区 SD7-2



Ⅶ区 SD8-1





Ⅶ区 SD9-1



Ⅶ区 SD9-2・底部



Ⅶ区 SD14-1



Ⅶ区 SD30-1



Ⅶ区 SD30-2



Ⅶ区 SD30-3



Ⅶ区 SD37-1



Ⅶ区 SD39-1・底部



Ⅶ区 SD39-2・底部



Ⅶ区 SD40-1・底部



Ⅶ区 SD45-1・底部



Ⅶ区 C8-9-18P1-1



Ⅶ区 C8-9-19P1-1



Ⅶ区 C8-9-19P1-1・底部



Ⅶ区 C8-9-19P1-2



Ⅶ区 C8-9-19P2-1



Ⅶ区 C8-9-22P1-1



Ⅶ区 C8-9-22P1-1・底部

写真36



Ⅶ区 C8-9-23P1-1・底部



Ⅶ区 C8-9-23P4-1・底部



Ⅶ区 C8-9-24P1-1



Ⅶ区 C8-9-24P1-2・底部



Ⅶ区 C8-9-24P3-1



Ⅶ区 C8-9-24P3-2



Ⅶ区 C8-9-24P1-1・内面



Ⅶ区 C8-9-24P3-1・底部



Ⅶ区 C8-9-24P3-2・底部



Ⅶ区 C8-9-24P3-3・底部



Ⅶ区 C8-9-24P3-4



Ⅶ区 C8-9-24P3-4・底部



Ⅶ区 C8-9-24P3-6



Ⅶ区 C8-9-24P4-1



Ⅶ区 C8-9-24P4-1・底部



Ⅶ区 C8-9-24P4-2



Ⅶ区 C8-9-24P4-2・底部



Ⅶ区 C8-9-24P4-3



Ⅶ区 C8-12-15P2-1



Ⅶ区 C8-12-21P2-1



Ⅶ区 C8-13-6P3-1



Ⅶ区 C8-13-5P4-1



Ⅶ区 C8-13-5P4-1 · 底部



Ⅶ区 C8-13-7P3-1 · 底部



Ⅶ区 C8-13-7P4-1



Ⅶ区 C8-13-8P2-1



Ⅶ区 C8-13-10P8-1 · 底部



Ⅶ区 C8-13-10P3-1



Ⅶ区 C8-13-10P3-1 · 底部



Ⅶ区 C8-13-20P4-1 · 底部



Ⅶ区 C8-17-5P7-1



Ⅶ区 C8-17-5P7-1 · 底部



Ⅶ区 C8-17-12P1-1 · 底部



Ⅶ区 C8-17-13P3-1



Ⅶ区 C8-18-3P3-1



Ⅶ区 C8-18-7P4-1 · 底部

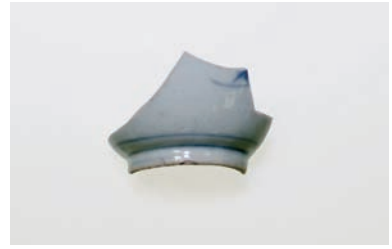
写真38



Ⅶ区 SX1-1



Ⅶ区 SX1-2



Ⅶ区 SX2-1



Ⅶ区 SX2-2



Ⅶ区 SX2-3 · 底部



Ⅶ区 SX2-4



Ⅶ区 SX2-5 · 底部



Ⅶ区 SX2-6



Ⅶ区 SX3-1



Ⅶ区 SX3-2



Ⅶ区 SX3-3



Ⅶ区 SX5-1 · 底部



Ⅶ区 SX5-3



Ⅶ区 SX5-4



Ⅶ区 SX5-5 · 底部



Ⅶ区 SX5-6 · 底部



Ⅶ区 SX5-7 · 底部



Ⅶ区 SX5-8 · 底部



報告書抄録

ふりがな	きねんいせき							
書名	祈年遺跡Ⅲ							
副書名	国道195号道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第3分冊 VII区							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第125集							
編著者名	前田光雄							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL 088-864-0671 FAX 088-864-1423							
発行年月日	2012年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
きねんいせき 祈年遺跡	こうちけんなんこくしほしぎ 高知県南国市東崎他	39204	0166	33° 35' 10"	133° 38' 28"	20070401 ～ 20091225	21,707	国道195号線改築に伴う緊急調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
祈年遺跡	集落	弥生時代後期 古墳時代後期 古代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 竪穴状遺構 道路状遺構	弥生土器、土師器、須恵器、壺棺	弥生時代後期の集落及び壺棺22基を検出。古墳時代後期の竈付き竪穴住居跡県下最多。古代道路状遺構検出。			
要約	<p>弥生時代竪穴建物跡約40軒、古墳時代竪穴建物跡約30軒、古代掘立柱建物跡約50棟である。長岡台地での調査事例としては最大規模の内容となった。</p> <p>弥生時代は後期中葉、後期後半、終末から古墳時代初頭にかけての3区分である。後期後半の住居跡の規模は円形で径8～10mを超える。住居跡以外に壺棺を22基検出した。集落の中央部に纏まる。壺の口を割り別の土器で蓋をしたもの、壺にさらに一回り大きな土器をすっぽり覆い被せ、入り子にしたものなどがあった。壺は穴を掘り、壺を安定させるために穴の底に数個の石を置いたものなどもあった。高知県下では最も多い。</p> <p>古墳時代後期終末の住居跡は27軒検出している。方形で一辺5、6mの中型の住居跡で占められ、北側部に造り付けの竈を有する。高知県下では最も多い。</p> <p>古代では掘立柱建物跡が50棟余りである。柱穴の形状が円形、方形のものがそれぞれ認められる。径50～70cm程の掘り方を持つものが多い。古代の中で最も重要な遺構は、道路状遺構である。2条の溝の幅員約6m程あり、溝自体は幅約70～90cm、深さ30cmの規模で南北方向に縦走する。上部は後世に削平を受けているために、轍跡等は検出できなかった。古代香長条里に則し、国分寺の東側に直線上に通じることから、土佐国の国衙に通じる主要道路の可能性が極めて高い。今まで高知県では古代官道関連の調査例はなく、初めての検出例である。</p>							



高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集

## 祈年遺跡Ⅲ

国道195号道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第3分冊 VII区

編集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター  
発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター  
高知県南国市篠原1437-1  
電話 088-864-0671  
発行日 2012年3月22日  
印刷 共和印刷株式会社











